

の形。
「椎柴」椎の木の叢立ちたるを云ならむと云。
「白椋」椋に赤椋、白椋の二種あり、白椋は葉狭く小さくして椎の如く、鋸齒あり、材の色稍白く、最も堅くして舟車などに造る。
「濡れたるやうなる」葉の色のごあひの感じ。
「心あらむ友もがな」物の趣を解し得る友でも斯う云時にそばに居ると宜い来てくれるといふ、と友を戀ふる心なり。
「頼もしう」浮き／＼しない人との感じを出したる語。
「すける」浮かれ執着すること。
「片田舎」中心ならずかたよつた田舎。
「色濃く」しつこく。
「ねち寄り」無理にでも

そばへ寄ると云事をあらはす。
「立ち寄り」立ちば意を強める爲に添へたるのみ。
「あから目」よそ目。
「目守りて」見詰めて。
「跡つけ」足跡つけ。
「祭」賀茂の祭。
「めづらか」賞詞にあらず。變てこ、と云意。
「見事」見るべき事、即ち、祭の行列を指す。
「いと遅し」通るには大分間がある。
「棧敷不用なり」棧敷に居る必要は無し。
「人を置きたれば」行列が來たら知らせる爲に見張人を置きたるなり
「渡り候ふ」行列が來ました。
「落ちぬべきまで」棧敷から。
「藤張り出でて」藤を前へ押しつき出して體を

目の前に淋しげになり行くこそ、世の例も思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。かの、棧敷の前をこゝら行きかふ人の、見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人數もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなむ後我が身死ぬべきに、定まりたりとも、程無く待ちつけぬべし。大きなる器に水を入れて、細き穴をあけたらむに、滴る事少しといふとも、怠る間無く洩り行かば、頓て盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日は無し。されば柩を嚮ぐ者、作りてうち置く程無し。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、有難き不思議なり。しばしも世を長閑には思ひなむや。「繼子立て」といふものを、雙六の石にて作りて、立て並べたる程は、取られむ事いづれの石とも知らねども、數へ當て、一つを取りぬれば、其の外は遁れぬと見れど、又々數ふれば、彼此間抜き行く程に、いづれも遁れざる、に似たり。

兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背けり草の庵には、靜に水石を玩びてこれをよそに聞くと思へるは、いとはかなし。靜なる山の奥、無常の敵きはひ來らざらむや。其死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ。

【譯】花は必ずしも盛りの花だけを見るべきもので無い。月は必ずしも片翳無き明月のみを見るべきもので無い。雨夜に、雨に對して、あア月があつたらばと、無き月を慕ふと云事もやはり味深く情趣深き事である。花の頃家に引つ籠て春色の様子を知らないで居ると云事しやはり味深く情趣深き事である。盛りの花よりは、もう直き咲くと云頃の櫻の梢、花が散つて色衰へた櫻の木のある庭のけしきなどが、趣味が多いのである。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるにはやく散り過ぎにければ」とも、「さばる事ありてまからで」と書いたのも、「花を見て」と書いたのより趣が劣つて居るのぢや無い。花の散るのを惜み慕ひ、月が山の端に傾くのを惜み慕ふ、と云人の習慣は、これア無理ぢや無い、それはそれで尤なことではあるが、人々のうちで殊に物のわからぬ人は、花の盛り過ぎたのを見ると、「あゝもうこの枝あは枝の花が散つてしまつた。もう見る所は無い、つまらぬ」などと屹度云ふぜ。そも、月花によらず、どんな事でも、盛りの時よりは、その事の始めと終りが味があるものである。男女の戀情と云ものも、たゞ單に、合歡其の事のみが戀では無いのだ。思ひつつも到頭逢はずじまひになつた其の辛さを思つたり、逢ひは逢つたがそれはホンの一時の事で今は縁が離

あらはし見る様なり、或は籠半垂れたる場合にも體をつき出す爲にその半の籠が前方へ突出る、と云様か。ともかく棧敷の前方あけつばなしの様にはあらぬなり。
 「一事」行列のどれどもども悉く見盡さむとするなり。
 「とありか」り「あアだ斯うだ、なり。批評するを云。
 「物毎に言ひて」目につく物毎に言ひて。
 「渡り過ぎぬれば」行列が通り過ぎてしまふと。
 「又渡らむまで」次の行列が通るまでは奥に居よう。
 「下りの」棧敷を。
 「物のみ」この「物」まづは行列の物と解くべし。

れてしまつたと云時、その過去のいたづらになつた契を嘆つたり、或は長き夜の夜通し戀人を見てども來らず朝まで獨り待たされて居たり、或は身分低き者ながら遙に高い貴人を戀うて居たり、或は又、今は落魄して淺茅生ふる宿に居て昔盛りであつた頃の戀を回想す。斯う云やうなのが、眞に色を好むと稱すべき事であるのだ。片翳無き満月をひろくとした所で眺めたのよりも、月の出が遅くなつて、待つてもくく出ぬ、明方近い頃になつてやつと出た其の月、其の月は實に深い意味をもつてゐるやうで、なんだか青みがかつたやうに見える。それが深山の杉の梢の所にかゝつて見えた其の木の間から見える月の形、或は又時雨が降つて降りつゝ一方にはやいくらか空舞れて叢がたつた雲に隠れたまゝの月の色、斯う限の有る月が、此上無く感が深い。椎の叢立ちや白樫の木などの葉が濡れたやうな色に見える其の葉の上に、きら／＼と月の光つてる景色を見ると、實に其の感身にしみ渡つて、あゝ趣を解する友でも居たらなアと、隠棲の身は、ふと都が戀しく思はれる。一體月や花を、そんなに目ばかりで見れば見るべきものぢや無い。春は春景を見るべく出かけないで、家の中に居たつかりで春げしきを思ひ、月の夜は、外に出ないで寢室の中に居て、今夜の月はどうだらうと想像して居るのが、まことに頼もししい人即ち物の形にのみ浮き／＼しない人と思はれ、又趣のある人とも思はれる。品よき人は、何事にも無性に浮かれ執着する様子は見えないもので、物を面白がる様子も上じりをしたやうな工合で、夢中になつて狂ひ興すると云ことは無い。何事にもしつこい面白がりやうをするのは田舎者に限ることだ。田舎者が花の木陰に來て花を見る時には、無理にもその花のそばへ近寄り、寄つて、わき目もふらず見詰めてそれから

「ゆゑしげなるは」堂々たる人は。
 「眠りて」必ずしも睡眠を指さず、瞑目なり、必ずしも瞑目を指さず目を見張つて見ると云ことをせず不熱心に見て居るさまを強く云ひたるなり。
 「未々なるは」身分低き者は。
 「宮仕に立ち居」主人の用に立ち居つ働くを云。
 「様悪しくも」不體裁にも。
 「及びかゝらず」前へ體を伸ばししかゝると云様をせず。
 「わりなく」無性に。
 「何と無く」見せびらかすと云感じ無きを云ふ「葵かけわたして」賀茂の祭の日には家々の御簾柱などに二葉葵を長く、連れ桂の枝につけて

酒を飲む、連歌をする、大騒ぎだ。しまひには大きな杖を不心得にも折り取つちまふ。こんなことをするのは田舎者に限るのだ。かう云連中が夏、泉のあたりへ涼みに行くとき、泉をながめて涼を取るのでは物足りないので泉の中へ手足を入れひたす。雪見の時には、わざ／＼地へ下りて雪を踏んでみて、いらぬことに美しい雪に足あとをつける、と云つた類で、どんな物でも、離れて客観すると云ことは無い。こんな輩が賀茂の祭を見て居た様子を、私が見たことがあつたが、やどうも實に變挺なものだつたよ。彼等は「まだくなく」行列は來ないよ。其の間は棧敷に居る必要は無い」と云つて、奥の方の構で、酒を飲んだり物を食つたり圍碁や雙六なんか遣つて遊んでゐる。この間行列が通りかゝつたら知らせると云つて、棧敷に見張人を置いてあるから、そのうち行列が來かゝると、その見張人が「参りましたよ」と知らせる。すると彼等は皆喫驚して先を争つて棧敷に走り上つて、棧敷から落ちさうになる程體を乗り出して、前にかけてある籠を頭で押し出して、互に押し合ひへし合ひ、行列の一々を一つも見落すまいと一所懸命に見詰めて、あれアどうだとか、此れがどうだとか、見るもの毎に一々批評して、行列が通つてしまふと、今度の行列が通るまでは又奥に居よう」と言つて棧敷を下りた。彼等はたゞ行列そのものだけを見ようとするのだ。かう云田舎者と、都の人とは見方が違ふ。都の人の品のいゝのは、大きな目をして一所懸命に見などはしない。若くて身分の低い者等は、いろ／＼な用があつてその爲に祭をよそに立働いてゐる。人の後に侍してゐる者は、行列が通るからとて、後からさし出て不體裁に身を前へ伸ばして見よう等とはしない。都の人は上も下も誰も無性に見ようとする人は無い。私も祭は面白い

懸くるなり。
 「忍びて寄する車どもも」人目を忍び誰ともわからぬ様にて祭見物の車を行列通る通の傍に寄するなり、所謂物見車なり。
 「ゆかしきこと誰が乗つてるか」と知りたきなり。
 「をかしくもきらきらしくも」趣味ある装ひしたる人あり、唯光彩燦爛たる装ひしたる人もあり。
 「行きかふ見るも」行きかふ人を見るも。
 「所無く」所狭くと云ふりも強き語。ありたけの場所を悉く塞ぎ居ること。
 「らうがはしさ」混雑。「世のためし」賑やかに榮えたるが見るまに淋しく衰へ行く其の狀態に、世の中の現象のい

と思ふ。しかし必ずしも祭の行列のみを面白いとは思はぬ。行列以外の光景が面白い。町を見渡すと、わざとらしく無く葵がどの家にも懸けてあつて、町の有様がなまめかしい。かゝるところへ、まだ夜がハッキリ明けてしまはぬ頃、路傍へ見物の車が来る。誰が乗つてるとも人に知られぬやうに忍んで来るのがある。あの車中の人は誰だらうと知りたい氣がするので、あの人が此の人かななどと考へて注意すると、其の車に従つて牛飼や下部などの中に知つた顔も見える。あゝあの人の車だと思ひつく。この心持も面白い。町を歩く人々の姿、或は趣味あるなりをしてる人もある或はたゞ燦然としたなりをしてる人もある。いろ／＼なりふりをして往來するを見て居るのも、退屈ぢや無い。この往來の人も面白い。又祭が済んで、もう日が暮れると云頃には、並び立つて居た物見車、又ギツジリ並んで居た人々も、どこへ行つてしまふのやら、直きにまばらになつて、物見車があちこち曳き去る混雑もそのうち片附いて町が靜になると、頓て家々の簾や棧敷などに敷いた畳も取り拂ひ、見て居る間に淋しくなつて行く。この光景を見ると、嗚呼なんでも世の中の事の盛衰の有様はこの通りだと、盛衰の理がしみ／＼思はれて深い感が起る。かう云やうに町の有様を見たのを眞に祭を見たと云得るのだ。まだ祭を見て私はこんな感も起す。あの、棧敷の前を大勢往來する人、その中に自分の知つて居る人がな／＼澤山ある。これを見ると斯う云ことを悟る。世間の人間の數と云ものは、そんなに多いものぢや無いのだ、と云事を悟る。假に、この世間の人達がみんな死んでしまつてから自分が死ぬのだ、即ち自分が最後に死ぬのだと斯う定まつた、としてみても、世間の人と云ものは案外少いから、最後の番だと云つても直きのことだ。直

ろいろの類例が思ひ合はされ會得する所あるなり、盛衰の理を思ふなり。
 「かの棧敷……」この「かの」は下の「人」にかかる。
 「こゝら」澤山。
 「待ちつけぬべし」其の時が来る。
 「舟岡」上京蓮臺寺の東の岡、葬地なり。
 「さらぬ野山」さうで無い野山。即ち、其の他の野山。
 「送る數」葬送の數。
 「うち置く程無し」すてて置く時間無く、すぐ賣れて行くなり。
 「まゝ」立て「双六」の石にてする遊び。□印より並べ始むとせむに、左へ、黒一、白一、黒三、白五、黒二、白二、黒四、白一、黒一、白三、黒一、白二、黒二、白一、黒一

きに自分に死ぬ番がまはつて来るに違ない。大きな器に水を入れて、これに細い穴をあけたとする。さうすると、其の穴から水の滴るのは少くても、絶えず水が洩つていつたら、直きに器中の水は無くなつてしまふのだ。都の中に大勢居る人が、誰も死なぬいと云日は一日も無からう。一日に一人や二人死ぬんぢや無い。鳥部野や舟岡の共同墓地、又其他の野山の墓地にも、死人を葬送する數の多い日はあつても、葬送の無いと云日は無い。だから柩を賣る者が、柩を作つてそこに作りツげなしに置いておくに云時間はない。ドシ／＼賣れて行くのだ。若いからな／＼死なぬかと思ふと、さうでも無い。若い人も死んで行く。強健な人はな／＼死なぬかと思ふと、さうでも無い。強健な人も死んで行く。死期と云ものは意外に来る。自分が今日までかうして死を遁れて生きて来たると云のは、もツけの幸でむしろ不思議なことだ。當分は死ぬまいなどとしてしばらくでも悠然とした心持で居られるものか。あの「まゝ子だて」といふものを、雙六の石で作つて、石を置き並べた其時は、どの石が十めにあつて取られるのか解らないが、さて遊びを始めて、數へて十めに當つたのを一つ取る。すると、先づ外の石は助かつたと云やうな氣がするが、又々數へると、さうしてあの石此の石と抜き取つて行くうちには、どの石も取去られざるは無い。恰度人間の死ばあのやうなものである。戦に出る武士は、自分は「死」に近附いてると云事を知つて家の事も我身の事も忘れる。しかし世と没交渉になつて、草庵にこもつて居る人は、靜に、水や石を樂しんで、戦争があつても、おれば斯うして命安く悠々として居ると戦をよそ事のやうに聞いている身の上だ、と思つて居るのはまことにばかでないことなのだ。其の隠遁者もやはり戰場に立つてると同じなの

だ。静な山の奥だつて「死」と云敵は殺到して来ないことは無い。「死」に面して居る事は、戦陣に進んでるのと同じなのだ。

【評】 想と云ひ文と云ひ實に妙であるが、更に其の上に、論中景あり、又景より論を抽き来る。先づは花月に對する趣味を説き、引いて男女の情に及び、そこに小景を挿み、さて、冒頭に花月を併べ擧げて次には花の方だけ云つておいた其の缺をここで補つて「限ある月」を甚だ印象的な筆を使つて寫した。そして月花の事を結ぶとなく自ら結んで、それから田舎者の例をもつて来て、其の祭見る様を辛辣に書いて罵つた。一轉、何と無く葵かけ渡して、例の静穩な享樂の氣分で、祭の前後の光景を書いて、さて其の祭の終りの光景から感じた哀感から、無常感にうつつた。人は死ぬ、人は死ぬ、と例の「滅亡」を諸人の前に突き附けた。實にこの思の波が、美しく色々光つて、韻律を成して居るでは無い。

と並ぶ。すなはち圖の如くす。さて▲印つけたる石より左の方へ一つづつ數へて十にあたりたる石を取り行けば白き石漸次無くなり後には◎印付けたる白石一つのみ残る、其時この石より改めて右の方へ數へ行きて十にあたる石を抜き行けば黒石次第に除かれ、◎印の白石一つのみ残るなり。

「花は盛りには月ばくまなきをのみ見るものか」と云主張は、ともすると、人は「すれもの」とのみ思ふ。多くの人が善と云ことを故更に惡と云を快しとする「すれ者の論」と思ふ。私にはじめはさう思つて居た。しかし決してさうでは無い。まことに斯くの通りである。但し兼好が、盛りよりも前後の方がよいと云やうに優劣を立てたのは、これ又前後の趣に偏執して盛の趣を認めぬと云事なのだから、公平な大きな趣味では無いと云人があらうが、これはあまりに棄てられた趣を引上げて紹介せむとする、稍又反抗的の氣分も交つて、斯う書いたのである。詩的情趣として尤なことである。

「問拔き」列んでるものの中其の一を抜き取るを云。「に似たり」人の死ぬのが。

は誤解である。その恨をしみる、抱いて、凡夫凡婦の心で悲しさうにしてゐる。そこが好色の實粹であると云のだ。西鶴の「艶隠者」の「岡崎の市隠、眞葛原の艶男」のところにも「この道の至りといはゞ、色に溺れ情にひかれ遊を事となすにはあらず。漸々入りては人の心ばせを知り、世の儘ならぬ常を悟り、契りしかれこの夢なる事を思ふは此はじめたり。初春の朝我が間に曙の鐘をあらはれみ、宿の軒端に霞を見るもをかしく、秋の初夕、佛前に魂祭るわざ、物すこき暮の冬も、月を見る心となつて、其の色里の便り聞かぬ事も、かへりて樂しむは、至道に入るの門たり」とある心も、こゝの論と同じである。

【補】 「心あらむ友もがなと都戀しう覺ゆれ」春湊浪話に、この段より伊賀國見山の庵にて書きたりと云説に賛し「こゝの言をまことに國見山の庵にて書きし筆のすさみとおのづから見えたり」と云へり。

「すべて月花をばさのみ目にて見るものか」と云節と同意の事を佐藤一齋も云つてゐる。即ち言志録に「人看月、皆徒看也。須於此想ニ宇宙無窮概」と書いてゐる。そして其下に小さく「乙亥中秋月下録」と書き添へてゐる。即ち月に對して深い感じを得て其場で書いたものである。又言志後録に「面月而看月、不如此背月而觀月。近花而看花、不如此遠花而瞻花」と云つてゐる。又同書に「看月、觀清氣也。不在圓缺晴翳之間。看花、觀生意也。存於紅紫香臭之外」と云つてゐるのは、兼好のこゝの言を更に具體的に表白したものである。

「さやうの人の祭見しさまいとめづらかなりき」と過去に書いてるところは、想像の文で無く、確に兼好が嘗て見たことを書いてゐるのだ。一日から云連中と一緒に居たので、其の時

の不快を、こゝで勃發させたのだ。こゝの叙事は、全く具體的である。田舎者がガタ／＼してある。其のそばに兼好が心の一方に彼等に對して不快感を起し、而して一方に感傷的な心持で祭を見物してゐる、と云光景を想像するのも面白い。

「何と無く葵かけわたして、この「何と無く」の語が好い。もうどうしても、外の語ではいけないのだ。この語で前節の罵倒の心持が、忽ちシンと落着いて、祭の朝の量を眺めさせるところは、えらいものである。『牛飼下部などの見知れるもあり』と云ところ、兼好の心持がよくわかる。思はずニタと笑つてる様子。『をかしくも』『きら／＼しくも』と二通りに往來の人を簡叙したが、この見方も面白い。祭の終りの光景、よく其の感じが出て居る。私は幼少の折「物のあはれ」と云のをも感じたのは全く、東照宮の祭禮の終る頃の心持であつた。これは誰でも經驗があらう。其土地の祭の終りのあはれさは、幼き者をして、泣く以上の悲哀を覺えさせるものだ。兼好はこの心から無常觀を強められて來た。世の人かすもさのみは多からぬにこそ」と云事を觀じたところは、必ずしも合理的では無いが面白い。

第三百三十八段

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、或人の、御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色も無く覺え侍りしを、よき人の爲給ふことなれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が「かくれども甲斐なきものは諸共にみすの葵の枯葉なりけり」と詠めるも、母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に「枯れたる葵にさして遣はしける」とも侍り。枕の草紙にも「來し方戀しきもの。枯れたる葵と書けるこそ、いみじく懐しう思ひ寄りたれ。鴨の長明が四季の物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける、おのれと枯るゝだにこそあるを、名残無いくいかゞ取り棄つべき。御帳にかゝれる薬玉も、九月九日菊に取りかへらるゝと云へば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳のうちに、菖蒲、薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て「折ならぬ根をなほぞかけつる」と辨乳母の云へる返事に、「あやめの草はありながら」とも、江侍従が詠みしぞかし。

「さるべきにや」といふべきものかな。
「周防内侍」後冷泉天皇に事へたる人、周防守平棟仲と云歌人の女なり。
「かくれども……」後の葵によりて戀の情を述べたる歌なり。
「かくれども」には心に懸けると云ことを云かけたなり。
「みす」には見すと云かけたなり。
「葵」には、逢ふ日がかけたなり。
「枯葉」の「かれ」に「離れ」をかけたなり、逢ふ日の途絶えたるをいへるなり。
心にかけて思つて居てもダメだ逢ふ日が絶えてしまつた、と云なり、而して其中へ、あのかけてある葵を諸共に見ることも出來ずと云心

「後の葵」祭後につけ残しある葵を云。
「色も無く」無愛想。

【譯】 祭が済めば、後の葵と云つて、葵を懸け残しておくことは要らぬことだと云つて、或人が御簾にかけてあるのを皆人をして取らせられましたのを、私は目撃して、どうも無愛想

をも飾りに挿みたるな
「母屋」屋の中の中央の
間。
「家の集」其人獨りの歌
集を云、すなはち周防
内侍の集なり。

「古き歌の詞書に……」
新古今卷十四、

はやう物申しける女
に枯れたる葵をみあ
れの日遣しける

實方朝臣

古のあふひと人は咎む
ともなほそのかみの今
日ぞ忘れぬ
かゝる類例多くあるべ
し。

「なつかしう」枯葵に注
意したる清少納言の心
を兼好がなつかしが
なり。

「思ひ寄りたれ」注意し
たものだ(枯葵に)。

「鴨の長明」鴨社の氏人
の家に生る、管絃に通

な事と想ひましたなれど、然るべき人が爲ること故、さうすべきものかも知れぬと思つて居ましたが、調べて見ると、やはり後の葵は懸けておくべきものだと言事がわかつた。周防内侍が「かくれども甲斐なきものは諸共にみすの葵の枯葉なりけり」と詠んだのも、母屋の御簾に懸け残された葵の枯葉を見て詠んだと云ことが、内侍の家集に書いてある。古い歌の詞書に、「枯れたる葵にさして遣はしける」とも書いてあります。枕の草紙にも「來し方戀しきもの枯れたる葵」と、過去の戀しきものを挙げた中に、枯れたる葵、即ち懸け残されて枯れてる葵を數へてゐるのは、よくまああれに注意して呉れたと、清少納言の心がなつかしい。鴨の長明の四季物語にも「玉だれに後の葵はとまりけり」と云歌が書いてある。自然に枯れるまで残してあつて、其の枯れたのでも、其儘にしてあると云習慣なのに、何も残さずスツカリ取棄てさせると云ことがあるものか。御帳にかけておく薬玉の菖蒲も、九月九日に菊に取りかへられると云ことだから、端午の菖蒲は九月九日の菊の時までも、残して置くべきものだ。枇杷ノ皇太后宮が御かくれになつて後に、古い御帳のうちに、菖蒲や薬玉(二つに分けて云つてあるが、薬玉に菖蒲がさしてあるのを云)などが枯れて其儘に附けてあるのを見て、「折ならぬれをなほぞかけつる」とそれに寄せた歎きの歌を、辨ノ乳母が詠んだ。其の返歌に、「あやめの草はありながら」と云歌を、江侍従が詠みもしたんだ。

【評】 前の段の祭から、又祭のあとの光景を云つたのから、「後の葵」を主題にして來たのである。後人が段を切つたものだから、餘程この繋がり工合の味が減つて居るが、祭の始終を書いて、祭の祭えが衰へて了つた、と云ことを描いて、それから其の名残として「後の葵」

が残つてゐる事に就て論じ來るところに面白みがある。

兼好は滅亡を判然見て居る。滅亡を味ふことも知つてゐる。しかし人間がナマイキに「滅亡の主動力になることを憎んだ。葵、それを残しておくことに、力を入れて賛成して居る。滅亡を知りつゝ執着をも知つてゐる、が大きい所なのだ。空相を見、色相をも見得る人間なのだ。又、彼はこの葵が追々枯れて行くところ、枯れ切つた葵が、いつまでも残つてゐる、その衰相をも味ひたいのだ。

兼好が誰かよき人の葵を取らせたのを見て、不平で、それから不可取と云事を云ふ爲に、わざ／＼調べないでも、この事を心がけて本を見たらしい所が見えて、面白いでは無いか。一寸鴨外さんの「大発見」と云つた調子がある。

げ、

この歌の葵は逢ふ日「かかれても」はやはり「離れても」をかけたるにて、疎遠になりても意なり、御簾に後の葵はまだとゞまつてゐる、たとひあなたとの仲は疎遠になつてしまつても、あなたの幻影だけでも通ひ來よ。

「おのれと」自然と。
「あるを」其儘にしてあるのを。

「薬玉」種々の香料を玉にして、造花を結び付け、五彩の絲の八尺ほどなるを垂れたるもの、藤又は柱などにかけて邪氣を避く、端午にはこれに菖蒲を添へ、重陽には菊を添ふ。

「菊に取りかへらるゝ薬玉にさした菖蒲を。」

「四季の物語」長明大原山に入り居りし頃四季月々の景色、人情の移變など見聞く毎に、昔見し大内の年中行事を回想して書きしものなり、この書世に傳はる所二種あり、四巻物の方は後人の偽作なり。
「玉だれ……」四季物語に曰く「和泉式部小町の大将に忘れまゐらせて、又異方のうへ宮人に馴れものし給ふを、まのあたり見るにわびしきとうち腹立ちて、六月の中の七日の夕さりがた、御階の上の高欄に、童御簾にありしを取うでかなぐり棄てたりし葵の枯葉に添へて、少將内侍の許行くにことつけて言ひやりけるとなむ
玉だれに後の葵はとまりけり枯れても通へ人のおもか

「菊の折」菊の時節。九月九日の重陽に菊を藥玉につくるなり。
「枇杷皇太后宮」藤原妍子のこと、三條天皇の中宮なり、道長の第二女、後年枇杷殿と云に住む、萬壽四年九月三十四歳にて崩す、枇杷殿は今の蛤御門内梅林の邊に在りしなり。

「折ならぬ根を」千載集卷九、哀傷歌の中に、
枇杷どの皇太后宮わづらひ給ひける時所をかへてこゝろみむとて外にわたり給ひけるを、かくれ給ひて後、陽明門院一品親王と申しける枇杷殿に歸り給へりけるに深き御帳のうちに菖蒲くす玉などの枯れたるが残りけるを見つて詠み侍りける

菖蒲草涙の玉にぬきかへてをりならぬれをなほぞかけつる
玉ぬきし菖蒲の草はありながらよどののはあれむものとはや見し
此贈答の歌を云へるなり。

「あやめ草」の歌の「根」は菖蒲の根と泣く音と云かけたり。「ぬく」とは玉を緒に貫くこと、こゝは玉を草に貫く、即ち草を玉に通すこと、あやめ草は藥玉に通してかけてあつたが、今は藥玉ちや無い、その代りに我々の涙の玉に通すのだ、そして、玉を見て涙の玉とすぐ思ふ悲情なり。時節はづれの根(菖蒲の)をやはり引續いてかけてあるのだ。「玉ぬきし」の歌の「よどの」は夜殿なり、皇太后寢室なり、夜殿荒る、とは后かくれ給ひて、寢殿荒廢するを云、この「よどの」は地名の「淀」をいひかけたなり、淀は菖蒲の名所なり、玉(こゝは藥玉)に通した菖蒲の草は依然としてありながら、この皇太后宮の寢室が主を失ひて荒廢して行くやうにならうとは思ひもかけなかつた。

辨乳母

江侍從

第三百二十九段

「五葉」五葉の松。針葉五つづゝ着く。

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花は一重なる、よし。八重櫻は、奈良の都にのみ有りけるを、此頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野

左近の櫻

「左近の櫻」宮中紫宸殿の御階の前の右(殿より見て)に橋あり、左に櫻あり、右近の橋、左近の櫻と云。左近右近は左近衛、右近衛の略なり、左近衛の陣をまうくる方にある櫻、右近衛の陣をまうくる方にある橋と云意なるべし。
「こちたくしや」こしく「れちけたり」すなほの反對。
「植ゑすともありなむ」植ゑなくともよい。
「遅櫻」遅く花咲く櫻。
「むつかし」ムサカ〜として厭な感を云。
「匂ひ」色に云。
「咲き合ひて」一緒に咲いて。
「覺劣り」興感が櫻より劣る。
「氣おされて」壓倒されて。

の花、左近の櫻、皆ひとへにてこそあれ。八重櫻は異様のものなり。いとこちたく拗けたり。植ゑすともありなむ。遅櫻又すさまじし。蟲のつきたるもむつかし。梅は、白き、薄紅梅、ひとへなるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の匂ひめでたきも、皆をかし。遅き梅は、櫻に咲き合ひて、覺劣り、氣壓されて、枝に萎みつきたる、心憂し。「一重なるが、先づ咲きて散りたるは、心疾く、をかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなむ、軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりの若楓。總て萬の花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘、桂、いづれも木は物古り大きなる、よし。草は、山吹、藤、杜若、撫子。池には、蓮。秋の草は萩、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、われもかう、荳蔻、龍膽、菊、黄菊も、葛、朝顔、いづれも、いと高からず小やかなる垣に、繁からぬ、よし。この外の、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見慣れぬなどいとなつかしからず。おほかた何もめづらしく有難きものはよからぬ人

のもて興するものなり。さやうの物、無くてありなむ。

【譯】家に植えておきたい木は、松、櫻である。松は五葉の松も宜い。櫻は一重のが宜い。八重櫻は、もとは奈良の都にしか無かつたのを、近來世上に植ゑたのだ。吉野山の櫻も、御所の左近の櫻も皆一重なのだ。八重櫻と云ものは變挺なものだ。まことにヤ、コシくつて、スラリとして居ない。あんなものは、植ゑなくとも宜い。遅櫻もどうも無趣味だ。花の盛りには毛蟲などがわくなど厭だ。梅は白いのが宜い。又薄紅梅も宜い。ひとへの花なのが早く咲いたのも、又八重の紅梅の色の華麗なもの、どちらも面白い。遅く咲く梅は、櫻の咲くのと一緒になつて、櫻と比せられて興感が劣り、櫻に壓倒されて、咲いてるのが枝に弱々しくかじり附いたやうな風に見えるのは、見て苦痛だ。定家卿は、「梅のひとへのが、眞先がけて咲いて、セツセと散つてしまふのはキビしくしてゐて、面白い」と云つて、やはり（私は梅は八重でも宜いと思ふが、卿は梅もやはり）一重梅をば、軒に近く植ゑられた。卿の住居であつた京極の屋の南向きの方に、今も二本ひとへ梅がありますよ。柳もおもしろい。四月頃の新緑の楓は、すべて一切の花や紅葉よりもまさつて、立派なものである。橘も宜い。桂も宜い。なんでも喬木は、古木で大きいのが宜い。草でよいのは山吹藤杜若撫子。池の中にあるたいのは、蓮。秋の草でよいのは、荻薄桔梗萩女郎花藤袴紫菀れもかう苜蓿龍膽白菊、さうだ黄菊もよい、萬葉朝顔がよい。どれもあまり高くない一寸した垣に、あまり茂生して居ないのが、見るに快い。以上舉げた外の、珍らしい草木、名は支那くさくて聞苦しく、花も見慣れない物などは、まことに、なつかしくない。すべて何でも珍奇な物はげびた人が喜ぶ

たるを云にあらす、咲いて居る様子が、櫻に比する故しか見ゆるなり。

「京極入道中納言」藤原定家のこと、有名な歌人貞永元年權中納言に任ぜらる十一月出家仁治二年八月二十日薨す、年八十三、新古今の撰者たり、日記に明月記あり。

「京極の屋」上京二條北側京極西に定家の家の址あり。

「若楓」楓の新緑。

「菊」白菊を云。

「しげからぬ」あまりモサモサしげつて居ないの。

「有難き」稀な。

ものだ。そんな物は無い方が宜い。

【評】こゝは全く枕の草紙の書き方に似せて書いてある。菊、黄菊も、などと筆癖まで眞似てゐる。枕の草紙には「木の花」と云ところと、「木は」といふ所と、「草は」と、「草の花は」と四所に分けて、自分の植物に對する興味を書いてゐる。それと此れと比較して見ると、清少納言の趣味は廣く、感受性が強く鮮かで、兼好のこゝの筆は甚だ見すばらしく覺える。それに書き方を眞似てゐるので殊にそれが目立つ。もつともこの感じの差は宮女と法師の差でもあり、又時代の差でもあらう。それに彼は出来る限り多くの草木を觀察批評しようとして云態度で書き出したのであり、此れはむつかしいものは愛すべからずと云主張を本としてそれを云立てる爲に草木を並べると云態度で書き出したのである、こゝの差でもあらう。

八重櫻を攻撃してゐるは兼好としてさもあるべきことである。これと清少納言が「櫻の花びら多きに葉色濃きが枝細くて咲きたる」を賞めてゐるのと比較するも一興である。それから八重櫻は近頃流行とこゝに云つてゐるが、これで見ると平安朝に京都でもう玩ばれてゐるのかわかるでは無いか。清女の書いたのは確に八重櫻の風情だ。

櫻とカチ合つて梅の咲いてる様を「枝にしをみ付きたる」と書いたのは強い。これを、梅の盛過ぎた様と思ふのは駄目だ。

「心とくをかし」と云趣味は面白い。しかし定家の自叙傳たる明月記によると、彼は八重梅もひとへ梅も同等に愛してゐる。特に或時代の彼の趣味であるのであらうか。「心の花」十七卷四號に、阪本廣太郎氏の「藤原定家と園藝趣味」と云ものが出てゐる。明月記によつて彼

斯趣味を寫したものである。それによると、定家の庭の王と云べきは柳であつた。それから
單紅梅、白梅、これは仁和寺から根分して貰つたのであつた。そして一方には嵯峨の心寂房
と云人から白八重梅を取寄せても愛した。西の方に紅梅を咲かせた。北に白梅を南には紅梅
白梅を交ぜて咲かせた。或時は賀茂柘植邊の民家へ人を派して紅梅を乞はしめたこともあ
る。兼好のこゝに云つてゐるやうな狭い趣味では無かつたのだ。阪本氏は兼好の時代には他
の紅梅八重白梅など皆枯れてしまつて、仁和寺種の單白紅梅（即ち、明月記に建保元年閏九
月廿四日、天晴、栽小梅樹、仁和寺僧都下枝也。嘉祿元年正月廿七日、朝天遠晴、午時許參
御室、近日白梅單紅梅盛開、路頭芬々。廿八日、仁和寺南邊塙根單紅梅昨日見之、語法眼、
今日取寄栽南庭、依早速開也とあるもの）のみが京極の屋の南庭に残つて居たものであら
うか、と云つて居られる。

「卯月ばかりの若楓」のセイ／＼したのを賞める爲に「すべて萬の花紅葉にもまさりてめで
たきものなり」と云所に、兼好の熱する所、物狂ほしさが見えてなつかしい。

第四百十段

身死して財残る事は、智者のせざる所なり。よからぬ物蓄へ置きたるも
拙く、よき物は、心を止めけむと、はかなし。こちたく多かる、まして

「財」こゝにては金を云
にあらす物品を指す。
「拙く」見苦しく、と云

に近し。死後に人に侮
られるを云。
「後は」死後には。

口惜し。「我こそ得め」など云ふ者共ありて、あとに争ひたる、様惡し。
後は誰にと志す物あらば、生けらむうちにぞ譲るべき。朝夕無くてかな
はざらむ物こそあらめ。其の外は、何も持たでぞあらまほしき。

【譯】自分が死んだあとに、所蔵品が残つてると云事は、物のわかつた人はしない事であ
る。智者は一物を残さずして死ぬのだ。残つてるとすると、それがツマラぬ物であると、こ
んな物を蓄へて置いたのかと人が侮る。見苦しいことだ。それがよい物であると、一所懸命
にこれに愛心を注いで居たのが、死んで行く身とも知らないで、と、其人がシツカリ物の理
を知り抜いてた人で無いと、人に思はれる。まして、ゴタ／＼といろんな物が深山残つて
るのは、苦々しいことだ。死後に親類などが寄つて来て、これは私が貰ふんだなど云張る
奴が出て、奪合をするも、不體裁なことだ。自分の遺品故に不體裁な事は演じさせたく無い
ものだ。この物は自分が死んだ後にはあの人に譲つてやらうと思つて居る物があるなら、其物
を生きてるうちに譲つたが可い。毎日どうしても必要だと云物だけは置いて、其の外の贅物
は何も持たないで居るが宜いのである。

第四百十一段

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、雙無き武者なり。

「悲田院」孤兒貧者病者
を養ふ爲に公設せられ

たる寺なり、鴨川の西に在り。
 「堯蓮上人」傳不明。
 「故郷」堯蓮東國生れ見えたり、こゝに故郷と云は東なり。
 「あづま」畿内より遙に東の國々の汎稱。
 「ことうけ」言で承諾すること。
 「げやけく」甚だ際立つこと。
 「乏しくかなはぬ人のみあれば」都には貧乏で事を思ふ儘に得爲ぬ者ばかり故。
 「わが方なれど」我が生國なるが。
 「直くよか」圓みなく生一本なるなり。
 「賑ひゆたかなれば」東人は多く富貴故人の爲にしてやること出来る、と云なり。頼まるは信頼さるゝを云。
 「ことわられし」こそ解

故郷の人の來りて物語すとて、「あづまの人こそ、言ひつることは頼まれる。都の人は言受のみよくて、實無し」といひしを、聖、それは然こそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心柔かに情ある故に、人の言ふ程の事、けやけく辭ひ難くて、萬得言ひ放たず、心弱く言受しつ。偽せむとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、自ら本意通らぬ事多かるべし。あづま人は、わが方なれど、實には、心の色無く、情おくれ、ひとへに直くよかなるものなれば、初めより否と云ひて止みぬ。賑ひ豊なれば、人には頼まるゝぞかし」とことわられ侍りしこそ、此聖、聲うち曲み荒々しくて、聖教の細やかなる理いと辭へすや、と思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に、寺をも住持せらるゝは、斯く柔らぎたる所ありて、其益もあるにこそと、覺え侍りし。

【譯】 悲田院の住持堯蓮上人と云人は、もと俗姓を三浦の某とか云つて、えらい武士であつたのだ。或時、上人の故郷即ち東國の人が上人の許へ來て話をする時に、話頭が都人東人の

説したるを云、この「こそ」は、のてと解けばつなぎわかり易し、この詞、あと全體にかゝるなり、意にかゝりて字句にかゝらず、故に「こそ」の結びあとに無きなり。
 「聲うちゆがみ」東國なまり、變音。
 「荒々しく」聲を云。
 「聖教」佛の教。
 「住持」文字の如く住み持つなり、一寺に住みつきそこを持つて、即ち一寺の主たるを云「其の益」この人が住持するが益なりと云點があるならむ。

比較に向つて、其東國人が「どうも東の人に限つて、言つた事は必ずやるから、言を信頼することが出来る。都の人はなんでも口さきでは快く承諾するけれども、其の事をして呉れない。誠實を缺いて居る」と云つたらば、上人曰く「成程それア然う思召すのも尤だが、私は都にもうこれ長く住んで、よく都の事がわかつて、觀察してみるに、都人士の心は劣等なものとは思はれません。都の人は皆心が柔かて情があるので、人に何か頼まれてもすると、なんでも、たとひ自分で出来さうも無い事でも、ピンシヤンと斷ると云ことが出来ないで自分の思つてる事を、其儘に言ひ切ることをしないで、弱い心で、承知した、とツイ云つてしまふ。決してむかうを欺くつもりでは無いけれども、都には貧乏で諸事思ふまゝに爲し得ぬと云人ばかり居るものだから、自然、あの人に斯うしてやりたいと心得てゐても、其志を遂げないと云事が多くあるのだ。あづま人は、私の生國だが、その爲に都人より東人がまさると賞める訣にはいかぬ。東人と云もの、實際は心に色が無い潤が無い。情愛が劣つて居る。たゞツンと眞直な、と云者だから、何か頼まれても、出来ぬ事は、はじめから、否ですと云切つて、それで済まして了ふ。都の人でも東の人でも、そんな場所によつて、信頼されるとか、されぬとか云ことは無い、どこの人でも富裕な人は、人の爲に事を爲し得る人だから、信頼されるもんなのだよ」と解明されましたので、私はこの上人に敬意を拂ふやうになつた。この上人は東國生れだもんだから、變聲で物言ひが荒々しいので、一寸聞くと、こんな坊主は佛教の細かい道理などはよく解つて居ないだらう、と私は思つてゐたが、この一言を聞いてから、侮り難いと云心になつて、成程、僧はいくらもある中で、選まれて一字の寺の

住持でもされると云のは斯うした柔らいた融通した所があるので、住持として立て、宜いといふ所があるからのことだらう、と私は思ひました。

【評】この上人の説は、今でもあてはまる。都人士は、生存の爲、自己發展の爲、金錢にも時間にも餘裕が無い。だから、他人に物を頼まれても、爲てやれない。それでは同情が無いかと云に、同じ人間だ、同情の無い人間と云ものがあらう筈は無いのだ。餘儀無く同情を殺してゐるのだ。

「この聖賢うちゆがみあらしくして」と一筆書いたので、堯蓮上人と云ふ人が生きて、我の頭に浮ぶ。かう云ことを、さすがに兼好は、見通さず、書洩さなかつた。

第四百四十二段

心無しと見ゆる者も、よき一言は云ふ者なり。或荒夷のおそろしげなるが、傍に對ひて、「御子は在すや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては、物のあはれは知り給はじ。情無き御心にぞ物し給ふらむと、いと怖ろし。子故にこそ、萬のあはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬ。きことなり。恩愛の道ならでは、斯る者の心に慈

「あらえびす」野性の蠻人と云義。當時、東國人などを夷とはいへどこゝはアイヌ人を指す。當時アイヌ人都にも居て日本語を使ひ居たるなり。「かたへ」かたはらの人「さては」それでは。

「御心にぞ物し給ふらむ」御心でおいででせう。

「孝養」孝行。「するすみ」白氏文集、偶吟の詩の中にある。「匹如身」と云語を「するすみ」と訓じたること、偶然沙石集四の明禪法師の談義の詞の中に見えたるより、たゞその匹如身の義、とのみ古來解き來れど、「匹如身」の語先づ在りて後に「するすみ」の語あるに非ず、「するすみ」と云語我國にありてそれが恰度「匹如身」の意にあたる故斯く訓じたるなればこの語そのもの、解をせざるべからず、思ふに、この語は俗語にて「する身」と云がつづまりたるなるべし、更に今人にわかりよいやう

悲ありなむや。孝養の心無き者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。世を捨てたる人の萬にするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに諛ひ、望深きを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。其の人の心になりて思へば、まことに悲しからむ。親の爲、妻子の爲には、恥をも忘れ、盗もしつべき事なり。されば、盗人を縛しめ、ひが事をのみ罪せむよりは、世の人の飢る寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産無き時は、恒の心無し。人窮りて盗みす。世治まらずして、凍餒の苦しみあらば、答の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはむ事、不便のわざなり。さて如何して人を恵むべきとならば、上の奢り費す所を止め、民を撫で農を勸めば、下に利あらむ事、疑ひあるべからず。衣食世の常なる上に、僻事せむ人をぞ、まことの盗人とは云ふべき。

【譯】何の考も無いと外見では見える者でも、時にいふ言を一言云ふものである。或アイヌ人の怖しいやうな顔した男が、人にむかつて、「あなたは御子さんがありますか」と尋ねたれ

に云ひ直せばツル、の身と云てもよし、ただこの裸一貫にて何も持たぬかたちを表面的に云あらはしたる語なるべし。
「思ひくたすくたすは貶なり、蔑し思ふなり。」

「ひが事」悪事。

「世を行は」行政

「恒の産」孟子、梁

惠王篇に無恒産而

有恒心者惟士爲能

若民則無恒

産因無恒心とある

を使ひたるなり。

恒産は、つれに定まり

たる産業。恒心は、つ

れに定まり在る正しき

心。

「凍餒」餓はうゑること

「世の常」世間並。

ば、「いや一人も持ちません」と答へたら、アイヌ人曰く「それでは、あなたは物のあはれ御存じないだらう。きつと、冷酷な御心でいらつしやうと思へて、まことにあなたが情う思はれます。すべて物のあはれは、子供を持って始めてわかるものです」と云つたのは、うに違ない。さう云やうな男の心に慈悲を注ぎ込むのは、子を愛すると云其恩愛の道で無くしては、他に無い。子に對する愛によつて、さう云者の心に慈悲が起るのだ。孝行する心の無い者でも、子を持つて始めて、親の親切な志を思ひ知るものである。世捨人で何一つ持たずスツカラカンの人が、世間一般の、妻子其他の足手纏の多い人が、方々へ御機嫌を取つて歩く様子欲望の深い様子を見て、あいつ等は俗物だ愚劣だと無茶苦茶に輕蔑するのは、誤である。其の人の心になつて思つて見ると、そんな事をするのが何好きであらう、嗚かしの悲しいことであらうと察せられる。それをけなすのは、自分がほだしが無いから、わからないのだ。人間と云ものは、親の爲や妻子の爲には、恥も忘れ、盗もするものなのだ。そんなことをするのにも尤なことなのだ。だから、盗人を縛つたり、悪い事をする者を罪に處すると云方の事よりは、世間の人が飢ゑたり寒がつたりしないやうに、政を行つて貰ひたいものである。人は定まつた儲け口が無いと定まつた正しい心を有つて居られぬものである。人は困るから盗もするのだ。世の中がうまく治まつて居ないで、凍えたり飢ゑたりする苦痛が民にあるならば、罪人の絶えつこは無いのだ。人民を苦しめて、苦しさに止むなく法を犯すやうに仕向けておいて、そして犯したと云つてそれを罪に處すると云事は、氣の毒な事だ。それぢやどうして人に恩恵を與ふべきと問ふ人があるなら、直ちに私は答へる。上の者が奢侈をし

浪費する事を止めて、民を可愛がり、農を勧めたならば、それで下の者は利益を得る事は疑ふべからざる事だ。衣食が世間並に出来るのに、それに満足せずして、なほよくない事を働く、さう云人間こそ、本當の盗人と云ふべきものだ。

【評】「心無しと見ゆる者もよき一言は云ものなり」とは全くのことである。都人はえらいことを云、蠻人はつまらぬことばかり云と云ものぢや無い。教育のある者がえらいことを云、無教育の者はつまらぬことを云などと云事は斷じて無い。一切の人は、皆同じ天地の中に生きて、同じ物を見て居る。其の感じ得る所のものは、兎も角眞の一片である。素町人の言も名流の教訓と一致する所のあるのは當り前だ。

こゝの「荒夷」がアイヌ人だと云ことは、喜田博士の注意によつて知つたのである。成程さう聞くと、こゝの書き方はたゞの東武士などぢや無い。

世すて人が俗人の名利の爲に辱をしのぶのを責めた、こゝの兼好の全人たるを見る。彼一方に名利の人を罵りつゝ、一方に其の名利の人を辯護して世すて人を罵つた。矛盾、矛盾の言を敢てする、こゝが眞の人の語であるのだ。「その人の心になりて思へば」と云と、ろに廣大なる愛を認め得る。

第四百四十三段

人の終焉しうげんの有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、唯「靜にし

第四百四十三段

「終焉」死ぬの時。

「相」有様。
「この大事は終焉の事は。」
「權化の人」佛菩薩などの衆生の濟度の爲めに權りに人間と化して此の世にあらはれてゐる人。
「定むべからず」評定すべからず。人の終焉に就て評定することは出来ぬ。
「はかる」測定。
「おのれたがふ所無くば」正にたがふ所無くば。
「人の見聞くにはよるべからず」外觀にどんなことがあつてもどうでもよし。

て亂れず」といはいふ心にくかるべきを、愚なる人は、怪しく異なる相を語り付け、云ひし言も舉止も、おのれが好む方に賞めなすこそ、其の人の日頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず、おのれ違ふ所無くば人の見聞くにはよるべからず。

【譯】 人が死ぬ時の有様の有難く莊重であつた事など、人が話しをするのを聞くときならぬことを云つてゐる人があるものだ。唯「あの人は靜に取亂さず死んだ」と話せば、聞いても其死んだ人に對して敬意を起すが、愚人は不思議な光景を、自分で附けて話す。或は光明がさしたとか、或は屋根の上で音楽が聞えたなどと云つたやうなことを話す。終焉に其人の云つた言や動作も、めい／＼が好きな方に解釋して賞めて云ひなすのは、其人の平素の心に背いたことでは無いかと思はれる。人間が死ぬと云此大事件の有様に就ては何人も輕々しく論ずべきで無い。佛菩薩のかりに現はれて人となつてゐる、さう云尊い人でも、この人の死の有様に就て評定することは出来ぬのだ。非常に學問のある人でも、この人の死狀に就て、かう云心持であの人は死んだなどと測定することは出来ぬのだ。死ぬる時自分の本心が、正に違はなかつたならば、口さきで何と云つて死なうが、手足をどんなに見苦しくもがかうが、そんな外見の事はどうでもよいのだ。我々は死時に、そんな外見をつくるふ必要は無いのだ。

【評】 むやみに、高人の死に。人々が奇蹟を云ひふらすのに憤つたのだ。「權化の人もさだむべからず」と云ふのは、若し權化の人と云ふもの實在せば、其人は何事をも洞察する人であるわけだから、「さだむべき」わけであるが、この言は輕々しく論ずるな、と云意を強く表はす爲に斯う云つたのである。

第四百四十四段

「梅尾の上人」釋高辨、又明恵と號す、十九にして興然に従ひて西部の密法を受く、北山の梅尾に止まる、華嚴宗中興の祖なり、寛喜四年正月十九日寂す、年六十。
「あし／＼」足々なり、馬にむかひて、足をあげよといへるなり、と云ふは誤なり。今の「オシ、オシ」と云ふ如く馬を叱制する聲なり。「宿執開發の人」過去にて執持せし善根功德が今生に開發した人。

梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、川にて馬洗ふ男、「あし、あし」と云ひければ、上人立留りて、「あな尊や。宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊く覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつる哉」とて、感涙を拭はれけるとぞ

【譯】 梅尾の明恵上人が、道を通つて居られた時、川で馬を洗つてゐる男が、「あし、あし」と云つたれば、上人立留まつて、「あゝ有難いことだ。この人は過去の功德が今あらはれた人だ。阿字々と云つてゐるぞ。一體その馬はどう云人の御馬だ。あまり尊く思はれるは」と尋ねられたれば、男答へて、「これは府生殿の御馬で御座ります」と云つた。上人又「それは結

第四百四十四段

「阿字」眞言宗にてアの字を萬法の體性とせり

人物云はむとて口を開く時必ずアの聲あり、アと云ふもAと云ひたる方よし、あらはれざる聲なり、開口は即Aなり、アの聲を離れては一切の言無し、アの字は一切の言の本義なりとて、全宇宙の本體を象徴的にこのアの字を以て現はし、このアの字の理をよく吞込むことを本體を知得すること、云へるなり。

上人は「あし」と云ふを「阿字」と聞きなしたるなり。上人はこの馬の名を阿字と云と思ひしなり。

「府生殿」六衛府、檢非違使等の下官に府生あり、これを「不生」と上人聞きなしたるなり。「阿字本不生」Aの字には物の生ぜざる有様あり、物云はむとして口を開きたる其時聲なし、これA字なり、不生なり、(不生故不滅なり)この

構な事かな。馬の名が阿字で、持主が不生殿なら即ちこれ阿字本不生なのだ。お前は幸福な結縁をしたものだア」と云つて感涙を拭はれたと云ことだ。

【評】一方に無心の男がある。一方に佛道の事のみ心を集めて居る。高僧が居る。男の云つた何でもない言に、高僧はおそろしく驚歎して居る。面白い一場の光景だ。されど又思へば、面白いどころか、この上人が佛道に心を集注し、その心で何事をも聞いて居るところは尊いでは無いか。

阿字と云ことをよく考へると宇宙の本體がわかるのだ。それにこの男は何の氣なしに「阿字々々」と云つてる。もう今にこの男は悟る男だ、と上人は思つたのだ。又「不生殿」と云つた。「阿字」と云ひ「不生」と云つてれば、今のこの眞義がわかり、宇宙の眞體を悟るだらう、と思つたのだ。不生殿の阿字と云馬の馬士になつてると云事は佛がこの男をして悟らしめる運命を與へ給うたのだ、と上人は思つたのだ。

上人が「阿字々々と唱ふるぞや」と云つたのは、その馬の名が阿字と云のだから、呼ぶのだと思つたのだ。それだから、さう云尊い名をつけた主人は何者だらうと思つて、「いかなる人の御馬ぞ」と聞いたのだ。舊説はこゝに氣がついて居ない。

物の本は不生なりと云事を阿字にて觀する、それを云。

「結縁」佛の道に縁を結ぶこと。この男が我れ知らず眞言極秘の結縁なしたりとて上人喜ぶなり。

第四百四十五段

「御隨身」隨身とは近衛の舍人にて、弓箭帶劍して上皇、攝政關白等を護衛して供する者、こゝに御隨身と云は上皇の隨身なり。
「北面」上皇づきの武士
「信願」傳わからず。
「信願を」の「を」は信願を評定する語を次に云なる故自らおきたるなり。
「つゝしみ給へ」信願への注意を第三者に語るなり。

「相」人相。
「桃尻」馬上に尻のすわらぬを云、桃の實の尻のすわらぬに譬へていふと云へりされど或は歸りたさうに尻を落着けぬことをモシモシすると云類にてモ、は音標詞かも知れず。
「沛艾の馬」沛艾とはカンドリあがること、カン

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を「落馬の相ある人なり。よくよく慎み給へ」と云ひけるを、いと實しからず思ひけるに、信願馬より落ちて死に、けり。「道に長じぬる一言、神の如し」と人思へり。「さて如何なる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にて、沛艾の馬を好みしかばこの相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞ云ひける。

【譯】上皇の御隨身の秦重躬が、北面の武士の下野入道信願のことを人に話すやう「あの人は落馬する人相をそなへた人だ。よくよくあの人は氣をつけなさらぬといけないな」と云つたのを、聞く人、飛んだことを云と、信用しなかつたのに、其後果して信願は馬から落ちて死んだ。人々は驚いた。「どうも一道に長じたもの、一言は、神の如きものである。チャンとあたる」と皆思つた。「一體どんな人相だつたんだ」と人が重躬にきいたれば、「甚だ尻のすわらぬ乗り方をする人で、そのくせ悍馬を好んで居たから、落馬の相と判断したのです。この判断はいつだつて中らぬことは無かつた」と云つた。

第四百四十五段

の強い馬なり。
「おほせ侍りき」この
「おほす」は「負はす」の
轉なり、さう云人相だ
と定めたるを云。

「明雲座主」號は慈雲房
仁安元年勅して僧正に
任じ次いで延暦寺の座
主となる叡山の法師日
吉の神輿を昇きて朝に
強訴する時明雲後白河
上皇の怒に觸れ伊豆に
流され治承元年京を出
づ、衆これを粟津に追
ひて奪ひ歸る、六月赦
を賜ひ、三年再び座主
に任ず、ひきて天王寺
の寺務を領す、壽永二
年十一月十九日源義仲
上皇を法住寺に攻むる
時、たま／＼明雲そこ
に在り、流矢に中りて
寂す、壽わからず。座
主とは延暦寺の長の稱

「相者」人相見。
「兵仗の難」武器の災難
「相人」人相見。
「危み」危難。

「格式」法令規則を書き
たる書の總稱。

【評】人は神異に思ふが、目前當然の理で見たのだ。當然の理を、人は知りながらも注意し
ないものである。目前當然の理を尊重せねばならぬ。

第四百四十六段

明雲座主、相者にあひ給ひて、「おのれ若し兵仗の難やある」と尋ね給ひ
ければ、相人、「まことに其の相おはします」と申す。「如何なる故ぞ」と
尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にも斯く思
し寄りて尋ね給ふ。是れすでに其の危みの兆なり」と申しけり。果して
矢にあたりて失せ給ひにけり。

【譯】明雲座主が人相見におあひになつて、「自分の人相に若しや武器の災難がありはしない
だらうか」と尋ねられたれば、その人相見答へて、「成程其の人相がおありになる」と申す。
「どう云わけだ」と座主の尋ねに、相人曰く「武器で傷つけられる恐れのおありなさる筈の無
い御身分でありながら、ヒヨイとでもさう云事に御注意になつてお尋ねになると云其事がす
でに武器の危難のあると云兆候です」と申した。果して後にこの座主は矢にあたつて亡くな

られた。

【評】私は斯う云事を信する。フイと心に浮ぶと云事は、身邊に集りつゝある「意力」を感
得するのである。「災難」と云意力の身邊にあるのを座主はふと感じて斯う尋ねたのである。
相人のこの言はいかにも妙である。

第四百四十七段

灸治數多所になりぬれば、神事に汚れあり、といふこと、近く人のいひ
出だせるなり。格式等にも見えすとぞ。

【譯】灸點があまり澤山になると、汚れた者として、神事には憚らねばならぬ、と云ことは
近來、人がいひ出したことだ。格式の書類にも書いてないことださうだ。

【評】こんなことにも、フイと不審を起して、格式通の人に序の時訊いてみたものと見え
る。

第四百四十八段

四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば、上氣の事あり。必ず

「三里」灸すべき箇所の名。膝の下の外傍の稍凹みたる所。
「焼かざれば」灸するること。
「上氣」逆上。

「鹿茸」鹿の袋角。

灸すべし。

【譯】四十歳より上の人が灸をすゑた場合には、必ず別に又三里に灸をすゑて置かないと、逆上することがある。乾度すゑなくてはいかぬ。

【評】かう云ことを人の爲と思つて書いておく所に、温みがある「禮記」の親切を思ふ。

第四百四十九段

鹿茸を鼻にあて、嗅ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて腦を蝕むといへり。

【譯】鹿の袋角を鼻にあて、かいではならぬ。袋角には小さい蟲が居て、こいつが鼻から這入つて、腦をくふと云ことだ。

【評】鹿の袋角、と云ものは薄氣味の悪いものだ、こんなことをきくと一層厭な心持がする。

袋角をかぐと云こと、一寸ありさうも無く聞えるが、鹿茸は藥品であるから、この段は、藥屋醫者に注意したのである。

第四百五十段

能をつかむとする人、よく爲ざらむ程は、なまじひに人に知られじ、うちよく習ひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめ」と常に云ふめれど、斯く云ふ人、一藝も習ひ得ること無し。未だ堅固かたほなるより、上手の中に交りて、謗り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて、たしなむ人、天性其の骨無けれども、道に拘泥ます、妄りに爲すして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳長け、人に許されて、雙無き名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども其の人、道の校正しく、是を重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道變るべからず。

【譯】或技能を得ようとする人が「うまく出来ないうちは、なまじつか人に知られるのは厭だ。ないくでよく稽古してうまくなつてから、人中へ出てそれをやると、人が尊敬するだ

第四百四十九段——第四百五十段

「能」藝能。
「つかむ」つけむ、と云と同意。
「うちよく」内しよで。
「さし出でたらむ」人なかへ。
「心にくからめ」心にくく見えるだらう。
「堅固」藝がかたきを云、流通自在ならぬなり。
「かたほ」偏帆なり、舟の帆を一方に片寄せたるを云。
「完全ならぬこと」に云。「なるより」なるうちより。
「つれなく過ぎて」平氣で通つて。
「たしなむ」練習するを云。
「骨」天品。

「道になづまず」途中で滞らす。
 「みだりにせずして」大事をかけてして居るを云。
 「堪能のたしまざるより」堪能は器用のこと、上手にして練習しない人よりは。
 「徳」藝の上達より起る名望威徳を云。
 「人に許されて」人から立てられる事。
 「放埒せざれば」自分の勝手な事をせれば。我流を出されば。
 「世の博士」世の中でえらい人と数へられること。

らう」とよく云ふが、こんなことを云つて居る人が、一つの藝も手に入れたためしが無い。まだ藝が生硬で不完全な頃から、上手な連中の中へ這入つて其の上手達に誇り笑はれても恥かしいと思はず、平気で通つて、稽古をする人は、生れながらに其の才が備はつて居る人でなくとも、途中で停滞せずドシ／＼進んで無茶な事をしないで、年數を經れば、其結果は器用な人で稽古を怠つて居る人よりはすぐれるやうになつて、遂に上手と云はれる位置に上り、身に徳望もつき、其徳望が高くなり、人に立てられるやうになり、無比だとも云定評も得るに至るものだ。天下の名人と云はれて居る人でも、初めは不器用だと云評判もあり、ひどい疵もあつたのだ。しかし、其の人、その藝道の規則をよく守り、その藝を尊重して、勝手な我流などしないで居ると、やがて世上に數へられるえらい人になつて、多くの人の師となるに至るもので、これは何の道でも皆同じことである。

【評】「うち／＼よく習ひ得て……」全く、今でもかう云つて居る人がよくあるものだ。斯くいふ人一藝も習ひ得ることなし」とは實に名言である。そんな見得を張つて居る人は、到底上達の見込は無いのだ。ドシ／＼上手達に這入り込んでやると云人は、其の藝を手に入れようと云熱望の爲に、恥を恥とも思つて居ないのだ。それだけの熱望があれば、必ず上達するのだ。そして又、上手のなかに入れば、近く上手の爲す所を見て、次第に悟る所がある。師の師匠などがよく云、盛になつてから習ふ娘は恥かしがらから藝が進まぬ、子供の時から始めると恥しいとも少しも思はずにズン／＼やつて行くから藝が進むと云ふのも同じことだ。

こゝに天才のなまげ者よりは、非天才の勤勉家の方が勝つ、と云つたのは至言である。こゝの教へ方、勵まし方が、いかにも親切で、不堪の人の爲に非常な慰藉にもなり希望にもなつて居る。

第百五十一段

或人の曰く、「年五十になるまで、上手に至らざらむ藝をば棄つべきなり。勵み習ふべき行末も無し。老人の事をば人も得笑はず。衆に交はりたるも、あひなく見苦し。おほ方萬よろづの仕業は止めて、暇いとまあるこそ、目安く、有らまほしけれ。世俗の事にたづさはりて生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えむ事は、學び聞くととも、其の趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。もとより望む事無くして止むは、第一の事なり」。

【譯】或人が斯う云つた。「五十歳になつても上手になり得ない藝は止めてしまふべきである。あと長くも生きられないのだから、この上勉勵して稽古すると云サキが無い。老人の爲る事は、人も遠慮して笑ひ得ない。だから老人自らは、人に笑はれないところから、自分の藝の足らぬ所、見にくい點を悟り難い。だから愈向上の道が無くなるわけだ。いゝ年をして

「あひなく」含蓄なく露骨なる様を云。

第百五十一段

不つゝかな藝をして、群集の中に交つて居る有様も、まことに露骨で見苦しい。老いたらば、すべて一切の業は止めて、暇な身になつて居るのが、外から見てもいゝ心持のもので、理想的模範的である。世俗の事に關係して一生涯關係し通して暮すと云のは、下等な愚劣な人である。どんなものだらう、知つて見たいと思ふ事は、人に學び人に聞いて其事を知るのもいゝが、大抵其事の趣きがわかつたら、全くわからないと云界だけ脱して、それだけでどめて止めてしまふが宜い。欲に欲がついて深い所まで進んでゆく必要は無い。しかしこれは、どんなものだらう、知つて見たいと云望を起した上の話であるが、初めからそんな望も起さないうですますのは、これア此上無い結構な事で、一體これでなくてはならぬのである。

【評】 藝能の事、不撓不屈に進めと説いた、あとで、それは藝能に熟した上での説法だ。藝能の範圍の、ズツと上から觀ていへば、一體藝能なんか習ふには及ばぬことだ。と、例の、無爲を鼓吹したのである。

「或人の曰く」と云のは、假に設けて自分の説を人の言だと託して云つたのである。自分の説として云つたとて宜さうなものだが、どうしてこんな假設をしたかと云ふのに、こゝに兼好の心持が見えて面白い。少し程經て矛盾を云ことは苦にもならぬが、前段と此段と、矛盾があまり近接して居るので、彼は少くも讀む人の感じを思つて、多少又自分にも苦にして、自分は甲の立脚地に立つて斯く云、或人は乙の立脚地に立つて斯く云、と斯う分けておいたのである。丁度小説家が、作中の人物の一人に、自分の考の甲の面を持たせ、他の一人に、自分の考の乙の面を持たせ、なほ丙丁等幾多の人間を描いて、自分の考の各方面を活躍

させるのと同じ心持なのである。

第二百五十二段

西大寺さいだいじやうなん靜然上人、腰かゞまり眉白く、まことに徳長たかけたる有様にて内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、「あな尊たふとのけしきや」とて、信仰きそくの氣色ありければ、資朝卿すけともこれを見て、「年の寄りたるに候」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらばひて毛はげたるを、引かせて、「このけしき、尊く見えて候」とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

【譯】 西大寺の靜然上人が、腰がかゞみ眉白く、まことに高德に見える容姿で、内裏へ參られたものがあつたのを、西園寺實衡公が見て、「あゝあの上人の尊い様子よ」と云つて、上人信仰の念の起つた様子であつたから、これを日野資朝卿が見て、公に「あれは年が寄つたので御座ります」と云はれた。後日になつて、卿はむく犬の厭な工合に老い瘦せて毛のほげたのを、人に引かせて、「この犬の容姿は尊く見えます」と云つて、實衡公にこれを贈られたと云ことだ。

第二百五十二段

「西大寺」大和の名刹、生駒郡伏見村大字西大寺に現存す。
「靜然上人」傳知り難し
「西園寺内大臣殿」實衡。
「けしき」様子。
「氣色」様子。
「資朝卿」日野資朝才學人に過ぐ、後醍醐帝大に優待し給ふ、權中納言たり王政興復を計り、同志を集め、無禮講に託して交誼す事洩る、北條高時の爲に捕へらる、元徳二年五月佐渡に於て殺さる、明治十七年二月從二位を贈らる。
「むく犬」體肥え肉厚く

全身長毛あるもの。
「さらばひて」瘦せたる
を云。

「内府」内大臣、即ち西
園寺實衡公。

【評】資朝と云人は、其一生に於てもわかるやうに、シツカリした、そして流通自在の人であつた。禪も心得て居た。行ひ人の意表に出ることがある。靜然上人と云僧はえらい人かどうか解らぬが、ともかく内大臣は外貌で信を起した。その膚淺を罵つたのだ、罵るよりもかちかつたのだ。この老いさらばひた尨犬を探し出してそれを贈物にすると云隨分手數のかつたからかひな、興味を以てやつたのが面白いではないか。「年の寄りたるに候」とすぐ云つて見たが、どうも物足りないので、むく犬搜索に取りかゝつた、と思ふとをかしくてたまらぬ。

老いてからノコノコ人仲へ出るぢや無い。見る人が見ればまことに見苦しく見える、と、前段の旨を、助ける爲に實例を出して來たのだ。

第百五十三段

爲兼大納言入道、召し取られて、武士ども打圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一條わたりにて、これを見て、「あな羨し。世にあらむ思出、斯くこそあらまほしけれ」とぞ云はれける。

【譯】爲兼大納言入道が罪にあたつて召取られ、武士連が包圍しつゝ六波羅の廳へ連れて行つたれば、資朝卿が一條の邊でこれを見て、「あゝ羨しい。この世に在るからは、來世に回想

「爲兼大納言入道」藤原爲兼、正應中權中納言に至る、永仁中事に座して佐渡に流さる、嘉禎元年召還さる、延慶三年權大納言に任ぜられ正和二年薨髮、蓮覺と號す、元弘二年薨す、

玉葉渠の撰者なり。

「六波羅」洛東鳥戸郷西方一帶の總名にて、即ち五條の末、六波羅密寺の南より七條の末、法住寺殿址あたりまでを、六波羅と云へり、六波羅兩府廳もこの間にありしなり、北條氏承久三年三皇を遠流してよりこの地に南北兩廳を開き、檢斷職を置き京師西國の政を見たり。

「世にあらむ思出」思出とはさきの事を思ひ出して自ら慰むること。おれば娑婆に居た時かう云事をした、とあの世に行つてからも自ら回想して得意になり得るだけの事。

「東寺」今も京都下京大宮西九條北壬生東八條南にある寺、教王護國寺と號す、今古葉眞言

して自ら慰むるに足るやうな事をしたものだ。武士の制規ぐらゐに恐れて、爲さむとすら事も爲し得ずに居るやうぢや、何も爲得ずして死んで了ふ。あの納言は制規に觸れるだけに、身を進めたのだ。あアありたいものだ」と云はれた。

【評】事なかれ主義では駄目だ。何物にも恐れては駄目だ。それでは到底活きたライフを送ることが出來ぬ。資朝は活きたライフを送りたかつた。くだらぬ東國武士風情に威嚇されるまで居たくは無かつた。爲兼が縛された其の原因は不明であるが、ともかく、縛されるまでに、生きて歩いたと云ふ事が、資朝をしてこの感慨、傲語を發たしめたのである。兼好は、資朝が自分の思ふ通りの事を、折にふれて云つて呉れるので、自分は黙して、唯紹介だけして居る。

第百五十四段

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたは者どもの集り居たるが、手も足もねぢぢがみ打反りて、いづくも不具に異様なるを見て、「とりくに類無き曲者なり。最も愛するに足れり」と思ひて、目守り居ける程に、頓て其の興盡きて、見にくしいぶせく覺えければ、「唯すな

第百五十三段——第百五十四段

宗總東寺派本山たり。「かたは者」不具なる乞食どもなり。

「うちかへりて」うしろへ曲るべき足が外の方へ曲つて居るなどのこと。

「曲者」一くせある奴(外形について云)と云ふこと、愛したる詞。「いぶせく」厭に思ふこと、うるさく思ふこと。

「植木」庭に植ゑるをも盆栽をも云へど、こゝは盆栽なり。

先づ

ほに珍らしからぬものには如かず」と思ひて、歸りて後、「此間植木を好みて異様に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、かのかたは者を愛するなりけり」と興無く覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘り棄てられけり。さもありぬべき事なり。

【譯】この資朝が、或時途中で雨にあつて東寺の門に雨宿りをして居られた時、そこに不具な乞食連が集つて居た。そいつ等は手も足もぬれぢれ曲み、妙な方へ反りかへつたりして、體のどの箇所も不具で、普通の人間と違つて居るのを見て、「どれもこれも、類の無い面白い曲者だ。大いに愛すべきものだ」と思つて見詰めて居たうちに、そのうちに興味が無くなつて、見るのが不快で、うるさい感じがしたので、やはり唯普通通りすなほで珍しくないものが一等だ」と斯う思ひついて、歸宅してから、「先般來植木道樂をして、一風變つたものを求めて、楽しんで居たのは、つまりあの東寺の門に居た不具者を愛すると同じ事だつた」と思ひ付いて、その植木に對する興味が無くなつたので、鉢に植ゑて置かれた木(複數)を皆掘り棄てられた。成程尤な事だ。

【評】この話は、よく繪にかゝれたり、柳橙によまれたりして居る。

資朝の事が續いたが、實にこゝらに擧げた小話だけによつても、資朝と云人の人格がよくわかる。行ひも考へ方もテキパキした、氣味のいゝ人である。心に平等觀の充ち／＼して居た人で、普通の人なら、不具乞食を一目見て、すぐいぶせく思ふところであるが、フム此奴は面白い、平々凡々たる人間よりは此奴等の方が面白いわい、と先づ思つた所に、先づこの人の人格が見える。そして忽としてすなほな趣味に歸ると云ところ、更にそれを擴げて鉢の木を棄て、了ふと云この進み方、まことに動の人である。

百三十九段の「めづらしく有難きものはよからぬ人のもて興するものなり」と自ら照應をなして居る。

第百五十五段

「機嫌」とは佛經の語にて譏嫌と書くを正しとし、人の忌み嫌ふことを伺ひ知ることなれど、それより時機、氣運、と云ふことに用ひ來る、こゝも時機の意なり。

「序惡しき事」序は順序なり其場合都合の悪い事。

「機嫌をばからず」斯る天理の事は、時機など見ないで突如として來る。

世に従はむ人は、先づ機嫌を知るべし。序惡しき事は人の耳にもさからひ、心にも違ひて、其の事成らず、さやうの折節を心得べきなり、但し病を受け、子産み、死ぬる事のみ、機嫌をばからず。序惡しとて止むこと無し。生住異滅の移り變るまことの大事は、猛き河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直ちに行ひ行くものなり。されば、眞俗につけて、必ず果し遂げむと思はむ事は、機嫌を云ふべからず。とかくの用意無く、足を踏み止むまじきなり。春暮れて後夏になり、夏果て、秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はす

第百五十五段

「生住異滅」萬物皆四つの相を現はすなり、生は發生する様、住はこの世に居住して居る様、異は住して居るうちに病等の爲、形異様になる様、滅は滅亡する様。

人には生老病死の四苦といひ、物には生住異滅の四相と云なり。

「たけき河」流勢の強き河。

「おこなひ行く」生住異滅の働きが。

「眞俗」眞は宇宙の眞理に關したる諸事、俗は君に對して忠、親に對して孝など世俗の範圍に於ける諸事。

「小春」陰曆十月ふと暖く春の如き氣候あるを、小春と名づく。

今人この語を秋晴の頃に云とあれど誤なり、寒くなつてしまつてか

なはち寒くなり、十月は小春の天氣草も青くなり、梅も苔みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下より萌し、つはる、に堪へずして落つるなり。迎ふる氣下にまうけたる故に、待ち取る序、甚だ早し。生老病死の移り來る事、又是に過ぎたり。四季はなほ定れる序あり。死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つ事しかも急ならざる人に、覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の満つるが如し。

【譯】世俗の事に従つて居る人は、第一に事を爲る時機と云ものを知らねばならぬ。もうこの事を爲べき時機になつたと云時に爲れば宜いが、時機で無い時に突としてやると、さう云不順序な事は、人に云つても、耳にさからうし、又人の意志に違背するから、其の事は成功しない。さう云時節を呑込むべきである。但し萬の事件皆この時機で起つて行くと云ふと間違ふ。病氣を受けるとか、子供を産むとか、死ぬとか云自然の事に限つては、時機など見て起るのぢや無い。自然は時機を待つて居るやうな氣の長いものぢや無い。今あいつを死なせるには順序上工合が悪いなどと云つて、死なせる事を中止すると云やうな事は無い。生住異滅の四相が移り變つて行くと云眞の大事と云ものは、其移變進行の有様、たとへば流勢強き河が漲り流るるやうな風である。少しも滯滞して居ない。ドシ／＼直ぐに／＼其の變化進行

ら、ふと春暖の如き氣候來るを云なり。

「つはる」衝き張ること

「迎ふる氣」新しきを迎ふる氣、冬の中に春を迎ふる氣ある類。

「下に」下地に。

「まうけたる」出來て居る。

「待ち取る序」それからそれへとドシ／＼受取りて行く其順序。

「是に過ぎたり」これよりも早い。

「磯」波打際の石ある所

を行つて行くものである。だからして眞理に關しての方面の努力でも、世俗範圍の事業でも、この事は必ず爲遂げようと思ふ事は、時機など論じて居ちや駄目だ。あれこれ準備をする必要も無い、足を踏み止めずして直ちに着手發足せねばならぬ。四季の移變を見よ。春と云季が暮れ終つて、それから夏になると云のぢや無い。夏と云季が終つてそれから秋が來るのぢや無い。春の季、その時に早くも夏の氣を催して居るのだ。夏の季に既に秋氣が來て居るのである。秋の季其の時にはやくも冬の季の特色の寒と云ことが顯はれて居るのだ。冬になる。其の十月は名さへ小春と云ばれる天氣がある。すなはち春の氣が冬に既に催して居るのだ。それが姿にもあらはれて、その時すでに草も青くなり、梅も蕾を持つのだ。木の葉が落ちるのでも、第一に木の葉が落ち、第二に芽が出てくる、と云そんな隔つて起るのぢや無い。葉の落ちるのは、既に下から新芽が萌し衝き張り出す其の勢に耐へ切れずして、古い葉が落ちるのだ。新を迎へる氣が、下地に出來上つてから、新、更に新、と新しき現象をドシ／＼受取り、送迎して行く。其の自然現象移變の順序がいかにも迅速に進行するのだ。人間の生老病死。生れる、やがて老いる、やがて病氣になる、やがて死ぬ、と云この移變りは、自然現象よりも早いのだ。四季にはまだ春夏秋冬と定まつた順序がある。しかし死ぬ時と云ものは、順序がまばす來る。死は前からのみ來ると思つて、まだ「死」の姿が見えぬなどと安心してゐるのは間違だ。前から來るが、同時に後からも迫り近づくものなのだ。人は皆自分が死ぬものだと思つて居る。しかし今に來るぞと思つて待つて居ない。ところが意外に「死」はヒヨイと來る。たとへば沖の方まで干潟が遠く續いてるから、潮のさして

来る時には、あの遠い干潟が段々と潮におほはれてそれから磯へ来るだらう、と思つてると沖の方はまだ干潟であるのに、突として、横の海岸線から、磯に先づ潮が満ち来ると云やうなものだ。

【評】 この段の書き行きぶりにも、いかにも隨筆と云文字通りの風が見えて面白い。世に従はむ人は先づ機嫌を知るべし云々と書き出して、身をしばらく世俗界に置いて、機嫌の知り方でも考へつゝ書くやうな心持で、筆を着けたのであらうが例の無常は機嫌をばからないと云考がフイと起つて、「但し」と一寸但し書で書く積りのところ、無常観になると、想は想を生んで、到頭そればかりになつて、當初の世俗機嫌論はそれなりけりになつて了つて居る。この心のうつり工合が、よくわかる。しかし思へば「機嫌を知るべし」だけでも、もう世俗の、所謂處世法と云事は盡きて居るかも知れぬ。これは確にあの人の爲になる、と信ずるから、其の人にその爲になることを云が、機至らざるに云へば、彼も受け付かず、我も害を受けると。爲になると信じたから云つたのだ、自分は正しい事をしたのだ、それにこんな害を受けるとは馬鹿々々しいと、憤ると云場合が多くあるが、これは機を見る明が無かつた爲の悪結果だ。明が無いどころか、テンテ機と云事を顧みなかつた爲なのだ。

機嫌を見る法を説かむとして説かずそれなりけりになつたが、「されば眞俗につけて……」と云所の「俗」と云に於て、書始の事を回顧して居る。さうして書始めには機嫌を知るのが肝腎だと云つておきながら、こゝには「機嫌をいふべからず」と正反對の事を云つて居る。こんなところを矛盾々々と云つて唯笑ふ人が多いのは、全く始末にへぬ事だ。處世法にも、機を

見るべしと云事と、機を見るに及ばずと云事とともに正しいのだ。活用の法に於ては、先づどうなつても大した事で無い事は機を伺ひ〜遣るが宜い。どうあつても遣らなくてはならぬと云事は、機など何はずドシ〜遣るんだ。こちらから機を作つて行く勢で遣るんだ。機にさからつて遣つたが爲に害を受けても構はない、倒れても構はないと云勢でやるのだ。四季の移變を説いた所、簡であるが、句長短錯落、抽象から漸次具體に書き移るところ、自らの妙味がある。

四季は順序がある。人の死は順序が無い、と云つたのは、稍比較すべからざるものを比較してると云誤に陥つて居る。人の死に比すべきのは草木などの枯死で無くてはならぬ。一年経て冬になればもう枯死すると定まつて居る草もあるが、しかし或原因で冬枯るべきのが夏にすでに枯れることもあるのだ。死はかかれて後に迫れりと云現象は人以外のものにもあるのだ。

第二百五十六段

「大臣の大饗」大臣に任ぜられたる人、其披露の宴をす、これを云。「申し受けて」借用。「宇治左大臣殿」藤原頼

大臣の大饗はさるべき所を申受けて行ふ、常の事なり。宇治左大臣殿は、東三條殿にて行はる。内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させる事の寄無けれども、女院の御所など借り申

第二百五十六段

す故實なりとぞ。

【譯】 新任大臣の披露の宴は、然るべき堂々たる所を借りて會場にする云ふのが、常例である。藤原頼長公は東三條院殿を拜借して披露の宴をなされた。當時天皇この殿においでになつたのだが、公この拜借を奏請されたので、わざ／＼天皇は他へ行幸なされた。別に皇室に縁續きなど云ふことの無い人でも、女院の御所などを拜借して行ふのが故實にかなふのださうな。

【評】 大臣になつた臣を重んずると云ふ事がこの慣例の本であらう。大臣になると斯う云ふ宮殿も貸して貰へると云ふ名譽を當人に與へられる趣旨であらう。主上に御遠慮をさせた云ふ極端な例を一つ出した。しかし別にこれは左大臣の暴横と云ふのでは無からう。主上も別に御不快無く他へ行幸なつたのであらう。女院の御所など」とある。東三條殿は即ち當時女院の御所であつたので、こゝへ何か御都合で、主上もしばらく御いでになつたものと見える。

○ 第百五十七段

筆を取れば物書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤打たむ事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも

長。久安三年左大臣たり五年太政大臣となる、保元元年崇徳上皇に附きて兵を擧ぐ、利あらず、流矢にあたる奈良坂にて自ら舌を嚙んで薨す、年三十八。「東三條殿」今の京都上京二條南町口西にあたる地所、南北二町にわたりて東三條殿ありしなり、初め重明親王の第にて後藤原氏の女にして母后となるはこゝに居住と定まりし第なり。「内裏にてありけるを」當時天皇東三條殿に居給ひしなり。「事の寄せ」皇室と縁續きなど云ふことを云。「女院」母后の佛門に入らせ給ひて院號ある方。

「攤」この字、まさちら

不善の戲を爲すべからず。あからさまに聖教の一句を見れば何と無く前後の文も見ゆ。卒爾にして、多年の非を改むる事もあり。假に今この文をひろげざらましかば、此事を知らむや。是れ則ち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前に在りて數珠を取り、經を取らば、怠るうちにも、善業自ら修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信と云ふべからず。仰ぎてこれを傳むべし。

【譯】 筆を取ると、ツイ何か書けるものである。樂器を取ると鳴らしたくなる。盃を取ると酒が欲しくなる。賽を取ると博奕を打たうと云ふ氣になる。或事に觸れると其事を爲ようとする心が、屹度起るものだ。だから假初にも善くない遊び事などしてはならぬ。心無くヒヨイと佛典の或一句を見るとツイその前後の文も目につく。するとそこに書いてある事が今更心の底に徹つて、卒然として、今まで自分が間違つた事をして居た事に氣が付いて、改めると云ふ事もある。ほんのかりそめに今この佛典をひろげて見たのであるが、その爲めにこんな利を得た。若し見なかつたら、そこに書いてある事が知れようや。是れ則ち觸れた爲に得た益である。正しきものに觸れたから心を正し得たのである。全く信仰の心が起らないでも佛像の前に居て、數珠を手にし、經を手にして居ると、怠慢しながらでも、自然に善き行ひ

すと云義ありて、支那にて博奕のことを攤錢と云へり、これを略して攤とのみ云、攤を打つとは博奕を打つと云ふこと、但し錢を賭けず紙など賭くるをもなほ攤を打つと云へり。「あからさまに」一寸。何か調べむとか讀まむと云ほどの心無く一寸手まゝぐりに見るを云。「聖教」佛典。「卒爾にして」忽然として。

「心」信仰の心。「善業」善果を得べき善き業因。「繩床」繩を張りたる椅子にて至つて粗造のもの、禪者これに倚る。「禪定」禪は梵語禪那の略漢譯して靜慮と云。定は漢譯語にして梵語三昧の譯なり、心を整

第百五十七段

「事理もとより二ならず」金鉉論に「迷悟雖殊事理體一」、事は外にあらはれたる所作、理は内の心の働き。
「外相」外にあらはれたる有様。
「内證」内心のさとり。

をして、後に善果を得られる原因を爲すものである。氣が散つて亂れた心でありながらも、繩床に著坐すると、そこに著坐して其事が、禪定になるのである。體の働きと心の働きは決して別のものでは無い、一つのものなのだ。道に背かない外形をして居れば、必ず心の悟りが本當に出來上るのだ。あの人は外の事を考へながら佛前に居るなどと云つて、さう云人を強ひて不信と罵つてはならぬ。どんな心で居ても、さうして居る人は、もうさうして居るだけで仰ぎ尊むべき人なのだ。

【評】 私はこゝに書いてある事にしみじみと同感に堪へぬ。私は毎日圖書館へ通つて居るが、時々夜など行く事が厭なことがある。さう云ふ時に行かないで家に居ると、ツイつまらぬ事で心を動かして價無き時を費して了ふ。これではいかぬと、其の後厭な時は、もう勉強はしない積りで、圖書館へ行く。そして繪の本かなんか、無責任な心で見居る。すると意外の獲物があつて、やはり来てよかつた、と思ふものである。何か書かうと思つて、氣乗りがしないので、インスピレーションを得てから、と思つて、散歩ばかりして居ると、いつまで経つてもインスピレーションは來ない。書きたくなくとも、机の上に原稿紙を置き、手に泉筆を取つて、サツとしてると、いつか書く氣になるものである。インスピレーションは筆の中に在ると、嘗て私は云つたことがある。勉強することが厭だと云つて、書齋の外に出て居るといつまで経つても勉強する氣にはなれぬが、厭でも、勉強すべき時間内は必ず書齋の内に居ると云ふ習慣を嚴守すれば、自ら勉強が出來、仕事が捗取るものである。
「あからさまに」の一節、まことに斯う云ふ事がある。道を説いた書と云ふものはまだよく

かたがた

道が呑込めない時代に學校で讀ませられる習慣になつて居るので、其の時はわからず、後になつても、一度讀んだと云ふ事の爲めに、再び見る氣にもならぬが、どうかして土用干などにフイと見ると、そこにある實に陳腐極まる言が、電の如く心を刺戟して、豁然として悟る所があるものである。

第百五十八段

「盃の底を棄つることは、いかゞ心得たる」と、或人の尋ねさせ給ひしに、「^{ぎょうたう}凝當と申し侍れば、底に凝りたるを棄つるにや候らむ」と申し侍りしかば、「^{ぎやうだう}さにはあらず。魚道なり。流を残して、口のつきたる所を、酒ぐなり」とぞ仰せられし。

【譯】 「飲みあましの酒を棄てると云ふあの式法は、何の爲めだか知つて居るか」と或人が私にお問ひになつたから、私は「凝當と申しますから、盃の底にとつたオリを棄てる爲めなので御座いませう」と申しましたら、「いや、さうぢや無い。凝當ぢや無い。魚道だ。酒の流れを飲残して、自分の口のついた所をあらふ爲なのだ」と仰せになつた。

【評】 人と獻酬する時に、酒を皆飲み干さず、わざと飲み餘まして、それを棄てると云ふ體があつたものと見える。それを盃の底を棄てると云つたのだ。盃洗の無かつた時代には、自

第百五十八段

「盃の底を棄つる」と「飲みあまして残りの酒を棄てること」。
「凝當」當の字に底と云意あり。
「魚道」魚は水源より川に下り交流に行く、又水源に戻るに必ず一定の水路を通るものなり。
酒を飲んだ、その酒の盃中を通つた道を忘れず、飲みあまりの酒をその同じ道を過ぎさせると云心にて魚道にたとへたるなり。

ら斯う云ふ禮があつたのだ。この事を「ギョートー」と字はよくわからぬで皆言ひ習はして居たのである。兼好がこれを凝當と解して、當は底と云意があり、殊に盃の底に使ふ字であるから、盃底のかりを流す爲めの禮だらうと思つたのは一應尤もであるが、魚道云々と云はれて見ると、成程さうだと思はれる。盃の底にオリがあると云ふことが、自然らしいが不自然だ。自分の口をつけた汚れを洒ぐ、と云ふので、始めてわかる。禮式の意味と云ものは自然な所にあるものである。魚道」と名づけたのも、古代の人の喩へ方の妙味が實に深いには無いか。

第二百五十九段

「みなむすび」表袴又は袈裟などに飾りに結ぶ結び方。



「蟻」湖川溝に生ず、一寸ばかり、頭は尖り、一頭は漸く廣く筆のさ

きの如し。



「にな」といふは「蟻をにな」と云は。

「みなむすび」といふのは、絲を結び重ねたるが、蟻といふ貝に似たれば云ふ」と、或やんごとなき人仰せられき、「にな」といふは誤なり。

【譯】 みなむすびと云ふ結び方は、あの絲を結び重ねた様が、蟻といふ貝に似てるから稱するのだ」と、或貴人が仰せられた。あの貝を普通「にな」と云つて居るのは誤である。

【評】 なんでも兼好は故實好きなので、故實家とよく交際して居たものと見える。になといふは誤なり」と云のは、貝をになといふは誤なり、とも取れるし、みなむすびをになむすびといふは誤なり、と云ふことにも取れる。しかし「になむすびといふは」と書いてない故を

以て、かりに譯のやうに解いておく。貞丈雜記には、こゝの文を引いて「になむすびといふはあやまりなり」と書いて居る。これは貞丈がこれを結目の方の名を正したと解した爲めに、つい文を寫す時に斯う書き損れたのだ。こんなことはどちらでも宜い。

第二百六十段

「勘解由小路の二品禪門」世尊寺行忠卿。「ひらばり」たひらに張りて目おほひにする幕。

「護摩」梵語、焚燒又は火祭と譯す、火をたきて佛に祈り一切惡事の根本を燒滅する法。故に護摩たくと云へば重語になる故、惡しとなり。

「行法」佛法修行の總てに云ふ語なれどこゝに云は特に天台眞言兩宗にて密教の事を行ふ作法をなす。

門に額かくるを、「打つ」といふは、よからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる」とのたまひき。見物の「棧敷うつ」もよからぬにや。「平張打つ」などは、常の事なり。「棧敷かまふる」などいふべし。「護摩たく」といふも惡し。「修する」「護摩する」などいふなり。「行法」も「法」の字を清みて云ふ、惡し。濁りて云ふ」と、清閑寺僧正仰せられき。常に云ふことに、斯る事のみ多し。

【譯】 門に額をかけることを「打つ」といふのは宜くなさうだ。行忠卿は「額かくる」と仰しやつた。物を見物する時の「棧敷をうつ」と云のも宜くなさうだ。「平張うつ」などは、普通云つて居るが、やはり宜くない。「棧敷かまふる」など云は宜い。「護摩たく」といふも惡い。護摩と云ふ字にたく意味があるのに、護摩たく、と云つては重語になるからだ。「護摩修する」

第二百五十九段——第二百六十段

「清閑寺僧正」清閑寺は洛東久々目路の北側清水寺の東南今眞言宗智積院に屬す。この僧正は道我僧正と云人なりと云。

とか「護摩する」などいふが宜い。「行法」も法の字を清んで云のは悪い。濁つて云ふものだ」と清閑寺の僧正が仰しやつた。ふだん云ふことでも、こんな風に、間違へて云つてることが澤山ある。

【評】「うつ」と云語は「撃つ」「討つ」と凶なひびきがあるから忌むと云ふのであらう。「平服」などは常の事なり」と云のは、平服は打つと云ても宜いと許したのでは無くて、これもいけない、いけないと知らないで皆が云つてゐる、と云つたのであらう。

「護摩たく」と云のは重語故と見えるが、「行法」のよみ方は、唯讀みくせであらう。

讀みくせなどどうでも宜いと云やうな事があるが、その意見をおしひろめると、文字の發音もどうでも宜くなつて了ふ。先達こんなことがあつた。それは讀みくせなど云よりも、語そのものを知らなかつた例だ。或國文學者が「歌合」に就て研究の報告をした。其の人は「ウタアイ」とのみ云つて居た。まことに聞いてゐても冷汗の出るやうであつたが、斯う云事はウツカリ笑へない。我々がやはり極めて普通の語を、餘程年長するまで正しい云方を知らないで通してゐることがあるものだ。

第百六十一段

花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後七日とも云へど、立春より七十五日、おほやう違はず。

「冬至」太陽の赤道より南最遠き處に至れる時、此時晝最短く夜最

も長し、今大抵十二月廿二日、舊曆にては十月中旬にあり。

「時正」彼岸の中日を云、晝夜平分の時。「おほやう」大抵。

【評】花の盛は、冬至から百五十日目だとも云し、彼岸の中日から七日目だとも云が、立春から七十五日目と云説が實際に最よく中つて居る。大抵間違つこは無い。

【譯】曆學者にでも聞いたことを、兼好が年々實地に徴して見た上で、斯う云つたのであらう。かう云事にまで興味を有つて居たのだ。

諸抄大成にこんな研究がしてある。たとへば元日立春の時は、立春より七十五日は三月十五日にあたる。時正の後七日は二月二十七日なり。冬至より百五十日は四月十五日なり。然れば、時正の後七日は花の盛に早く、又冬至より百五十日は花の時節に遅し。立春より七十五日は大概花の盛の時分なるべし。」

第百六十二段

遍照寺の承仕法師、池の鳥を、日頃飼ひつけて、堂のうちまで餌をまきて、戸一つを明けたれば、數も知らず入り籠りける後、おのれも入りて、たてこめて捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろくしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男ども、起りて入りて見るに、大雁どもふためき合へる中に、法師交りて、打伏せ拗殺しければ、

「遍照寺」山城葛野郡廣澤池の西北にありしと云。今その池浦觀音堂に寺號を傳ふ。「承仕法師」固有名詞にあらず、寺中の小使の役をつとむる僧なり。事を報告し歩き又法事の雑役などするなり。

「池の鳥」この池は廣澤の池なるべし。「飼ひつけて」日頃餌を與へ、自分に馴れさせたるなり。

「よそほひ」有様。形をも音をも云なり。

「おどろくしく」非常な物音。鳥の悲鳴羽音などなり。

「起りて」皆々方々より出づる様。

「ふためき合へる」バタバタするをふためくと云。

「所より」この村が訴人になりたるなり。

「使廳」檢非違使廳。

「基俊大納言」第九十九段に出でたり。

「別當」檢非違使廳の長官。

この法師を捕へて、所より使廳へ出だしたりけり。殺す所の鳥を、首に懸けさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になむ侍りける。

【譯】あの通照寺の承仕を勤めてゐた法師が、廣澤の池に下りる鳥を、ふだん餌などやつて、馴らしておいて、さて或時堂の中まで餌をまき散らして、戸を一つだけ開けた。鳥は喜んでその一つの入口から無数に堂内へはひつた。其後で法師自らもそこへ這入つて。唯一の入口を閉め切り、つまり鳥どもを逃げられないやうに、閉て込めて了つて、法師は片ツ端からその鳥を捕へては殺し、捕へては殺した。其の騒ぎ悲鳴やら羽音やらが、怖しく大きく聞えたのを、そのあたりの草刈童が聞きつけて、なんだか通照寺様で大變な音がするよと、人に告げたから、村の男達が、方々から立出て、寺へ行つて、その室へ踏込んで見ると、大きな雁がいくつもバタバタし合つてる中に、法師が居て、打ち倒し拗ち殺して居たから、男たちはこの法師を捕へて、牢屋へ入れられた。基俊大納言が別當の事件でありました。

【評】この承仕の仕業は唯殺生が面白までには無いらしい。これを賣らうとでも思つて遣つたのだらう。ともかく殘酷な有様である。日頃かひつけて」と云、發作的で無く、根を張つた悪業であるだけ、餘計憎惡の念を起させる。大雁どもふためき合へる中に」と云書き方、慘澹たる光景が遺憾無く寫されて居る。これの罪し方を、兼好は賛成して、時の別當の名を出して、敬意を表して居る。

第百六十三段

太衝の太の字、點打つ打たず、と云事、陰陽の輩、相論の事ありけり。もりちか入道申し侍りしは、吉平が自筆の占文の裏に、書かれたる御記近衛關白殿に在り。點打ちたるを書きたり」と申しき。

【譯】太衝の太の字は、太が本當だ、いや大が本當だと云論を、陰陽師達が議論した事があつた。もりちか入道がこれに就て申しました。安倍吉平の自筆の占文の裏へ記録を書かれたのが、近衛關白家に在るが、その占文には太衝とチャンと點が打つてある」と云つた。

【評】細かい考證になつて來た。昔は關白家などの記録でも、皆、不要な書類の裏に書いたものである。古い寫本にはよくこの類の裏がきのが今も傳はつて居る。紙が不自由であつたので、自然尊重したものであらう。近くは一茶が曆帖の裏へ句を書いたなどは、同じやり方である。

第百六十四段

「太衝」九月のことを陰陽道にて斯く云なり。「陰陽のともがら」陰陽師たち。陰陽師とは天文曆數占巫等を司る役所即ち陰陽寮の役人を云。「相論」互に論じ合ふと云こと、つまりは議論と云に同じ。「もりちか入道」傳つたはらぬ人。「吉平」安倍吉平。天文博士安倍晴明の子なり能く家業を傳ふ。主計頭陰陽博士に歴任す。「占文」占ひの事を書きたる書類。「御記」記録なり、日記やうのものなり。「近衛關白殿」藤原家平なるべし。近衛氏、正和二年七月關白となる。元亨四年五月十四日薨す年四十三。

「黙止」黙つて居ること

「浮説」根柢の無い話。
「人の是非」人を賞めたり或は毀つたり。

世の人、相逢ふ時、暫くも黙止する事なし。必ず言葉あり。其の言を聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他の爲に失多く得少し。これを語る時、互の心に、無益のことなりと云ふ事を知らず。

【譯】世の中の人ば、逢へばすぐ何か云ふ。一寸の間も黙つてると云事が無い。屹度何か云つて居る。其の云つて居る言を聞くと、大抵は何の益もない話だ。世の中のいゝ加減な噂話だとか、他人の批評とか云つた類で、自分の爲にも、他人の爲にも損害こそ深山あれ、得る所はない。こんな話を云合つて居る時、其話して居る當人等は、今無益なことを話して居るのだと云事を、自覺しない。

【評】こゝの「黙止」に、多く「もだ」と假名が振つてあるが「もだす」と訓ませるなら「もだす事」と書くべきだ。「もだす事」と、不必要な所で文法を破ることは、あるまじきことだ。これは「もくし」と訓ませる積りなのだ。

世の人よ、この段を見よ。御身等は多く語るを以て、交際に長けてるとか、圓滿とか云誇まで有つ。くだらない話を、誰に會つても聞かされるには、全く恐れる。兼好もよくこの恐入つたので、斯く戒めたのであらう。世人よ、御身等は平素何を見何を聞くのか。御身等は何か會話の材料をと思つて、見聞し、新聞などと云ものを讀んで、それを人と話し合ふのを、人生の楽しみと心得て居る。讀書と云事ですら、會話の爲にしようとして居る。人がマアテリングのことを話し合つて居る時に、自分も其の仲間入りしたい爲に、マアテを讀む、

と云つた風だ。

第百六十五段

あづまの人の都の人に交はり、都の人のあづまに行きて、身を立て、又本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべて、我が俗にあらすして、人に交はれる、見苦し。

【譯】東國生れでありながら都へ来て都人の仲間入りして生活を始めた人、或は都人でありながら東國へ行つて、そこで生活を確立した人。或は、僧では、都合上、本寺と縁を斷つて他寺に入つたもの、すべて斯う云やうに、自分本來の習俗に背いて他の團體の人に交つて居るの、見苦しいことだ。

【評】兼好は、都も知り、又東國へも行つて知つて居る。こゝに云つた醜い人の様子は各の地で實見したのであらう。

第百六十六段

人間の營み合へる業を見るに、春の日に雪佛を作りて、其の爲に金銀珠

第百六十五段——第百六十六段

「本寺本山」ともに同意
一宗の諸末寺の長たる
寺なり。
「顯密の僧」密は密宗即
ち眞言宗を云、眞言宗
の外は皆顯教と云。即
ちこゝに云は一切の僧
徒を指すなり。
「我が俗にあらすして」
自分本來の習はしに從
はないで、即ち東人に
て都人に、都人にて東
人に、交はり。僧にて
はもとの宗旨で無い宗
の寺に事ふるを云。

「雪佛」雪にて佛の形作るを云、子供の遊びなれど、この雪佛と云ものは禪家にて、人を悟らする爲にも作るなり今も作る雪達摩は達摩の形に似するなり。「構へを待ちて堂塔の出来上るのを待つて。「なるうちに」うちに其の間に於て。「營み待つ事」斯う云美衣を着、斯う云家に住まうなど、我身の爲に經營し、其成るを待つなり、團結の仕事に於ても同様なり。

玉の飾りを營み、堂塔を立てむとするに似たり。その構へを待ちて、よく安置してむや。人の命ありと見る程も、下より消ゆる事、雪の如くなるうちに、營み待つ事甚だ多し。

【譯】人間が各セツセと營んで居る事を見ると、丁度春の日に雪佛を作つて、其の佛の爲に着けるべき金銀珠玉の飾りの具を造り、これを安置する爲に堂や塔を立てようとすると同じ事をして居るのである。そんな物の出来上る前に、雪佛は解けて了ふ。どうして堂塔の出来上るのを待つて、雪佛を其所に安置することが出来よう。人の、生きて居ると思つて其の間に、ドシ／＼下から命が解けて消えて行く有様は、雪の通りである、其の解けつゝある間に、あアもしよう、斯う云境遇にならうなどと人は澤山の未來の計劃をして居るのだ。

【評】まことに人の身は、斯くして居る刹那々々に死につゝある。この有様を誰にもよく解るやうに見せるのは雪佛である。しかし私をして云はしめよ。雪佛は消えつゝあるが、其の消え行くのは、水蒸氣と云新しき形になり、新しく生きつゝあるのである。人は死ぬが、其體の物質は他の物になり（人間の一部にも無論ならう）新しく生きつゝある。而して意志は永久に働きつゝあるのである。

第百六十七段

「あらぬ道のむしろ」自分の専門外の道の席上詩作る人が歌會の席に行きたる類。「世に世だと云こと。覚えは」覚えたならば「牙を噛み出だす」牙を噛み合せて見する様。「品の高さ」人格の高きを云。位高きを云にはあらず。「そこばくの」随分澤山の。多きと云ことを稍不判明に云語。「言ひ消たれ」罵殺さること。あいつはダメだなど云はるゝを云。

一道にたづさはる人、あらぬ道の席に臨みて、「あはれ我が道ならましかば、斯くよそに見侍らじものを」と云ひ、心にも思へること、常の事なれど、世に悪く覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あな羨し。などか習はざりけむ」と云ひてありなむ。我が智を取り出でて人に争ふは、角ある物の角を傾け、牙ある物の牙を噛み出だす類なり。人としては、善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他に勝ることのあるは、大なる失なり。品の高さにてても、才藝の傑れたるにても、先祖の譽にても人に勝れりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ云はねども、内心に若干の咎あり。慎みてこれを忘るべし。痴にも見え、人にも言ひ消たれ、禍をも招くは、唯この慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、自ら明かに其の非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇る事無し。

【譯】一つ或道を専門にやつてる人が、専門外の道の席上に出て、自分が指を唾へて見て居ることを残念がり、「あゝ自分の専門の道なら、こんなに傍觀はして居ないものを」と口で云つたり、或は、云はずとも心で思ふと云のが、普通の人情であるが、これは非常に悪い事と

第百六十七段

思ふ。自分の知らない道を、人のやつてるのが美しく思はれたら、嗚呼羨しい。なぜ自分は習はなかつたらうなア」と云つて居るが宜い。自分の長じて居る智慧を振りかざして人と争ふのは、角のある獸が角を傾けて敵を突かむとし、牙のある獸が牙を噛み露はして敵に噛み付かむとする勢を示すのと、其長所で以て他を威嚇しようとする事は同じだ。そんな動物めいたことは人間はしないが宜い。人間としては、自分に善い所があつてもそれを誇らないで、他と争はないと云ふのを正しき事とすべきである。一體人が他人よりすぐれた何者かを持つて居ると云ふ事は、却て大きな害なんだ。人格の高さでも、才藝のすぐれたのでも、或は自分の先祖が勳功を立てたと云事でも、すべてさう云ふやうな事で、自分は他人より勝れて居る人間だと云自覺のある人は、たとひ口に出して云はないでも、その自覺があるだけで大きな罪惡であるのだ。他に勝つたことのあるは大きな損害だと云つたのは、愛の事だ。憤んで、かう云ふ自覺を忘却して了はなくてはいかん。さう云自覺は即ち慢心だ。他から見ると馬鹿に見えたり、人にも罵殺されたり、時に身に禍害を招くと云のは、其の原因唯この慢心にあるのである。何も博識多才で無く、唯一つの道だけに就ても、それに本當に長じて居る人は、自分でよく自分が其道に於てまだいけない所があると云事を知つて居るから、いつまで経つても満足しない。だから自負心と云ものが起らないのである。

【評】「他にまさることのあるは大なる失なり」とは、強い云ひ方である。この位に云つても宜いのである。自信、と云美しい名で呼ばれる心も、いけない。つまり慢心である。たとへば、むづかしい仕事がある。これは自分でたしかに出来ると云自信が無くては、それは著

手が出来ぬのであるけれども、おれなら大丈夫だ、と云氣の爲に、つい慎んで大事をかけてやると云事が疎かになる事がある。どうかうまく出来上るやうに、と云鞠躬如たる心持が絶えず無いと、大きな事を成し遂げられぬ。

齋藤松洲氏は俳畫がうまい。いつか氏が、私は俳畫を描く時には、自分がいろいろ精細な繪も描ける能力があると云事を、一切忘れて、下手になつた氣になつて、そして下手な繪を描かうとは決して思はず、どうか上手な繪を描きたい、と思ふ心持で描くのです」と云つた。これは決して俳畫のみの上の心得では無いのである。

一道に眞に長じた人は常に不満足である、とは眞の言である。長じた人、若しくは長びむとする人で無いと、この心持はわからぬ。一世の人に羨ましがられる人、其人自らは不満足で居る、こゝが實に尊い所である。ぢきに満足して了つて、一寸人に賞められたが爲に、向上を中止すると云類の人が、いつの代にも多数なものである。

「品の高さにて」を階級即ち位官素性などに説くのは、中つて居ない。こゝは道德のすぐれたると云事にも、慢じてはいけなさと云つたのである。

第百六十八段

年老いたる人、一事すぐれたる才の有りて、「この人の後には、誰にか問はむ」など云はるゝは、老の方人にて、生けるもいたづらならず。さは

「老の方人」老人の味方

かう云人のあるのは老人仲間の光榮なるなり。

「生けるもいたづらならず」老いて生きて居る其事が無意味で無い。

「この事」その才藝。

「すゝろに」むやみに。

「おとなしく戻きぬべくもあらぬ人」おとなしくとは、軽はずみの人で無きを云。

もどく、とは批難すること。

何でも無い人なら、さうぢや無い、なども云へるがひんどのいゝ、どうも何を云はれても、ヘイ／＼と開いて居なくてはならぬやうな人云。

「誰にこの道の事を尋ねよう」などと唯一の師表と仰がれて居る人は、これは實に我々老人の味方と云もので、老人達の光榮であつて、さう云人は老いながら生残つて居ると云事も、無意味で無い。しかし、老人で才のあるのでも、一向傑出して居ないのは、傍から觀ると、「あゝあの人はいまだにあの位の所に居る。もう餘命も短い。一生あの才藝にかゝり通して終る人だな」と思はれて、愚劣に見える。だから、まア、少しの才があつても老人は、人に訊かれても「や、もう、すっかり忘れて了ひました」と云つて居るが宜い。一遍りは知つてゝも、むやみに其事を多り散らす人は、「あんなに多るのは、大した才人ぢや無いんだよ」と思はれるし、又多く多るうちには、自然、誤りも云はうと云ものだ。よくは存じませぬなどと云つて居る人は、やつぱり、あの人は眞に斯道の大家だ、と人にも思はれる。況んや、

世の本はすたれたるも出なすか多し 四三〇

あれど、それも勝れたる所の無きは、「一生この事にて暮れにけり」と拙く見ゆ。今は忘れにけり云ひて有りなむ。大方は知りたりとも、漫に言ひ散らすは、「さばかりの才にはあらぬにや」と聞え、自ら誤りもありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」など言ひたるは、なほ實に道の主とも覚えぬべし。まして、知らぬ事、したり顔に、おとなしく戻きぬべくもあらぬ人の、言ひ聞かするを、「さもあらず」と思ひながら聞き居たるいとわびし。

【譯】 老人で、何事か一つすぐれた才藝を持つて居る人であつて、世人から「この人が死んだら、誰にこの道の事を尋ねよう」などと唯一の師表と仰がれて居る人は、これは實に我々老人の味方と云もので、老人達の光榮であつて、さう云人は老いながら生残つて居ると云事も、無意味で無い。しかし、老人で才のあるのでも、一向傑出して居ないのは、傍から觀ると、「あゝあの人はいまだにあの位の所に居る。もう餘命も短い。一生あの才藝にかゝり通して終る人だな」と思はれて、愚劣に見える。だから、まア、少しの才があつても老人は、人に訊かれても「や、もう、すっかり忘れて了ひました」と云つて居るが宜い。一遍りは知つてゝも、むやみに其事を多り散らす人は、「あんなに多るのは、大した才人ぢや無いんだよ」と思はれるし、又多く多るうちには、自然、誤りも云はうと云ものだ。よくは存じませぬなどと云つて居る人は、やつぱり、あの人は眞に斯道の大家だ、と人にも思はれる。況んや、

知らない事を、得意然と話されるのは厭になる。それも何でも無い人が云のなら、「さうぢや無いさ」などと云つてやることも出来るが、シヤンとした人で、批難などしてはならないと云側の人が、知りもしない事を間違ひだらけに話されるのを、心の中では「さうでも無いさ」と思ひながら、うはべは成程々々と云つて聞いて居るのは、全く弱りきる。

【評】 「おとなしくもどきぬべくもあらぬ人の」と云所に至つて、微笑を禁じ得ない。これも吾れ人現に經驗して居ることだ。よく穿つた語だ。兼好が屢斯う云目にあつた其の苦しみをこゝでスツカリ發表して居るのだ。

第百六十九段

「何事の式と云ふことは、後嵯峨の御代までは、云はざりけるを、近き程より、云ふ詞なり」と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、又内裏住したる事を云ふに、「世の式もかはりたる事は無きにも」と書きたり。

【譯】 「なに／＼の式、と云ふことは、後嵯峨天皇の御代までは云はなかつたのを、近來云ふやうになつた語である」と或人が云ひましたが、これは間違である。建禮門院の右京大夫が、後鳥羽天皇御即位後に、再び内裏に入つて仕へた事を云ふところに、「世の式もかはりたる

第百六十八段——第百六十九段

「式」儀式の式なり。「建禮門院の右京大夫」建禮門院は平清盛の女永子。高倉天皇の中宮たり。右京大夫はこの建禮門院に仕へし女なり、貞永の頃まで生きたる人なり、この人の一生甚だ悲哀なり、佐々木信綱氏著歌學論叢に詳し。家集を建禮門院右京大

夫集といひ、群書類従卷二百八十に出づ。「又内裏住したる」戦亂後右京は比叡坂本あたりに退隠し居たりしが、後鳥羽天皇御即位の後再び内裏に事へたるなり。「世の式も」いろ／＼普通に行はるゝ儀式を云、世と云に深き意無し。

事は無きにも」と書いてある。後嵯峨の朝よりズツと前に、もうこの語があつたのである。【評】例の折にふれての考證である。いつ頃からあつたらうと探す心で右京大夫集など調べたのでは無く、ふと見あたつたので、さきに云つた人の説を駁して書いて置いたのである。この右京大夫集も、たしかに兼好に愛讀さるべき質の書である。必ずこの書を愛讀して居たに違ひないと思ふ。讀んで涙の流れる集である。まことの聲の、悲痛な叫びが、集つて居るのである。右京大夫は、人に認められなかつたが、これを近來になつて、大いに世に紹介したのは、佐々木信綱氏である。いつか氏を訪問した時に、この女の話を一寸話されたことがあつた。其の後、其の著「歌學論叢」中に納められた「建禮門院右京大夫」と題した一篇を讀んで、感深かつた。彼女は「平安王朝風流の名残と、西八條驕奢の榮え」の間に若い身を託して、そして重盛の子資盛を戀した。この戀は、心に任せぬふしが多かつた。彼女はよく泣いた。壽永元暦の世の亂れが來た。彼女の一生の春は去つた。戀人とは別れた。境浦の戦が來た。平家の一門は没落して了つた。彼女の命であつた戀人は海に投じて消えて了つた。世は變つた。彼女はたゞ過去の夢のみを逐つた。彼女は世と逆行する人であつた。大原山の奥に舊主建禮門院を訪つた時の心ほどんなであつたらう。比叡坂本あたりにしばらく、さまよつて居たが、後に再び宮仕へするやうになつた。こゝに兼好が引いたのはその時の記事である。次にその原文を引く。これは、兼好がどう云ものに心を引かれたかと云こともわかるからである。

「若かりし程より、身を用無きものに思ひ取りにしかば、只心より外の命のあらるるだに

も、厭はしきに、まして人に知らるべきことゝは、かけても思はざりしを、さるべき人々、去り難く云ひはからふことありて、思ひの外に、年經て後、又九重のうちを見し身の契り、かへすゝ定めなく、我が心のうちもつれなくすゝろはし。藤壺の方さまなど見るにも、昔住み馴れしことのみ思ひ出でられて悲しきに、御しつらひも世の式も、かはりたることも無きに、唯わが心のうちばかり、碎けまさる悲しき、月の隈無きをながめて、覺えぬことも無くかきくらさる。昔かろらかなるうへ人などにて見し人々、おも／＼しき上達部にて、皆あるにも、とぞあらまし斯くぞあらましなど思ひつゞけられて、有りしよりもけに、心のうちは遣らむ方も無く、悲しき事何にかは似む。高倉院の御氣色に、いとよう似まゐらせおはしましたる上の御様にも、數ならぬ心のうち一つたへ難く、來し方戀しく、月を見て、今はたゞしひて忘るゝ古を思ひ出でよと澄める月哉」

群書類従本には、兼好の考證の根據の肝腎の「世のしきも」と云ところか、「世のけしきも」となつて居る。文段抄には、これは誤であらうかと云つて居るが、全く誤に違ない。御しつらひも」と來た工合が、どうしても「世の式」と來なくてはならぬ。この「式」と云語を知らないと、どうしても「けしき」の「け」が落ちたのだと思へる。さう思つて誰か「け」を補つたのであらう。

第七十段

人か存り人かり

「むかひたれば」向ひて在れば。

「心づきなき事」心づきなしとは無情と云ことにもいへど、こゝは氣の落着かぬ事、と云ことなり、急ぎの用などある折を云。

「なか／＼」却て。

「言ひてむ」客に。

「阮籍」晉の人、竹林七賢の一人なり、字は嗣宗、容貌魁偉、或は戸を閉ぢて讀書し、累月出でず、或は山に登り水を遊び日を竟へて歸るを忘る、車跡の窮まる所すなはち慟哭して還る、老莊を好み酒を嗜む、晩年始平の太守となる。

さしたる事無く、人の許行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、其の事果てなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。人と向ひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心も静ならず、萬の事障りて、時を移す。互の爲益無し。厭はしげに云はむも悪し。心づきなき事あらむ折は、なか／＼其の由を言ひてむ。同じ心に、向はまほしく思はむ人の、徒然にて、「今しばし、今日は心静に」など云はむは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事と無きに、人の來りて、長閑に物語して歸りぬる、いとよし。又、文も、
「久しく聞えさせねば」などばかり、云ひおこせたる、いと嬉し。

【譯】別にこれといふ用も無いのに、人を訪問するのは、よくない事である。用事があつて行つても、用事が済んだら、早く歸るが宜い。長尻は、實にうるさい。人と對坐して居ると、いろ／＼吵らなくてはならぬし、體もくたびれ、心も静で無いその爲にいろんな差支があつて、さうして其のおこるのをどうすることも出来ず、時間を費して坐つてると云ふ事、雙方何のやくにも立たぬことだ。困ると思つてもまさか客を嫌ふやうな事を云のも悪い。何かさしかゝつた急用でもあつて落着いて居られないやうな場合には、こんな時は却て、實はか

青き眼「親愛する目つきを形容したる語なり阮籍は歓迎する客には青眼をし、いやだと思ふ客には白眼をしたりと云。籍の母歿せし時、魯喜弔ひに来る、籍白眼をなす、喜憚ばずして退く、喜の弟康これを聞き酒を齎らし、琴を挟みて造る、籍大に喜んで青眼を見ばす、と云こと、晉書阮籍傳に見ゆ。」「聞えさせれば」おたよりをしませんから。

うかうでと客に云へるからよいが、別に急用などは無いと云場合には、いつまでも御つきあひをして居らねばならぬのは、全く困るものだ。だから客たるものは、どう云場合でも、早く歸るが宜いのだ。しかし、主人が、自分と氣の合つた人で、自分と對談することを希望して居る人が、無聊な折からで、もう少しお話しなさい。今日はまア御ゆつくりと」などと云つたやうな場合は、この限りで無い。阮籍は客を歡ぶと疎むとの心を目つきで見せたと云。歡ぶ時は青眼をしたと云。これは何も阮籍に限つたことでは無い、誰でも歡ぶ時には目つき様子にそれが隠れず現はれるものだから、眞に主人が厚意で留めて呉れる場合には、その意に従つて長居するも宜いさ。別に何と云用も無いのに來たと云呑氣な客が來て、ゆつくり話をして歸つて行くは、まことによいものだ。又、手紙でも、用事などの書いてあるのは、うるさいが、何の用も無く、たゞ「あまり御無沙汰しますから」などとだけ、書いてよこしたのは、まことに嬉しい。

【評】山崎宗鑑が「上はたち中は日暮し下は夜まで一夜泊りは下々の下の客」と書いておいたと云ふが、こゝと全く同じことを云つたものだ。人間が、どの位この客來と云ことで損をしてあるか知れない。面會料と云ふものを取る人もあるが、なか／＼金では償ひのつかぬ損をする。或る面會料を取る人のところへ、友人が、それは餘りに傲慢不遜だと云つて、忠告に出かけて行つた。そして散々其の非を鳴らしたが、彼は聞流し／＼とて、糺りに、規定通りの面會料を請求したさうだ。これは作り話では無い。現存して居る人で、現にあつた話だ。

「心づきなき事あらむ折はなか／＼其由をいひてむ」と云ところは、例の周到な書き方で

ある。
これと云用事の無い客、これと云用事のない手紙、かう云ふものが、兼好の好む所であつた。所謂「のどか」と云ことは、用があつてはおこり得ぬ趣なのだ。

第七十一段

「貝をおほふ人」貝おほひ、又の名貝合せと云遊戯をする人。
これは、三百六十の殻を分ちて、一片の殻を地貝と稱し悉く場に並べて中央に空所を置く、さて一片の殻を出貝と稱し、一箇づつ出して空所に置き、衆圍み坐して、出貝に合ふべき地貝を探して合はす、合はせたるもの多きを勝とす。
「こゝなる」弾かむとする石のあるそばの聖目を指す。

貝をおほふ人の、我が前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖のかげ、膝の下まで、目をくばる間に、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤の隅に石を立て、弾くに、向ひなる石をまもりて弾くはあたらす。我が手もとをよく見て、こゝなるひじり目を直ぐに弾けば、立てたる石必ずあたる。萬の事、外に向きて求むべからず。唯こゝもとを正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて、前程を問ふことなかれ」と云へり。世を保たむ道も斯くや侍らむ。内を慎まらず、軽くほしきまゝにして、みだりなれば、遠國必ず叛く時、始めて

「ひじり目」碁盤の聖目のことなり、語原詳ならず、碁盤の中央と上下と左右と四隅とに合せて九ヶ所に打ちたる點を云。
技の劣れる者、打つに先立ちて此點に石を置く。
「立てたる石」むかうに置いた石。
「こゝもと」手近のところ。

謀を求む。「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、愚なる人なり」と、醫書に云へるが如し。目の前なる人の愁をやめ恵を施し道を正しくせば、其の化遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして徳を布くにはしかりき。

「清獻公」趙抃のこと。字は聞道、宋の西安の人、景祐の初の進士なり、殿中侍御史に遷り、彈劾して權倖を避けず、京師鐵面御史と號す、參知政事となる王安石と合はず、求めて杭州に知たり、卒して清獻と諡せらる。
「好事を行じて」唯よい事をして居ればよいさきのことと思つて居

【譯】貝合せする際に、自分の前のに氣をつけないで、よその人の前を見渡して、人の袖のかげや、膝の下まで、目をくばつてうちに、合ふ貝は自分の鼻のさきにあつたのを、人が取つて合せてしまふものだ。貝合の上手な人は、さう無性によその方にあるのを取ら様子でも無く、自分の手近なだけで發見するやうだが、結局おほふ数は多くて勝つのだ。又一例を云。碁盤の隅に石をおいて、こちらの隅から石でその石に中てようと弾く時、的になる石の方のみ見詰め氣を付けて弾くと、あたらない。自分の手もとをよく見て、手もとの聖目に氣をつけ、眞直なアテをして弾くと、屹度むかうに置いた石にあたるものだ、何事でも、遠い方へ向いて求めて居ては駄目だ。唯手もと、目前の所を正しくしなくてはならぬ。清獻公は、人間と云ふものは、唯善事を行つて居て、さきの事など考へないが宜い」と云はれた。天下の政治もこの流儀で宜いのであらう。國內の事に注意せず、輕率にして、放恣にして、妄漫にして居ると、必ず遠國が叛く。其時になつて、さてどうしたら宜いかと策を求める。愚な話だ。風にあたつたり、濕氣のある所に寝たりしておいて、その爲に病氣になつておきながら、どうかこの病氣をなほして下さいと神様に願を懸けるのは、馬鹿な人である」と醫

第七十一段

るには及ばぬ。
「遠國必ず叛く時」遠國必ず叛く、其の時と云べきを、つめて云ひたるなり。

「禹の行きて」書經の大禹謨に、禹が帝堯の命を受け三苗と云國の民の亂をなすを討ちたるに、なかなか従はず、然るに伯益禹に兵をよめて徳を布きたる方よしとす、禹も帝舜もこの議に従ひたるに三苗間も無く服したるを記せり。三句苗民逆命益賛于禹、曰惟徳動天、無遠弗届、禹拜三昌言、曰兪班師振旅、帝乃誕敷文徳、無子羽千兩階、七旬有苗格、

書に書いてあるが、全く其の通りである。目前に居る人の愁を去つてやり、恵を施してやり、正しき道を立て、踏んで行けば、徳化は遠い國まで流れて、皆我が徳に靡くものだ、と云理を知らないのだ。禹が三苗を平らげる爲に遠征したが、その勢力よりは、軍勢を連れ歸つて戦を止めて、其の代り、徳を布いた方が、効果が、あがつたぢや無いか。

【評】 禪で悟る人が、月を見て悟つたり、蟲の鳴くのを聞いて悟つたりするのも、手近な、見なれた物を、一所懸命になつてるので、改めて見聞して、フイと眞理を捕へるのである。眞理は決して遠い所にのみあるのぢや無い。實行方面でいへば、道徳も政治も、其の通りである。

「好事を行じて前程を問ふことなかれ」とはまことによい教である。今日爲すべき正しき事を、今日爲して、進めば可いのである。

スフィンクスの説話も、私はこゝに云つてあるやうな意味に於ても、面白い教訓を含んで居ると思ふ。スフィンクスの謎は人間そのもの事であつた。問はれたものは人間自らであつた。多くの人間は皆自分の事であることを忘れて、遠いものばかり探した。そして多くが皆スフィンクスの害にあつたのだ。

第百七十二段

若き時は、血氣、内に餘り、心、物に動きて、情欲多し。身を危ふめて

碎け易き事、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを

棄て、苔の袂にやつれ、勇める心盛りにして、物と争ひ、心に恥ぢ、

羨み、好む所日々定まらず。色に耽り情に愛で行を潔くして百年の

身を誤り命を失へる例願はしくして、身の全く久しからむ事をば思はず。

すける方に心引きて、長き世語りともなる。身を誤つことは、若き時のしわざなり。老いぬる人は、精神衰へ、淡く、疎かにして、感じ動く所乏し。心自ら静なれば、無益の業をなさず。身を助けて、愁無く、人の煩ひ無からむ事を思ふ。老いて、智の、若き時に勝れる事、若くして、容の、老いたるに勝るが如し。

【譯】 若い時は、血氣が、身の内にあり餘つて、心はあふ物毎に動いて、いろ／＼な慾が起る。其の一身を危くして、碎け易いあり様は、玉を飛ばしたやうなものだ、若い人たちは、美麗を好んで、美衣美家などの爲に財産をつぎ込む。さうかと思ふと、忽ちにして氣が變つて、其の求め得た美麗な物を一切打棄て、衣着たやつれ姿の坊主になどなつて了ふ者もある。若い人は勇む心が盛であつて、他人と争ひ、自分よりすぐれた人にあふと、心中に己れをしみ／＼恥かしく思ひ、先方を羨む。心がきまらぬので、今日は甲のことを好み、明日は

第百七十二段

「情欲」男女の慾をのみ云ふにはあらず。

「苔の袂にやつれ」苔の袂は法衣のかざりけなきを形容したるを云。出家したるさまなり。

「行を潔くして」唯小氣味のよい行爲をすること。

「すける方」好色の方面「身を助けて」我が身を愛し、大事にするを云

忽ち乙のことを好む。若い人の理想とする所は必ず、色情に耽り情人の情をういものと思ひしめ、或は小氣味よい行をして、さう云事の爲に百年も生きられる身を亡ぼして一命を義の爲、或は情の爲に犠牲にしたと云ふやうな人の行のみを理想として居る。一身を完全に保つて長いきをしようとは思はない。だから、自分もとかく好色の方に心を注いで、その方で死後までいつまでも恥かしい噂話の種になる。身を誤つと云ふことは屹度若い時の行爲に因る。老人になつた人は、精神が衰へて、淡泊で、執着心が少く、物にも感動しない。それで心が自然静である。静であるから、役に立たぬ事を血氣任せにやると云ふことはしない。自分の身を愛護して、自分にも心配無く、人にも迷惑をかけまいと思つて居る。これが智者と云ふものである。老人は皆智があるのだ。老人になると、智は若い時よりも勝つて居る。若い人は容姿が、老人より勝つて居る。その勝つて居る程度は同じものである。

【評】 若い人の心定まらぬ様を並べた中に、「昔の袂にやつれ」と云のを入れたのは面白い。出家する者は皆々尊いとは、兼好は云はないのだ。血氣の出家は、卑しんで居るのだ。

若いうちは、人は物の一面のみを見る。鮮明に見る、そして他面を見ると云餘裕が無い。戀のことは云にも及ばぬが、義侠と云ふやうな事、若い人には義侠と云ふ語がいかにも美しく清く響くよ。しかし、事に純善も純悪も無い、義侠と云事も必ずしも善とばかりは云はれないのだ。場合によることである。老いるとそれに氣がつくが、若いうちはそれに氣がつかぬ。義侠はあらゆる場合に善だと思ひ込んで、つまらぬ事に力を入れて、その爲に一身をも獻げて、我は善行をなせりとの誇りをもつて、死んで行くと云ふやうな事がある。勇は勇

だ、美しくないとは云はぬ、しかし智があるとは云はれぬのだ。「情に殉ずる」、「道に殉ずる」、この「殉ずる」と云語が如何に若い人の心を躍らするよ。

老人は必ず物の両面を知つて居る。悲みを悲むと共に、悲しむべき事で無いと云事も知つて居る。喜ぶと共に喜ぶべき事でも無いと云事も知つて居る。これが本當なのだ。斯う云ふ言行を「不得要領」と云一語を以つて、若い人は評し去るが、實はこの不得要領ほど得要領なことは無いのだ。

第七十三段

小野小町が事、極めて定かならず。衰へたる様は、玉造といふ文に見えたり。此の文、清行が書けりといふ説あれど、高野の大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛りなること、其後の事にや。猶おぼつかなし。

【譯】 小野小町の事蹟は甚だわからない。其の小町の衰へた有様は、玉造といふ書に出てある。この書は清行が書いたと云説もあるけれども、弘法大師の著述目録にこの書名がのつてゐる所を見ると、大師の御作のやうである。大師は承和の初年におかくれになつた。小町が盛りの時代はそれよりは後のことと思はれるがどうであらう。どうもわからない。

第七十三段

「小野小町」古來其の傳を詳にせざりしが黒岩涙香氏の「小野小町論」に於て初めて判明せり。其の歌は古今集其他に多く出づ。「玉造と云文」玉造小町壯衰書を指せり。この書群書類從卷百卅六に出づ、玉造小町と小野小町とは別人なりとの説あり「清行」三善清行を指せるなるべ

し、貞觀中文章得業生となり、延喜になりて大學頭となり式部大輔にうつる、時弊に關する意見十二條を上る。帝嘉納す。十七年參議に任ぜられ宮内卿を兼ね。翌年但馬權守を兼ね。其年十二月卒す、年七十二。

「高野の大師」弘法大師のこと。高野山金剛峯寺の開山、日本眞言宗傳來の元祖なり。延暦廿三年入唐、承和二年三月高野山にて入定、年六十二。

【評】 小町の歌の強みある眞情吐露が、兼好をして愛誦せしめ、ひいて小町の傳を知りたい念を起したのであらう。

「野槌」には、眞言家へ問合せたが、大師御作目録には玉造ははひつて居ないと云つて来た、兼好の見たのは別本であるのだらうか、と疑つて居る。

本居内遠は玉造小町と小野小町との別人であることを、「小野小町の考」と云論文で考證して居る。

國文學全史には、「小野小町の傳記の詳細は知るべからず。古今集目録に、出羽郡司の女にして比右姫といふといへど、相並べて、或は云く、母は衣通姫とあるの杜撰なるより見ればこれも信を置きやすからず。小野氏系圖によれば、篁の孫良眞の女にして美材の従妹とす。或は小町に數人あり、攝して一人と見るは誤れり、などいへど明證あるにあらず。玉造小町といふは架空の人物なるべく、これを除いて、古今集以下の歌集に見えたるは小野小町の外に其人あるを知らざるなり。されば小町を論ぜむとせば信すべからざる俗説はさし措いて直ちに勅撰集に見えたるその和歌について考證せざるべからず。別に小町集あれどもその杜撰なる由は既に本居宣長の玉勝間に論あり。」とある。

斯く古來の疑問であつた小町の傳は黒岩涙香氏の研究によつて始めて判定された。これは國文學界に於ての一大發見である。氏の研究によれば、小野小町は本名比右姫、出羽の國の小野族の出で、出羽の郡司の娘である。十三四歳の頃に采女となつて朝廷に出た。仁明天皇から光孝天皇の頃まで生きた人である。自ら持する高く、多くの男の云ひ寄るを退けて、唯深

草の帝を戀ひ奉り又戀はれまつた。所が藤原氏の爲に朝を退けられ、戀も遂げられず、比叡山の麓小野莊に住んで時機を待つた。この頃訪ひ來れる禰紳に、帝の御事はもう、忘れたらう、と問はれて、「みちのくの玉造り江に漕ぐ舟のほにこそ出でれ君を戀ふれど」と詠んだ。これから玉造小町と云渾名も出來た。時機は遂に來なかつた。人のいひ寄るのは退け通した。嘉祥三年に深草の帝は崩御になつた。これから寺參り三昧をして居た。六十歳頃、文屋康秀が、三河掾になつて赴任するに同道して地方を見物し、歸京後、綴喜郡の井手村に住んで、六十九歳で歿した。絶世の美貌をもつて、しかも一度も事を知らず無垢の一生そして涙の一生を了つた。歿したのは多分天慶七年らしい。屍は井手寺に葬つたと云のである。氏は「小町集」の古來の疑問をも解いた。玉造小町壯衰書は凡僧の因果説附會のものとして、これが氏が「婦人評論」に連載した「小野小町論」の概要である。單行本になると云ことだが、斯う書いてる今日はまだ上梓されぬ。

第百七十四段

小鷹によき犬、大鷹に使ひぬれば小鷹に悪くなるといふ。大につき小を捨つる理り、まことに然かなり。人事多かる中に、道を樂しむより、氣味深きは無し。是れ實の大事なり。一度道を聞きてこれに志さむ人、い

第百七十四段

「小鷹」鳴、鶉など小さき鳥を取る鷹狩を云。「大鷹」雉など大いなる鳥を取る鷹狩を云。「氣味深き」風味のよい

と云に同じ。
「すたれざらむ」廢する
ことが出来ぬと云こと
があらうや。

づれの業かすたれざらむ。何事をか管まむ。愚なる人といふとも、かしこき犬の心に劣らむや。

【譯】小鷹狩によく使へる犬を、大鷹狩によく使へなくなると云ふことだ。大物のみを目がける癖がついて、小鳥を目がけなくなるからだ。大きなものに附いて、其爲に小さいものを捨て、顧みぬと云普通の道理に、犬が随ふので、尤なことである。さて人間の爲すべき事、いろ／＼と多くあるが、其中で、道を樂しむと云事ほど、深い味のあることは無いのだ。是れが本當の大切な事なのだ。一度道を聞いて、其道を歩まうと志した人は、他の一切を棄てるが宜い。どんな事も止められぬことは無いのだ。他の事は何も爲ないのがよいのだ。これが出来ぬと云管は無い。現に犬が大物をとるを知ればもはや小鳥はかへり見なくなるでは無いが。

【評】大きな物の爲に、他の小さい物を棄てよ、棄てよ。いくら馬鹿な人間でも、伶俐な犬の心より下等なるべき管は無い。

第七十五段

「心得ぬ」わけのわからぬ。
「ともある毎に」何か事

世には心得ぬ事の多きなり。ともある毎には先づ酒をすゝめて、強ひ飲ませたるを、興とする事、如何なる故とも心得ず。飲む人の顔、いと堪

がある毎に。
「ばかりて」見はからつて、(目つけられぬやう)。
「すゝるに」むやみに。事をドシ／＼進めるかたち。
「うるはしき」美しき人と云にはあらず、シヤンとした端然とした人と云ことなり。
「を」がましく「馬鹿然」と見えるを云。
「息災」健康。
「前後も知らず」どちらが前だが、うしろだかの區別さへつかなくなると、即ち人事不省になるを云。
「によび」呻吟。
「生を隔て」世がかはつたやうな心持。昨日のことは前世のことのやうなるなり。
「わづらひとなる」不都合な事、困つた事が起

へ難げに、眉をひそめ、人目をはかりて捨てむとし、逃げむとするを、捕へて、引き留めて、すゝるに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れ臥す。祝ふべき日などは、あさましかりぬべし。あくる日まで、頭痛く、物食はず、によび臥し、生を隔てたるやうにして、昨日の事覚えす。公私の大事を缺きて、わづらひとなる。人をして斯る目を見する事、慈悲も無く、禮儀にも背けり。斯く辛き目にあひたらむ人ねたく口惜しと思はざらむや。人の國に、斯る習ひあんなり、と、これらに無き人事にて、傳へ聞きたらむは、怪しく不思議に覚えぬべし。

【譯】世の中にはわけのわからぬ事が多いものだ。何かと云と、すぐ酒をすゝめて、無理強ひに飲ませて、それを面白いこととするのは、どう云わけだか解らない。飲む人の顔を見るとまことに苦痛に堪へられぬ顔つきをして、眉をひそめて、人の見ないのを見はからつては酒を捨てようとする。或は逃げ出さうとする。それを逃さないといひつ捕へて、引きとめて、ドシ／＼飲ませる。さうすると、今まで容儀りしく立派であつた人も、忽ち狂人に化して馬鹿々々しいやうな事をする。健康な人も、見る／＼重病者になつて、人事不省になつて

第七十五段

るを云。

「あんなり」あるなり。
「これらに無き人ごとにて」日本には無く、よその國にある事として。

「思ひ入りたるさまに」分別らしき様を云。

「紐」衣の紐なり。

「用意無き」つゝしみ氣無きを云。

「額髪」額の上にバラリと短き髪を垂るゝなりそれを云。

「まばゆからず」おもはゆげなく。恥かしげなき様。

「顔うちさゝげて」うつ

むかす、露骨に顔をあふむけたる様。

「口にさし當て」人の口へもつて行く様。

「肩ぬぎて」肌ぬぎて肩をあらはしたる様。

「すぢりたる」體を曲げくねらせるを云。舞ふ様を醜げに云なり。

「我身いみじき事ども」自分のえらいこと。

「のりあひ」惡口しあひ

「いさかひて」喧嘩して

「あやまちして」怪我

「よろほひ」よろ／＼と歩くさま。

倒れてしまふ。祝ひ事の日などに、こんな病人をこしらへると云事は、あさましい事ぢや無いか。散々かうして飲まれた人は、その翌日まで、頭痛がして、何も食ふことも出来ず、ウン／＼唸つて寝て居る。まるでさきの世の事のやうな工合に、昨日の事は何も記憶せぬ。公用も私用もこの宿醉の爲に、爲すべき事を爲ることが出来ないもので、不都合な事が起つて来る。人をこんな目に合はせる事は、慈悲心を缺いた事であり、又禮儀にも背いたことである。こんな風につらい目にあつた人は、けしからん甚い目にあはせをつた、と飲ませた人を憎んで残念がるに違ない。しかしかうしたものと諸君は慣れツこになつてゐるから、何とも思はぬが、假にこの習慣が日本に無いと想像して見給へ、そして外國に斯う云習慣がある、と云ことを聞いたと假定し給へ。必ず奇怪な不思議千萬な事と諸君も思ふに違ない。

人の上にて見たるだに心憂し。思ひ入りたる様に心にくし、と見し人も、思ふ所無く笑ひのしり、言葉多く、烏帽子丕み、紐外し、脛高くかゝげて、用意無き氣色、日頃の人とも覺えず。女は、額髪晴れらかに搔き遣り、眩からず、顔うちさゝげて、うち笑ひ、盃持てる手に取りつき、よからぬ人は、下物取りて口にさし當て、自らも食ひたる、様惡し。聲の限り出だして、各歌ひ舞ひ、年老いたる法師、召出だされて、黒く汚き身を、肩脱ぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ疎

しく憎し。

【譯】 何も自分が酔つたのぢや無い、人のことなのだが、それでも實に見て居ても苦痛だ。深い思慮のある様子をして、敬意を表すべく見た人も、酔へば、何の分別も無い様子で大聲で笑ひ騒ぎ、よく哆り、いつか烏帽子を横ツちよにゆがめ、紐も外してしまひ、裾をまくり上げて脛をあらはに出し、つゝしみたしなみも無い有様になつて、平素の人とは思はれぬ。女は又、前髪を邪魔らしく左右へ搔きのけて、むき出しの額になつて、恥かしげも無く顔をあふむけて、笑ひ、盃を持つてる人の手に取りついたりする。下卑た人は、下物をはさんで人の口へ押つつけて食はせ、又自分にも食ふ、實に不體裁だ、聲のありつたけ出して、皆が歌をうたふ、舞をする。時には老人の法師がさう云酒席へ呼び出される。そいつまでが舞をする。黒いきたない體なのを、肌ぬぎにして、露はし、醜狀見るにたへられざる様子でくねり／＼と舞を舞ふ。この舞ふ法師も憎いが、これを面白がつて見て居る人まで、厭になり憎くなる。

或は又、我身いみじき事ども、傍痛く言ひ聞かせ、或は醉泣し、下様の人は、罵り合ひ、いさかひて、あさましく怖し。恥がましく心憂き事のみありて、果ては、許さぬ物ども押取りて、縁より落ち、馬、車より落ちて、誤しつ。物にも乗らぬ際は、大路をよろほひ行きて、築土、門の

「築土」土塀。

「得も云はぬ事ども」口
で云を憚るやうな事、
即ち嘔吐などを云。
「かばゆし」見てゐて恥
かしく、見て居られぬ
を云語なり。
「見てる方がばら／＼す
るなど云と同じ語なり

「百薬の長」漢書、食貨
志に、「夫鹽、食肴之將、
酒、百薬之長」とあり、我
國にもふるくより今に
至るまでこの語を云ひ
習はせり。
「憂を忘る」支那にても
日本にても云ひ習はせ
ること。陶淵明の雜詩

下などに向きて、得も云はぬ事ども爲散らし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬことども言ひつゝ、よろめきたる、いとがばゆし。

【譯】或は又、自分はえらい所があると云自慢話を、人に聞かせる、いかにもそれが聞苦しい。或は泣上戸で、酔つて泣くやつがある。下級の者は、悪口を云ひ合ひ、喧嘩をして、あさましく又怖しい光景を呈する。外聞の悪い、厭な事ばかり起つて、しまひには、一方が遣らぬと云物を、一方がどうしても取る、其のあらそひの爲に、縁から落ちる。歸りには馬から落ちたり、車から落ちたりして怪我をする。馬や車に乗らない身分の者は、大道を千鳥足で歩いて、塀や門の下などに向いて、嘔吐をついたりなんかする。年寄りで袈裟かけた法師が、従者の小童の肩をおさへて、何かわからぬことを言ひながら、よろ／＼歩く様、まことに見てる方がきまりが悪い。

斯る事をして、この世も、後の世も、益あるべき業ならば、いかゞはせむ。この世には誤多く、財を失ひ、病をまうく。百薬の長とは云へど、萬の病は酒よりこそ起れ、憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智慧を失ひ、善根を焼くこと火の如くして、悪を増し、萬の戒を破りて、地獄に墮つべし。酒を

取りて人に飲ませたる人、五百生が間、手無きものに生る」とこそ佛は説き給ふなれ。

「汎」此忘憂物「遠」我
遺世情「忘憂物は酒を
指せり、その他なほ例
多し。
「後の世は」この語「地
獄に墮つべし」にかゝ
る、間にはさみたるは
其の墮獄の因を並べた
るなり。
「人の智慧を失ひ」梵網
經に、「是酒起罪因緣、
而菩薩應生一切衆生
明達之慧、而反更生一
切衆生顛倒之心、者菩
薩波羅夷罪。
「善根を焼くこと火の
如くして悪を増し萬の

【譯】こんな事をして、これがこの世にも、後の世にも益になると云のなら、それア仕方が無い、敢てこの苦々しい目を見、見せても宜いのであるが、さうでは無いのだ。この世では酒の爲にいろ／＼過失をする、財もこの爲になくする、それから病氣をも發生する。酒を百薬の長とは云けれども、なに薬なことがあるものか、いろ／＼の病氣が、酒から起るでは無いか。酒は憂を忘れるものと云が、これもウソだ。現に酔つた人が、昔あつた悲しい事まで思ひ出して泣いたりなんかする。後の世はどうか後の世は地獄に墮ちるのだ。なぜと云に、酒の爲に智慧が無くなり、善根は火で焼かれるやうに亡はされてしまつて、悪ばかり多くなる、いろ／＼の守るべき戒を破る。だから其の結果として地獄へ墮ちるのだ。酒を持つて(つまり酒入れた人物を持つて)人に飲ませた人は、五百生の間、手の無い物に生れる」と佛も説いておいでになる。

戒を破りて「梵網經に、「飲酒而生酒過失無量」なほ他の經にもいくらかこの意あるべしその概念を書きなしたるなり。
善根は善き果を得べきもとの業を云。

「地獄に墮つべし」正法念經に「以酒施於持戒之人、或破禁戒、而自飲酒……失於正念、墮地獄」○「酒を取りて……梵網經に、「若自身手過酒器、與人飲酒者五百世無手、」

斯く疎しと思ふ物なれど、自ら捨て難き折もあるべし。月の夜、雪のあ

「取り行ひたる酒宴を催す。」
 「馴れ／＼しからぬあたりの御簾のうち：」「貴人より酒肴を賜はるさまなり。」
 「くだもの果實、又餅なども云。」
 「こゝは小ざかなと云意にとるべし。」
 「よきやうなるけばひして」酒肴を御簾の中より侍女のさし出す様なり。簾中ゆゑ、よくわからぬが、美人らしい様子と云なり。
 「隔無きどちどち、はなま。」
 「隔心無き友達。」
 「かりや」假の宿り。
 「みさかな何」さかなは何にしようかと云なり。
 催馬樂に、「我家はとばり帳をも立てたれば

した、花の下にても、心長閑に物語して、盃出したる、萬の興を添ふるわざなり。徒然なる日、思ひの外に友の入り来て、取り行ひたるも、心慰む。馴れ／＼しからぬあたりの御簾のうちより、御くだもの、御酒などよきやうなる氣情して、さし出だされたる、いとよし。冬、狭き所にて火にて物煮りなどして、隔無きどち、さし向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、「御下物、何」など言ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。甚う痛む人の強ひられて、少し飲みたるも、いとよし。よき人の、取分きて、「今一つ、上少し」など、宣給はせたるも、嬉し。近づかまほしき人の、上戸にて、ひし／＼と馴れぬる、又嬉し。さは云へど、上戸はをかしく罪許さるゝ者なり。酔ひくたびれて朝寝したる所を、主人の引きあげたるに、惑ひて、惚れたる顔ながら、細き髻さし出だし、物も着あへず、抱き持ち、引きしろひて逃ぐる、かいどり姿の後手、毛生ひたる細脛の程、をかしく、つき／＼し。

【譯】酒と云ふものはかやうに疎んずべきものと思ふものだが、どんな場合にもいけないと

大君來ませ婚にせむ、みさかなには何よけむ
 蛇、榮螺か、田麻宜けむと云あり、この文句をいひながら飲む體なり。
 「いたむ人」困る人。痛み入る人。
 「取分きて」特に。自分に特にさゝる體なり。
 「上少し」盃に一杯になつて居ぬ、と云なり。
 「近づかまほしき人」近づきになりたいと思つてゐる人。
 「ひし／＼と」ピツタリ親密になる様。
 「さは云へど」いろ／＼云もの。上戸を責めもするもの。
 「引きあげたるに」障子などあげたるなり。
 「惑ひて」ウロ／＼してあわてたる様。
 「惚れたる顔」ボンヤリした顔。

排すべきでは無い、自然それは捨て難い場合があるのだ。月夜、雪の朝、又は花の木かげな
 んかで、くつろいで話をして、そこへ盃を取出して、宴になると非常な興がこの酒の爲に加
 はるものだ。退屈してある日に、思ひがけなく友達が来て、酒宴を催すのも、面白い。又
 高貴の方からお盃頂戴する光景も宜い。美人らしく思はれる侍女が、御簾から御小肴御酒な
 どをさし出して下さるなど、まことに宜い。冬、狭い所で、火で何かグツ／＼煮などして、
 打解けた友達が、さし向ひて、量を過すのも、まことに興がある。旅の宿、又は野山など
 で、「御肴には何よけむ」などと小唄交りに、芝の上で飲むのも面白い。下戸でひどく痛み入
 る人が、強ひられて、仕方無しに少し飲んだのも、まことに宜い。身柄な人が、私に特に厚
 意をもつて、「も一つ御受けなされ。そでは餘りボツチリだ」などと仰しやられるのも、嬉し
 い。かれて近づきになりたいと思つてゐる人が、都合よく上戸で、酒席で、忽ちに親密になつ
 たのも、又嬉しい。いろ／＼云もの、やはり上戸と云ふものは、面白いもので、誤をして
 も人が見許すものである。上戸が昨夜の酔にくたびれて、翌朝朝寝してゐる所を、主人がそ
 この障子を引きあげると、マゴ／＼して、寝ぼけ顔のまゝ、細い髻ツンと突き出した妙な頭
 つきで、着物を着も得爲ず、手に持つて引きすつて、面目なげに逃げて行く、其の帯もしな
 くて寝衣を手にしたしどけない後姿、細い毛脛を出した鹽梅、面白く、調和の妙があつ
 て、愛すべきである。

【評】「世には心得ぬ、この多きなり」と書き出した。見なれた事を、驚異の目で見た書き出
 しが先づ面白い。酒を飲ませて苦しがらせて、それを面白さうにしてゐる、どうも不思議な

「細き髻さし出だし」束れた髻が昨夜の酒席やら寝亂れやらで、髪散り、髻の束が細くなつてゐるなり。さし出だしは、妙な工合にツンと飛び出たる様なり。「抱きもち」着物を。「引きしろひて」引きずつて。「かいどり姿」帯無しにて寝まきを手で持つてゐるを云。搔取なり。「うしろ手」うしろ姿。「つきんぐし」似合はしと云意にて、面白く調和されたる形を愛する語なり。

事をするものだ、と云つて居る。驚異の觀察を存分にし續けて居る。「酔ふ」と云語もこのあたりでは使はず、そして「酔ひ」と云事の奇怪に、醜陋な様を、驚きつゝ書いて居る。「うるはしき人も忽ちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて」などと書いて行く。其の病者から、こんなものを祝日に作るのは、あさましいでは無いか、と云。

我は驚異した。諸君も因襲を忘却して、生れたまゝの目でこの光景を見給へ、と云つて居る。「人の國に斯る習ひあんなりとこれらに無きひと事にて傳へ聞きたらむは、あやしく不思議におぼえぬべし」。

それから具體的に、宴會に見る醜態を、あり／＼と寫し出して來た。「烏帽子ゆがみ紐ほづし脛高くかゝけて」など世相が寫されて居る。烏羽僧正の繪を見るやうである。

女を寫した。「額髪」、それは容の美の爲でもあるが、自ら額を露にせぬ爲にもなつて居る。それを「はれらかに搔きやり」と云ふところ、今日、酔つた藝妓が、ほつれ毛をヤケに搔き拂ひつゝ、何か云ふ様と同じ趣である。「顔うちさゝげて」この用語も面白い。「盃持てる手に取りつき」、酒がダラシなくこぼれる様は、云はずともわかる。これは今も男女によらず、宴席では、誰か「乾度やることである」。

私の見たところでは、この「取りつき」までで、女の描寫は終つてと思ふ。「よからぬ人は」からは、一般に云のである。

「年老いたる法師召し出だされて」、あの律師を呼べ、律師を、舞をやるさうぢやよ、など

と、引張り出された體だ。女などの召し出されたことを書かずして、きたない老法師を出したのが、愈醜を加へる。「黒くきたなき身を肩ぬぎて」、汗の香がするばかりに、實感的に描いた。こゝも箇々躍動してゐる古い繪卷物を思はせる。「わが身いみじき事どもかたはら痛くいひ聞かせ」、なにおれの云ふ事を聞かぬ馬は唐土にも天然にも無いからな、などと、いつの代も自慢上戸が居る。

「ばては許さぬ物どもおし取りて」實に穿つて居る。今でも、藝妓の煙草入をふんだくらうなどとする奴がよくある。

この次の「縁より落ち」は、呉れ、遣らぬ、の争ひで落ちたことを叙したので、其の落ちた事から、歸り途の「馬車より落ちて」を叙し來る。變化實に自由だ。忽ちこゝから、散會後の醜態を描き來る。「袈裟かけたる法師の小童の肩をおさへて」にも時世相がよく出て居る。法師がよく出るのは、兼好自ら法師ゆゑに、一層苦々しく思ふからである。

それから飲酒と云ふ事が、今生來世に惡果を結ぶと云ふことを説いて、さて續つて酒の趣を説き出した。この書は殆ど全部矛盾を以て成立つて居るが、こゝ程明著な、矛盾の場所は無い。

程よく飲むのは宜い、と云ふのでも無い。「多く飲みたるいとをかし」と平氣で云つて居る。飲めぬ人に強ひると云ことも宜いと云つて居る。「いたういたむ人の強ひられて少し飲みたるいとよし」と云つて居る。その爲に朝寢する其の事も、前に所謂「公私の大事を缺く」となのだが、それをも無邪氣だと云つて寧ろ愛して居る。

兼好の眞の人たる所は、實にこの兩面を見る點である。其の心に起る矛盾を平氣で書いて、普通の人のやるやうに、そのどちらかを殺すと云事をしなかつた所にある。矛盾に安住して居る所にある。眞を書いた書には必ず矛盾があるものである。たとへば、右の頬を打たれたらば更に左の頬を出して打たせよ、と書いてある聖書の、他の部分に、我は平和をもたらす爲に生れて来たのては無い、戦をもたらず爲に生れて来たのだ、と云つて居る。これも矛盾である。云ふ言に、書く文に、矛盾の認められぬ人は、確に偽つて居る人であるのだ。
「冬狭き所にて火にて物いりなどして、この狭き所と云のが、いかにも宜い。今ならば牛鍋でもつゝき合ふと云ところだ。」

「近づかまほしき人の」の節も、よく穿つて居る。

趣の方面を書き書いて「さはいへど」で、殆ど前節の全部を取消したやうな勢をなして居るのは面白いでは無いが。

第七十六段

黒戸は、小松の御門、位に即かせ給ひて、昔、たゞ人におはしまし、時、まさな事せさせ給ひしを、忘れ給はで、常に營ませ給ひける間なり。みかま木に煤けたれば、黒戸と云ふとぞ。

「黒戸」黒戸の御所とも云間なり。禁中、清涼殿の北なる瀧口の戸の西にあり。
「小松の帝」光孝天皇の

御事。小松の山陵に葬り奉る故小松の帝と申す。

「まさな事」幼きたばむれ事。自ら料理などし給ひしをこゝにては指す「營ませ給ひける」御即位後も手料理などなされたるなり。

「みかま木」御籠木なり御薪と云ふこと。

「鎌倉中書王」一品中務卿征夷大將軍宗尊親王のこと。中書は中務の唐名。建長四年四月鎌倉に赴き、征夷大將軍に任ず、時に年十一歳文永三年鎌倉亂あり、爲に洛に歸る、同十一年七月薨す、卅三歳。中書王にて、は中書王方にてなり。
「御鞠」御蹴鞠。
「沙汰」相談。
「佐々木隠岐入道」佐佐木隠岐前司義清の嫡男

【譯】 禁中の黒戸と云御間は、光孝天皇が御即位前に、幼き戯れに御手料理などなさつたのを、御位に御即きになつてから後も、御忘れにならないで、常に、やはり御手料理をなさつた其の間である。薪の煙で、その戸が煤けて黒くなつて居るから、黒戸と云ふことである。
【評】 黒戸と云稱の起りを、明瞭に説明したのである。光孝天皇の昔を忘れ給はず、御即位後もなほ御料理など遊ばしたと云ふところも、大いに氣に入つて書いた心持が見える。

第七十七段

鎌倉中書王にて、御鞠ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、いかゞせむと沙汰ありけるに、佐々木隠岐ノ入道鋸の屑を車に積みて、多く奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土のわづらひ無かりけり。取り溜めけむ用意、有難し、と人感じ合へりけり。この事を或者の語り出でたりしに、吉田ノ中納言の、「乾砂子の用意やは無かりける」と宣給ひたりしかば、恥かしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、いやしく異様のことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

第七十六段——第七十七段

太郎左衛門政義のことなり、入道して心願と云。

「一庭に」庭一杯に。「吉田中納言」藤原藤房のことかとの説なり、然るべし、萬里小路とも吉田とも號す、後醍醐帝に事へ、中納言に至る、北條高時の叛に及び大に王事に盡す、後帝を諫めて聞かれず去つて終る所を知らず一説に天授六年三月廿八日八十五歳にて薨すと云。

「乾きすなご」砂はすなごといへり。「恥かしかりき」兼好その場に居て心恥かしく思ひしなり、自分も入道に感じ居たるに斯く云はれたればなり。「庭の儀」庭のこと。「奉行」世話。「まうく」準備すること。

「侍」禁中の濫口、院の北面、東宮の帶刀などすべて侍衛の臣を云。「寶劔」三種の神器の劔を指す。「其の人」名をいひたるなり。「別殿」宮中の別棟の御殿と云なり、こゝは内侍所を指す。「晝御座の御劔」晝御座とは清涼殿中の主上御常座を云、この御座茵の南に置き給ふ御劔あり、これを晝御座の御劔と云。「典侍」内侍司の次官たる女官。

【譯】鎌倉の中書王方で、御鞞の會があつた際、丁度雨上りで、まだ庭が乾かなかつたので、どうしたものであらうと相談があつたところへ、佐々木隠岐入道が、鋸屑をウンと車に積んで奉つたので、庭一杯にこれを敷くことが出来て、泥で衣や沓のよごれることが無くて済んだ。入道はよくまア鋸屑を貯へておいたものだ、斯う云時の用意をしておくこととは、誠に出来ないことである、と人々が感じ合つた。この話を京都で或人が話したところが、其の座に居た吉田中納言が、「乾砂の用意がして無かつたと見える」と仰しやつたので、その場に居合はせた私は、自分もさう云事を知らないで居て、入道に感服して居た一人なので、恥かしく思つた。さう云はれて見ると、さう云際には重寶此上無しと思つた鋸屑は、成程下品で變てこなものである。乾砂の上品なるに如かぬ。後に聞けば、庭のことを司る者は、常に乾砂の上品なるに如かぬ。後に聞けば、庭のことを司る者は、常に乾砂を準備しておく、と云のが故實であるさうな。

【評】讀む者も入道の機轉に感ずる。そしてあとを讀んで、成程、入道は駄目だ、と思ひかへす。鋸屑と云ものは下品だと云のみで無く、物にも着き易く、乾砂に比しては、實用上も遙に劣る。この鋸屑敷いて鞞を蹴たと云事は、當時の鎌倉の有様をよく示して居る。故實など知つた人も無く、都人から見ると變な事をして、そして都がつてた有様がわかる。

【補】依田百川氏「國文」に、この段の文に五變あることを論ぜり。

第四百七十八段

或所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとて、「寶劔をば其の人ぞ持ち給へる」など言ふを聞きて、内裏なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劔にてこそあれ」と、しのびやかに言ひたりし、心にかりき。その人、古き典侍なりけるとかや。

【譯】或所の侍たちが、内侍所の御神樂を見て、其の事を人に話す時に、「その時寶劔は何某殿が持つて居られた」などと言ふのを聞いて、そこに居合せた内裏の女房の一人が、「別殿の行幸には、寶劔を御持たせにならぬ、晝御座の御劔ですよ」と小聲で云つたのは、敬意が起つた。其の女官は嘗て永い間典侍を務めて居た人だつたさうだ。

【評】いつも斯う云ことを聞くと、知ある人に兼好は敬意を表し、何も知らないくせに知つた顔で語る者が面目をつぶすのを痛快がつてる。

この女房は典侍であるので、劍璽をあつかひつけて居るので、斯う云事に明るいのである。「しのびやかに」言つたのも、兼好の理想通りであつた。

第四百七十九段

「入宋」支那へ行つたこと、宋の代なれば入宋と云なり。
 「沙門」僧といふ梵語。「道眼上人」傳知れず。「一切經」大藏經なり。「持來」宋より持ち來りしなり。
 「やけ野」位置知れず。「首楞嚴經」唐の則天神龍元年に印度の僧ハンシツタイが口譯し、房融が筆記して成れる經十卷あり。この經を一名、中印度那蘭陀大道場經と云。
 「那蘭陀寺」印度の寺の名を其儘取りたるなり。那蘭陀は梵語、施して厭ふなし、と云ふ意味なり。
 「大門」寺の總門を云。「江帥」大江匡房のこと。太宰帥なるが故に江帥と呼ぶ、碩學なり後三

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安置して、殊に、首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は、大門、北向きなり」と、江帥の説とて言ひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず。更に所見無し。江帥は、いかなる才覺にてか申されけむ、覺束なし。唐土の西明寺は、北向き勿論なり」と申しき。

【譯】宋に行つたことのある道眼上人は、一切經をむかうから持つて来て、六波羅の邊の、やけ野と云所に置き、その經中でも殊に首楞嚴經を人に講じた。それでその一切經を置くその寺を、この經の緣を取つて、那蘭陀寺と號した。この上人が云はれたに、那蘭陀寺は、大門が北向きだ、と大江匡房卿が云はれたと云傳へがあるが、さう云ふことは西域傳、法顯傳などにも見えない。其外一向何にも見えない。匡房卿はどうか云知識があつて云はれたのやら、どうもわからない話だ。唐の西明寺は、私が現に見たが、勿論北向き門だ」と云つた。
 【評】本當のしつかりした知識、と云ふことを又續けて書いた。大江匡房が云つたと云ふも、其の名に怖ぢて、皆信じてしまふ。ところが、根本的に調べると、案外よい加減なことを云つてる。この道眼が、萬人の信じ切つて居た事を疑つて、殆ど否定してある、のを兼好は有難く思つたのだ。「唐土の西明寺は北向き勿論なり」と、この「勿論なり」と云切る勢は、實

條帝の時右少辨となる。寛治の初め參議となり、嘉保元年權中納言となり、承德元年太宰權帥を兼ね、天永二年大藏卿を兼ね此年薨す年七十一。かつて關白賴通平等院を宇治に創し、源師房と從つて規度す、大門北に向ふ、賴通師房に問ふ寺門北に向ふは古もこれあるや、と、師房知らず、匡房は幼にして從つて後へにあり、師房試みにこれに問ふ、匡房曰く天竺那蘭

見た人なのだからだ。斯う云しつかりした知識が、兼好は嬉しくてたまらないのだ。陀寺、震旦西明寺、本朝六波羅寺、門皆北に向ふと、賴通感賞す。○「西域傳」玄奘三藏の大唐西域記のこと。十二卷あり。○「法顯傳」法顯三藏印度に行き、折のことを記したる自傳なり。高僧法顯傳と云、一卷。○「所見なし」何書にも見えず。○「才覺」知識。○「西明寺」唐の高宗の代に長安に建てられたる寺。

第百八十段

「さざちやう」あて字に左義長とも書く、實は三毬打にて、毬打を三つ立て、保たせたる形を云なりといふ。左義長は今も地方に行はる、松竹注連繩書きぞめの清書など焼きあぐるなり。正月十五日或は十四日十八日等に於てす。

「さざちやう」は正月に打ちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出だして、焼きあぐるなり。「法成就の池にこそ」と囃すは、神泉苑の池をいふなり。
 【譯】「さざちやう」のもの起りは、正月に毬を打つて遊んだ毬杖を、眞言院から神泉苑へ出して、焼き上げたのである。これ即ち「さざちやう」である。左義長の時の囃唄に「法成就の池にこそ」と云のは、すなはち、神泉苑の池のことを云のである。
 【評】これも左義長の根本的考證である。法成就の池にこそ」と聞くと、この囃し唄の全部が知りたい氣がする。梁塵秘鈔の郵曲のやうな趣の唄らしく思はれる。

第百八十段

禁中に行はれし式は、清涼殿の東庭に青竹を束れて立て上に扇、短冊、主上の吉書などを結び、陰陽師等諷ひ囃しつづ焼く、天皇清涼殿にて御覽ありしなり。

この焼くことは眞言院の御修法より因したるものと云。○「毬杖」この字音キウチヤウの轉なり、昔正月小兒の遊びに用ひし具、木製の毬を、槌の形したる杖にて打つ、その杖

形のものを穂杖と云なり。○「眞言院」大内裏内八省院の北にあり、朝廷の御修法念誦を勤むる所。○「神泉苑」桓武天皇遷都の初め設けられたる庭なり、池あり、代々の天皇御遊覽あり、今上京區門前町に址遺る。○「法成就の池」

左義長の唄の文句なり。天長中大旱の時勅して空海をして神泉苑の池に臨み龍王に祈請し秘法を修せしむ、雨忽ち降る、これより密法愈盛なりと、この故事をうたへるなるべし。

第百八十一段

「降れ〜こ雪、たんばのこ雪」と云ふこと、米搗き篩ひたるに似たれば、粉雪と云ふ。「溜れ粉雪」といふべきを、誤りて「たんばの」とは云ふなり。「垣や木の股に」と唄ふべし、と或物識申しき。昔より云ひけることにや、鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るに、斯く仰せられけるよし、讚岐典侍が日記に書きたり。

「讚岐典侍が日記」讚岐典侍と云女官が、堀河院御惱の頃より鳥羽天皇の御即位大嘗會までを記したる日記なり。その中に、「この夜は何と無くて明けぬ、つとめて起きて見れば雪いみじう降りたり、今も

【譯】 子供が雪の降る時に、「降れ〜こ雪たんばのこ雪」とはやすが、あの「こ雪」と云のは、米を搗いて篩ふ時のやうに雪が降るので、「粉雪」と云ふのである。「たんばのこ雪」と云のは、「溜れ粉雪」と云ふのが正しいのを、訛つて「たんばの」と云のである。或物知りが、そのあとは「垣や木のまたに」と云文句だと云つた。この童謡は、昔から云つたものと見えて、鳥羽天皇が御幼少の時に、雪が降つた時、「降れ〜こ雪」とおうたひになつたと云ことが、讚岐典侍日記に出て居る。

うち散る、御前を見れば、別に違ひたる事なき心地して、おはしますらむ有様こと〜に思ひなされて至る程に降れ〜こゆきといわけなき御けはひにて仰せらるゝ聞ゆる、こは誰ぞ、誰が子にかと思ふほどに、まことにさぞかしと思ふに、あさましく、これを主と頼み参らせてさふらはむずるか、頼もしげなきぞあはれなる」。

【評】 前段で「法成就の池にこそ」と書いたので、童謡のことを思ひ出して、書いたのだ。「粉」を説明するに、「米つきふるひたるに似たれば」と云つたのは、今の人には、必要のやうに聞えるが、當時は「粉」と云語を「米の粉」以外にあまり使はなかつたのではあるまいか。
「たんばのこ雪」と云と、誰でも「丹波の粉雪だ」と思ふが、さうぢやア無い、と兼好が威張つた。成程「たまれ粉雪」の訛だ。この「たまれ粉雪」と云のを、唄ふ時に訛度「たんばの粉雪」とたつたに違ない。それから「たんばのこ雪」と變つて來たのである。
「垣や木のまたに」は、「たまれ粉雪」の次に、もと斯う云文句があつた。それを近頃は、「粉雪」までしか唄はない。この物知りは、この唄の結句を知つて、兼好はそれを教へられて嬉しがつたのである。
この段を見ても、如何に兼好が、日常の見聞にも注意を拂つたかわかる。童謡、なる程「う云ものは兼好の如きさうなものだ。好きなればこそ、解釋もし、考證もするのだ。徳川時代は知らず、この時代に、童謡の解釋など云事は、珍しいものであらう。
讚岐典侍日記、これもよく書いてあるもので、兼好の愛讀書たる資格を大いに備へて居る。

第百八十二段

第百八十一段—第百八十二段

「四條大納言隆親卿」善勝寺大納言隆衡の男、權大納言正二位檢非違使別當なりと云。
「乾鮭」鮭の腸を去りて乾したるもの。
「あやしき物」賤しきもの。

「参るやうあらじ」この「参る」は召上ると云意召上るべきぢや無い。「まゐらぬ事にてあらむにこそあれ」召上らぬと云ことに定まつて居るならばだが。
干さない鮭、即ち今の生鮭は召上るのに、干したのはいけないと云理は無きとなり。
「しらはし」鹽も何も添へずその儘にて干したるをしらはしと云。「なでふ事があらむ」何と云ことがあらう。非難すべき理無し。
「人くふ」人にくひつ。
「主」飼主。

四條大納言隆親卿、乾鮭といふものを、供御に参らせられたりけるを、「斯くあやしき物、参るやうあらじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚、まゐらぬ事にてあらむにこそあれ。鮭のしらはし、何條事かあらむ。鮎のしらはしは参らぬかは」と申されけり。

【譯】四條大納言隆親卿が、乾鮭といふものを、主上の御膳に進められたのを、或人が、「こんな下卑た物は、召上るべきで無い」と云つたのを大納言が聞いて、曰く、「絶対に鮭と云魚は主上はあがらぬと云ことなら、それア乾鮭召上ることもいけなからうが、生鮭は上ることになつてる。それにしらはしにしたのはいけない、と云管は無。若ししらはしと云ものが悪いのなら、鮎のしらはしも召上るべきで無い筈だ。鮎のしらはしは現に供御に上るぢや無いか。そんなら鮭のしらはしも宜い筈だ」と申された。

【評】これは少しうま味の足りない話だが、兎も角、因襲に捕はれず根本的確とした所を捕へて居る人の言ふこと爲すことに、雙手をあげて賛成したのである。

第百八十三段

人突く牛をば、角を切り、人くふ馬をば、耳を切りて、其の印とす。印をつけずして、人を傷らせぬるは、主の咎なり。人くふ犬をば、養ひ飼ふべからず。是れ皆咎あり。律のいましめなり。

【譯】人を突く牛は、角を切つておく。人に食ひつく馬は、こいつは危いだと云印に耳を切つておく。印をつけておかないで、人に怪我をさせたのは、飼主が罪になる。人に食ひつく犬も飼つておいてはならぬ。皆これら罪になることである。律にちゃんと戒めてある。
【評】法律まで持ち出した。街學では決して無い、これは兼好の親切である。

今、「律逸」を見ると、こゝにある通りの事が出て居る。「畜産及噬犬有觸踏人而觸觸繩絆不レ如レ法者、狂犬不殺者答三十」とあつて、更にその註書きに、「畜觸レ人者截二兩角。觸レ人者絆レ之。觸レ人者截二兩耳。此爲二觸觸繩絆之法」とある。これを誰にもわかりよいやうに書いたのである。

第百八十四段

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明障子の、破ればかりを、禪尼手づから、小刀して、切りまはしつゝ、張られければ、兄の城介義景、その日の經營して候ひけるが、「たまはりて、某男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たる者に候」と、申されければ、「その男、尼が細工に、よも勝り侍らじ」とて、

第百八十三段——第百八十四段

「律」法律なり、古の制度にあらかじめ法令を示すを令といひ、職の勤務の次第を書きたるを式といひ、令式を犯す者を罰する制を律と云なり。

「相模守時頼」北條時頼なり、北條五代の執權、寛元四年執權となる、建長元年相模守となる、康元々年薙髮、最明寺に退く、それより微行して四方をめぐり、政の至らざるを助く、弘長三年十一月廿二日卒

す、年三十八。

「松下禪尼」修理亮時氏の室、經時、時頼、時定等の母なり。

「守」時頼。

「入れ申さるゝ」招待する。

「明障子」今の障子のこと。昔は今の襖、衝立などをも皆障子といひし故あかるき障子、と云意にて今の障子を斯く云へり。

「兄」禪尼の。

「城介義景」安達義景のこと。嘉祿中秋田ノ城ノ介となる、建長中薙髮し、ついで卒す。

「經營」ケイメイとよむ。世話役をすること。

「たまはりて」その仕事をこちらへいたゞいて。

「某男」下男やうの者を云。實には、其の男の名を云ひたるを、かく

書けり。

「さわく」と「サツパリ」と。

「修理」なほすこと。

「若き人」時頼。

なほ一間づつ張られけるを、義景、「皆を張りかへ候はむは、遙にたやすく候べし。斑まだらに候も見苦しくや」と、重ねて申されければ、「尼あまも、後は、さわく」と張りかへむ、と思へども、今日けふばかりは、わざと斯くてあるべきなり。物は、破れたる所ばかりを、修理して用ふる事ぞ、と、若き人に見習はせて、心づけむ爲なり」と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性にょしやうなれども、聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を、子にて持たれけるぞ、まことに唯人たひひとにはあらざりけるとぞ。

【譯】相模守時頼の母は、松下禪尼と云つた。相模守を禪尼方へ招待することがあつたが、其の準備に、煤けた障子の、破れた所だけを、禪尼が自分で、小刀で切りまはして、切張をして居られたから、禪尼の兄の城介義景、この人はこの招待の世話をする爲に、この家に来て居たが、禪尼に云やう、その仕事はこちらへいたゞきませう、何某と云男に張らせませう。斯う云事に上手な者です」と云はれたら、禪尼は「いや、その男は、この尼の細工より、よもや上手でもあるまい」と云つて、やはり一間づつ切張りをして居られた故、義景は、「そんな切張りより、すつかり張りかへる方が、餘程手数がありません。切ばりは、白い所と黒い所と斑になつて、見苦しくもあるぢやありませんか」と更に云つたれば、「私も、そのうち、サツパリと張りかへようとは思つて居るけれど、今日だけは、わざと斯うして切ばりをすべきなのです。物と云ものは、破れた所だけを直して用ふべきものだ、と云事を、若い時頼の目に見せて知らせて、注意させる爲です」と云はれたのは、まことに有難いことであつた。天下を治むる道は、儉約がもとである。禪尼は女であるが、聖人の心と同じである。さすがは天下の執權たるほどの人を、子に持つて居られた人だけあつて、まことに凡人では無かつたらしい。

【評】これは誰もよく知つて居る話である。そしてこの事を天下後世に紹介したのは、兼好であるのだ。煤けた明障子の切りばり、と云へば、今日に於ては誰も、先帝の御居間の事を思ひ起すであらう。天皇の御居間は金玉をちりばめたものとばかり、皆人祭して居た。ところが、御不例につき、侍醫以外の人、何つてみると驚いた。そこは、その拜診の博士等の居間よりも見すばらしい所であつた。障子は切りばりの爲に、こゝに義景が云やうに「まだらに見えて「見ぐるし」かつた。禪尼は「後はさわく」と張りかへむと思へどもけふばかりはわざと」と云つて居る。「わざと」と云つて居る。先帝はこの「わざと」人に質素を教へ給はむとてのを遊ばしたのでは無かつた。ひろく人民に儉をすゝめ給はむとならば、人民の常に目につくあたりを、著く質素に遊ばすことも出来たらう。世の權貴者には、随分うばへを質素に見せかけて、内實甚だ豪奢をして居るものもあるのだ。一天萬乗の天皇は、御體面とか御儀例とかいろくさう云やうな點で、臣下の申上げるに従ひ、御意志にそむいたことも遊ばされねばならなかつたであらう。しかし御居間のあたりは、それは陛下の御勝手なのであ

る。さうして如何に質素なりしことよ。ひろく人民は誰も斯くあるとは知らなかつたが、崩御の前あたりから、始めて其の御居間の御模様を人々はあり／＼と見奉る感があつた。陛下は別に諷意など云ことの爲に遊したのでは無かつた。斯くなすべきもの、否、斯くしたいとの御心、所謂生知安行の御心で、知らず／＼斯く遊ばしたのであつた。これを人々に見せびらかして、説明などなさうとは、少しも思ひもかけ給はなかつた。陛下は黙して居られた。黙した儘に崩御になつた。而うしてその緘黙の、偉大なる緘黙のうちに、人民の心から心へ、大いなる御教訓の御聲が響きわたつた。崩御後もなほ響いて居る。今もなほ響いて居る。永久に響くであらう。時々の大演習の行幸の折などの、彼の日清戦争の折の廣島大本營の、御居間の御好みは、實に宮城内の御居間の趣と同じであつたのだ。これは見せびらかした、と卑しい心から忖度し奉つた人も多かつた。勿體ないことであつた。先帝はこの松下禪尼の通りのことを遊ばしておいでになつた。しかも御自覺なしに遊ばしておいでになつた所は、禪尼などの及ぶところで無い、兼好が今居たならば、いかに喜んで、先帝の御ことを記したことであらう。

「その男尼が細工によもまさり侍らじ」と云語に、尼の風丰が思はれる。すこし笑みを含んだ顔つきまで思ひ浮べられる。

兼好は熱烈に皇室を敬愛する人であつた。しかも其の爲に鎌倉側を一切仇敵のやうに見ると云人では無かつた。公平な人であつた。敬すべきは總て敬した。エライイ

第百八十五段

「城陸奥守泰盛」前段所載義景の子なり、この家代々秋田城介にて、且つ弘安年中に陸奥守兼任の故に城陸奥守と云。

「馬乗」馬乗の名人。「しきみ」今云「しきみ」なり、こゝは門などのしきみなるべし。「鞍を置きかへさせけり」その馬の鞍を取つて他の馬にそれを置くを云。すなはちその勇める馬には乗らざるなり。

城陸奥守泰盛は、雙無き馬乗りなりけり。馬を引き出ださせけるに、足を揃へて鬮をゆらりと越ゆるを見ては、「これは勇める馬なり」とて、鞍を置きかへさせけり。又、足を伸べて鬮に蹴當てぬれば、「これは鈍くして誤ちあるべし」とて、乗らざりけり。道を知らざらむ人は、斯ばかり恐れなむや。

【譯】 城陸奥守泰盛は、無類の馬乗りの名人であつた。馬に乗らうとする際、従者をして馬を庭前に引き出させる際に、馬が足を揃へて門の鬮をユラリと一足飛びに飛越えるのを見ると、「これは勇み立つてる馬だ」と云つて、鞍を他の馬に置きかへさせて、其の馬には乗らなかつた。又、馬がウツカリ鬮のところを足を上げることゝ氣づかず、伸ばした儘で、ツイ鬮に足を打ちつけると、「この馬は鈍な馬だ、かう云のに乗ると、怪我がある」と云つて、乗らなかつた。泰盛は乗馬の道を知つてたから、斯く恐れた。道を知らない人なら、どうしてこのやうに恐れようや。

【評】 ナポレオンは戦の神である。そして彼は、自分は臆病だと云つてたと聞く。戦の道に

達してゐる者は、戦に就て、怖れるべき事、怖るべからざる事を、よく知つてゐるのだ。泰盛も馬術の達人なる故に、よく怖るべき所のものを知り、慎んでこれを避けるのである。目に見える者は盲よりも怯である。しかし盲者は恐れざるが爲に飛んだ誤をすることがある。文藝の道でも、生はんじやくれのうちは、ドシ／＼筆を行ふ。敢て恐るゝ所は無い。さうして恐れなくてもよいことを恐れて居る。即ち下位の批評家の罵評などに戦慄する類のことである、達したる者は、己れの鑑識に恐れる、識者に恐れる、字々句々を忽にせぬ所以である。そして大いなるものを成し得る所以である。

第百八十六段

「吉田」傳。傳はらず。「馬毎に」どんな馬でも。
「こはき」今云手こはきなり、今の語に怖ろしきを「こはき」と云は、この語のその方に發展したるなり。

「轡鞍の具」轡、鞍、其外附屬品、と云云ひ方。「その馬を走すべからず」その馬に乗てはいかぬ。

「秘藏の事」秘訣。

吉田と申す馬乗の、申し侍りしは、「馬毎に強きものなり、人の力、争ふべからず、と知るべし。乗るべき馬をば、先づよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に、轡鞍の具に、危きことやある、と見て、心にかゝる事あらば、その馬を走すべからず。この用意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。是れ秘藏の事なり」と申しき。

【譯】吉田といふ馬乗が申しましたには、「どんな馬でも手強いものである。人の力で、それと争ふことは出来ないものだ、と思つて居るが宜い。馬に乗る際には、その乗るべき馬を、

先づよく見て、その馬の強い點と弱い點を知るが宜い。次に、轡鞍その附屬品に、危い所がありはせぬか、と注意して見て、こゝが少し氣にかゝると云點があつたら、乗つてはならぬこの注意を忘れないのを、馬乗と云のだ。以上のことは秘訣だ」と云つた。

【評】「人の力争ふべからず」と知れば、こちらが馬に隨ふことになる。こちらが馬によく機嫌を取つて、用を達して貰ふ、と云態度になるのである。つまり其の結局の所は、自分と馬と一枚になる。所謂鞍下馬無し、の界に至るのである。

第百八十七段

「不堪」堪能ならぬこと。即ち下手。「堪能の非家の人」上手であるが、その道の専門で無い人。

萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人に並ぶ時、必ず勝る事は、弛み無く慎みて、軽々しくせぬと、ひとへに自由なると、の等しからぬなり。藝能、所作のみにあらず、大方の振舞、心づかひも、

第百八十六段——第百八十七段

「所作」わざ、と云に同じ、こゝは、やはり技術的のわざを云、藝能と同じやうのことを二つ並べたるなり。「ほしきまゝ」ほしいま

愚おろかにして慎めるは、得とくの本もとなり。巧たくみにして、ほしきまゝなるは、失しつの本もとなり。

【譯】 何の道によらず、其道の専門の人は、たとひ下手でも、専門家で無い人で上手な人と云のに、立並ぶ時、必ず、いくら下手でも専門家の方がまさつてゐると云のは、どう云ものか。つまりそれは専門家と非専門家との間に著き相違の點があるからだ。専門家は寸時も氣を弛めず、慎んで、其の事を軽々しくせず大事をかけてやる。而して非専門家は、専門外のことだと云ので、唯もう自由な心持で、大事を取らないでやる。この相違があるからである。藝事技術ばかりで無く、すべて一般平素の舉動、心の用ひ方に於ても、愚で、慎んでしてゐるのは、得る所のある本である。巧で、思ふ儘にすると云のは、失ふ所のある本である。

【評】 どんな小さい事をも、注意して行く、と云のが、實に人の世に處する第一義である。自ら是れ成功の秘訣である。私が嘗て文藝講演會に頼まれて、國木田獨歩に講演を頼みに行つたことがあつた。その時、「なんでも宜いでせう、まア一時間ぐらゐ、何か喋つてやつて下されば宜いです」と私が云つた。獨歩の顔は改まつた。「なんでも宜いことは決して無い。むかうが宜くても、此方は宜くない。講演の一時間で、ライフの一部だ。無意義な一時間は費したくない」斯う云つた。私はこの時大きな教訓を得たのであつた。この獨歩の言が、どの位、私の其後の生活に強みを吹込んで呉れたか、わからぬ。

第百八十八段

或者、子を法師になして、「學問して、因果の理ことわりをも知り、説經せつきやうなどして、世渡るたつきともせよ」と云ひければ、教の儘に説經師にならむ爲に、先づ馬に乗り習ひけり。輿こし、車持もちたぬ身の、導師だうしに請しやうせられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻ももじりにて落ちなむは、心憂うれかるべし」と思ひけり。次に、「佛事の後酒などすゝむることあらむに、法師の無下むげに能無のうきは、檀那だんな、すさまじく思ふべし」とて、早歌さうかといふことを習ひけり。二つのわざ、やう／＼界さいかいに入りければ、愈いよく爲したく覺しえて、たしなみける程に、説經習ふべき暇ひま無くて、年寄りにけり。

【譯】 或者が子を法師にして、「さアお前はこれから學問をして、因果の道理もわきまへ、説經などして、生活のたてにもせよ」と云つたれば、其の子は、親の教へたる通り、説經師にならうとして其の爲に、先づ第一に、馬の稽古をした。自ら思へらく「自分は輿も車も持つてゐる身分ぢや無いのに、自分が説經師になると、いよいよ導師として招聘される時に、馬

「因果の理」善き事をすればそれが原因になりて善き結果を見、惡しき事をすれば、それが原因になりて惡しき結果を見ると云佛教の説く因果の道理を云。「たつき」たて。「導師」佛事の時主となる僧を云、説經のときには即ち説經するその僧が導師なるなり。「請せられむ」呼ばれる「すゝむる事」檀那が「能」藝。「檀那」梵語陀那の略轉、施主の義。「すさまじく」不興に、興味なく。「早歌」俚語なるべし。神樂歌の中に早歌と云

第百八十八段

一種あり、本方にて「あ
かゞり踏むな後なる
子」と唄へば、末方に
て「我も目はあり前な
る子」と唄ふ類是れな
り、普通の謠ひ物より
口早にうたふ里巷のう
たひ物なるべし、諸註
書、神樂の早歌と云
のとは別なりとのみ云
へど、いかなるものと
は示さず。
神樂歌にある通りの歌
にはもとよりあらざれ
ど、あの流れなるもの
にて、俗な洒落れた小
唄やうのもの當時にあ
りしなるべし。
「界に入りければ」妙境
に入るを云。
「たしなみ」修行稽古。
「あらず事ども」豫定
の事。

などを迎へによこすことがあらう。さう云時に尻がすわらないで、落馬でもしたら、つらい
ことだらう。だから先づ馬に乗ることを習はねばならぬのだ。斯う思つてた。その次に、又
斯う思つた。「佛事の後に、酒などをすゝめられることがある場合に、法師があんまり無藝な
のは、施主が興の無いことに思ふであらう」斯う思つて、早歌と云唄の稽古をした。馬と早
歌、この二つの技が、だん／＼面白い界に入ったので、愈上達したいと思つて、稽古して居
たうちに、肝腎の説經を習ふべき時が無くなつて、もう老いてしまつた。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべて、この事あり。若き程は、
諸事につけて身を立て、大なる道をも成し、學問をも爲む、と、行末久
しく、あらず事ども、心には懸けながら、世を長閑に思ひて、うち怠
りつゝ、先づ、さしあたりたる目の前の事にのみ、紛れて、月日を送れ
ば、事毎に成すこと無くして、身は老いぬ。つひに、物の上手にもなら
ず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取りかへさるゝ齡ならね
ば、走りて坂を不る輪の如くに、衰へ行く。

【譯】この法師ばかりぢや無い。世間の人、大抵この通りの事をしてゐる。若いうちは、
思ひ／＼の目的を立て、自分はこの事で立身しよう、斯道の達人にならう、學問もしよ
う、と、將來の長きにわたつて豫定をしておく、其事は心にはかけて居るのであるが、なア

に一生は長いと思つて、成さむとする事業を怠り／＼て行く。さうして、先づ、さしあたり
の目前の用ばかりに紛れて、月日を送つて行く。だから、何一つ仕上げたと云事無しに、年
とつて了ふ。到頭斯道の達人にもなれず、理想通りの立身もせず、あアしまつたと後悔して
も、取つた年は取りかへすことが出来ぬから、ズン／＼ズン／＼、坂を走り下る車輪のやう
な勢で、身は衰頹して行く。

「むねとあらまほしか
らむ事」むねは主要と
云こと。主要としてあ
りたき事。即ち自分は
この事を自分の主要な
る事業としたい、と思
ふ事。
「少しも」少しでも。
「心にとりもちては」心
に執着してゐては。
「それに取りて」それに
就て、即ち、碁の事に
就て云へば。

「多くまさらぬ石」たつ
た一つの逸ひ故。

されば、一生のうち、むねとあらまほしからむ事の中に、いづれか勝る
とよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨て、一事
を勵むべし。一日のうち、一時のうちにも、數多の事の來たらむ中に、
少しも益の勝らむ事を營みて、其外をばうち棄て、大事を急ぐべきな
り。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。たと
へば、碁を打つ人、一手もいたづらにせず、人に先立ちて、小を捨て、
大に著くが如し。それにとりて、三の石を捨て、十の石に著くことは易
し。十を捨て、十一につく事は難し。一つなりとも勝らむ方へこそ著く
べきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多く勝らぬ石には換へにく
し。是をも捨てず彼をも取らむと思ふ心に、彼をも得ず是をも失ふべき

【譯】だから、人は、自分の一生のうちに、斯う云事を自分の主要な事業としたいと思ふ事、それがいろ／＼あるなら、其の中で、どれが一等よいであらうと、よくよく考へて比較してみて、これが第一等の事、と云のをシツカリ心に定める。即ち事業を唯一つに選定するのだ。さうして、其の外の事業は皆捨て、了つて、唯其の一つの事を勵んでやるが宜い。一生の事と云と漠然とした感があるが、この心得は、刻下に持つて實行せねばならぬのだ。一日のうち、一時のうちにも、いろ／＼な爲すべき事が紛然として眼前に並ぶ時、それを皆やらうとしてはならぬ。その中で、少しでも益の多い方の事をやるのだ。そして其の外の事は打棄つて了ふのだ。さうして、事を單に純にして、自分の爲さむと志して居る大事業をセツセと歩を進めて行くのだ。あの事もせねばならぬ、この事も爲したい、と心にいろ／＼な事を把持して居ては、つまり、一つの事も出来ないのだ。たとへば、碁を打つ人が、一手も無駄な手を打たないで、人より先きになつて、小さな石は捨て、大きな石を取らうと其方に心をつけると同じである。碁の事に就て云つてみると、斯う云ことがあるものだ。三つの石が取れると云場所がある。又他方に十の石が取れると云場所がある。この場合には、誰でも三つの石は敵に委して、十の石を取ることをする。差が多いから、この識別はわけなく出来るのだ。ところが、十の石の取れる場所がある、他方に十一の石の取れる場所がある。其の際十の石を敵に委して、十一の石を取ると云心になることは、むづかしいものである。十と十一、差がたった一つだから、識別が出来られるのだ。たとひ一つでも、多い方へ著手するの

「門」東山のその訪ふべき家の門。
「日」をささぬことなれば「日」限のあることでも無い故。

「痛む」苦痛とする。

が宜いのであるのに、十までになると、この嵩の多いのが惜しく思はれて、どうもこれを敵に委して、たつた一つしか多くない石をその代りに取る、と云氣になれぬのだ。愚なことである、口惜しい所である。これも捨てられぬ、あれも取らう、と思つて居る爲に、つまりはあれも得られず、これも失つて了ふ道理である。

京に住む人、急ぎて東山ひがしやまに用ありて、既に行き著きたりとも、西山にしやまに行きて其益勝るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。「こゝまで來著きぬれば、この事をば先づ言ひてむ。日をささぬことなれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠けいたいすなはち一生の懈怠いっしやうとなる。是を恐るべし。一事を必ず成さむと思はば、他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲あざけりをも恥づべからず。萬事ばんじに換へずしては、一の大事成るべからず。

【譯】京に住む人が、急用があつて東山の或人の家に向つたとする。其人が既に目的の家に到着したにしても、其時、や、こゝへ來るよりは、西山の某の所へ行つた方が宜いと云事に氣がついたら、些の猶豫無く、其の家の門から直ちに踵きびすを旋まわして西山へ向ふべきである。まア折角あつちやうこゝまで來たのだから、この用事を免も角先づこゝの人に言はう。別にいつまでにと云日限があるのでも無いから、西山の方は、歸つて又のことまたのことにせう、斯う思つて、其の日は

西山へ行かずじまひにして、益の少い方の東山の用だけ済まして、それで宜いと思つて。さうしてこの爲に、一時の怠り（更に西山に向ふと云事を怠つたこと）は、すなはち一生の怠りになるのだ。この西山へのこの日行かなかつた爲の損失は、必ず一生に影響を及ぼすのだ。一つの事を必ず成遂げようと思ふなら、その爲に外の事が破れるのを、少しも苦痛にしてはいかぬ。この他の事を破る爲に、人が嘲つても、そんなことを恥かしいと思ふな。萬事を犠牲にしなくては、一つの大事業を完成することは出来ないのだ。

「渡邊の聖」渡邊又渡部とも書く、ワタノベ又ワタナベと云、難波堀江の渡江の地名なり、堀江をばさみて南渡邊、北渡邊と云地名ありたり、渡邊橋と云橋もありたり、この橋は今の天神橋のあたりにありしものと云、そこに住む僧を云、名は傳はらず。
「登蓮法師」傳不詳、詞華集以後の十一代の集に其の作歌入れり。
「あまりに物騒がし」あ

人の數多在りける中にて、或者「「ますほの薄」「ますほの薄」などいふこととあり。渡邊の聖、この事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、其座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある。貸し給へ。かの薄のことを習ひに、渡邊の聖の許、尋ねまからむ」と云ひけるを、「あまりに物騒がし。雨止みてこそ」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるゝもの哉。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてむや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけり、と、申し傳へたるこそ、ゆゑしく有難う覺ゆれ。「敏き時は則ち功あり」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやう

に、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

わたゞしと云と同じ、雨聲を云にはあらず。
「敏き時は則ち功あり」論語、陽貨篇に、「子張問ニ仁於孔子、孔子曰能行ニ五者於天下、爲レ仁矣、請ニ問之、曰恭寛信敏惠、恭則不レ侮、寛則得レ衆、信則人任焉、敏則有レ功、惠則足レ以使レ人」とあり、敏云は、事に應じて迅速に行へば功を成すこと多きを云なり。
「一大事の因縁」佛教の第一義の道理を云。

【譯】人が澤山集つて居た中で、或者が「ますほの薄」「ますほの薄」など云薄の名稱がある。渡邊に居られる上人は、この區別を先人から傳聞きてよく知つて居られる」と云話をしたれば、登蓮法師と云歌よみの僧、其座に居ましたが、この話を聞いて、恰も其時雨が降つて居たが、「蓑笠がありますか。貸して下さい。その薄のことを教へて貰ひに、渡邊の上人の處へ、これからあります」と云出したのを、他の人が「あまりあわたゞしい。この雨をかしておいでなくともものこと。雨が止んでからになさい」と云つたれば、法師答へて「駄目なことを仰しやるなア。人間の命と云ふものは、雨の晴れる間も待つて居るものぢやありません。雨の晴れるのを待つてうちに、私は死ぬかも知れない、上人が殺せられるかも知れない、さうしたら、聞くことが出来なくなつてしまふ」と云つて、急いで走つて出かけて、渡邊へ行つて、教へて貰つた、と云ふ傳へがあるが、實にどうも豪い有難いことと思ふ。「敏きときは則ち功あり」と、論語と云本にもあります。この薄のことを不審して早く知りたかと思つたやうに、眞理を早く知らうと思ふべきである。

【評】説經師の譬喩は、兼好が作つたのか、當時かう云話が傳へられて居たのか知らぬが、まことに明晰な、切實な教である。歌よみにならうとするなら、歌そのものを詠むことを先づ習ふのだ。先づ習字をせねばならぬ、と云氣が起るのは、既に迷である。斯う云事を、いつの代も、皆人がやつて、無意味な一生を送つてしまふ。私は、こゝを中學校で習つた。其の時は、もとより唯國文として習つたので、こゝの意味が胸に響き入らなかつた。しかし年

長ずるに従つて、こゝの意味の記憶が、いかに私の胸の中に漸次鮮かに強くなつたか。こゝの教訓が、いかに私の事業を成す方針方法を明示して呉れたか。私はまだえらくも何とも無い人間だ。しかし一生の間どこまでもこの意氣で通らうと覺悟してゐる。

こゝの「檀那すさましく思ふべし」とて早歌といふことを習ひけり」と云所は、當時の世相が窺はれる。坊主も小唄ぐらゐ心得た方が、都合が實際よかつたのであらう。前の酒宴の席で坊主が舞ふことを書いたのなど並べて見ても、當時の僧の狀態もわかるのである。

「先づさしあたりたる目の前の事のみを紛れて、何と云悲惨な事であらう。さうしてこの悲惨は、今も常に人々の演じつゝある悲劇である。稀に、中に萬事を打捨て、一事に取りがかる人がある。さう云人が偉くなるのである。田園畫家として不朽の名を残したミレーは、二日間絶食せねばならぬと云窮境にまで落ちるのを、顧慮せず、爲すべき一事を爲して居た。さうして畫道を大成し得たのである。人のまはりには、伯父さん然、保證人然たる人が、澤山居る。さう云人達が、ヤレ理想を逐ふなとか、生活法をシツカリせねばならぬとか、いふことを云。脅す。これ等の人の言に隨へば、目の前のことのみ」に追はれ通して、所謂「いゝ子」になつて、その代り何一つ爲得ないで終つて了ふのである。

「いづれかまさるとよく思ひくらべて第一のことを案じさだめて、これがどうしても定まらぬ、と云人があらう。さう云時、決して人に意見など訊きに行つてはならぬ。伯父さんも

訪はず、保證人をも訪はず、獨りで考へるのだ。三日で宜い。三日の間、物音の聞えぬ一室に閉籠つて、とツくと考へてみる。すると、必ず油然として心の奥底から、自分はどうしても此一事を成さう、此事の爲にはどんな苦痛をも堪へよう、と云ふ事が、必ず判然と意識に上る。そいつをシツカリと掴んで進むのだ。そいつを中心にして生活をするのだ。そいつを成すが爲には、義理を缺かうが絶交されようが、細君に逃出されようが、ピクともせずに進むのだ。

「十を棄て、十一につくことは難し、實に親切な訓である。この少しの差をも注意せねばならぬ。立脚地は違ふが、三輪田眞佐子が、儉約の實行方法に就て、斯う云ことを云つたことがある。二十錢のものと十錢の物とがある、この時廿錢のを買ふのをやめて、十錢のにしておく、これは苦も無く出来る。しかし十錢の物と九錢のものとのある場合に、十錢のを止めて九錢の物にして置くと云ふことは、爲し難いことである、この十錢のを止めて九錢のにしておくと云心がけが儉約の眞旨である」と云つた。

「これをも棄てずかれをも取らむと思ふ心に、かれをも得ずこれをも失ふべき道なり」とまことに然り。先日大町桂月氏が、文藝講演會で斯う云つた、人は單純で無くてはいかぬ、斯うと思つたらその道を單純に進んで行くのだ、あれもしよう、此れもしようと、横へ手をひろげて居ては、高く伸びることは出来ぬ。杉を見よ。杉を。蓋々直に天を突く老杉の姿。あれが人の做すべき伸び方だ、と云つた。

「門より歸りて西山へ行くべきなり」、これも實に私のライフに影響を與へた強い語である。

私は斷然新聞社を辭して、もはや決して通勤生活をしまい、獨りで進まうと決心したのは、兼好のこの激勵に因つたのであつた。可なり私は新聞社で古顔になつた。不慣れとは云條可なり慣れて來た。しかし私は止めた主任の某君は手紙をおくり、わざわざ使をおくつて、私に留職を勧めて呉れた。しかし私は隨はなかつた。私は厚意を謝して、そしてこの段の語を書いて、私の辭意はこれだと云つて返事をおくつたのであつた。

それから私は窮境に陥つた。人は悉く私を嘲つた。人の嘲りをも恥づべからず。萬事にかへずしては一の大事成るべからず。この心があつたればこそ、踏切つて堪へることが出來たのだ。私はこゝに決して自慢話をするつもりで、斯う書いてゐるのでは無い。兼好の靈に感謝する爲に書いたのだ。如何に私は貴僧の教訓をよく服膺したか。如何にして刻苦して服膺し得たか。

登蓮法師の話は、長明の「無名抄」に出て居るのを、こゝに大意を取つて書いたのである。無名抄には次のやうに出て居る。

「雨の降りける日、或人の許に、思ふどちさし集りて、古き事など語り出でたりけるついでに、ますほの穂といふはいかなる薄ぞ、など、いひしろふ程に、或老人の曰く、わたのべといふ所にこそ、この事知りたる聖獨り在ると聞き侍りしかども、いまだ尋ね聞かずといひ出でたりけり。登蓮法師、その中にありて、この事を聞き、詞すくなになりて、又問ふことも無く、主にいふやう、蓑笠ちと貸し給へといひければ、あやしと思ひながら、取り出でたり。物語ども聞きさして、蓑笠うち著、藁沓さしはきて、急ぎ出でけるを、人々あやしがりて、

いはれを問ふ。わたのべといふ疾へまかるなり。年頃いぶかしく思給へしことを、知れる人ありと聞きて、いかでか尋ねにまからざらむ、といふ。驚きながら、さるにても雨止めて出で給へと諫めけれど、いでや、はかなきことをのたまふ哉。命は我も人も雨のはれ間など待つべきものか。何事も、今しづかにとばかり云ひ捨て、いにけり。いみじかりけるすき者かな。さて本意の如く此所へ行き尋ね合はせて、問ひ聞きて、いみじう秘藏しけり。このことと第三代の弟子に傳へ習ひ侍りける。この薄のこと、同じさまにて數多侍るなり。ますほの薄、ますほの薄ますうの薄とて三くさあり。ますほの薄といふは、穂の長くて一尺ばかりあるをいふ。かのますかやみをば、萬葉集には十寸鏡と書けるにて心得べし。ますほの薄といふは、眞麻の心なり。俊賴朝臣詠み侍る、ますほの絲をくりかけて、と侍るとよ。絲などの亂れたるやうなり。ますうの薄とは、まことに蘇芳なりといふ心なり。ますはうの薄といふべきを、ことばを略していふなり。色深き薄の名なるべし。是れ古集などに、たしかに見えたることは無けれど、和歌のならひ、かやうのふることを用ひるも、又よのつねの事なり。人あまねく知らず。みだりに是を説くべからず。」

「ますほ」と云この「ま」はよくある接頭語で、「そほ」は「緒」と云ふことで、赤いものに云語である。色の赤いのを、愛でて。眞緒の薄と云ので、これが轉訛して「ますほ」とも「ますを」とも「ますう」とも、又「ますう」とも「ますを」とも云ので、皆同じである。この無名抄に書いた通りのことを、果して所謂わたのべの聖が云つたのならば、聖の説は愚説である。みだりに是を説くべからず」など書いた長明も愚である。

「一大事の因縁をぞ思ふべかりける」と最後に云つたのは、はじめに事業を説いてしまひに例の「一大事」に説き及んだのである。この結末から、前をも押して、「一の大事成るべからず」など云「大事」をも、鈎玄のことと思ふは誤である。前に云ひ來つたのは、弓道でも劍道でも歌道でもすべて一つの道、一つの事を指したのである。

第百八十九段

今日はその事をなさむと思へど、あらぬ急ぎ先づ出で来て、紛れ暮らし、待つ人は障りありて、頼めぬ人は來り、頼みたる方の事は違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりは、かなひぬ。わづらはしかりつる事は、事無くて、易かるべき事は、いと心苦し。日々に過ぎ行く様、かねて思ひつるには似ず。一年のうちも斯くの如し。一生の間も又然かなり。かねてのあらまし、皆違ひ行くかと思ふに、自ら違はぬ事もあれば、愈物は定め難し。不定と心得ぬるのみ、まことに違はず。

【譯】今日は斯う云事を爲ようと思つてると、思ひも寄らぬ急用が、横合からヒヨイと出て來る。それをやつて、其の爲に、今日爲ようとした事は忘れて、紛れて一日暮れてしまふ。

「あらぬなさうとして居る事の外の。」
「急ぎ急用。」
「頼めぬ人」頼みにしてゐない、即ち待つて居ない人。

「あらまし」豫定。

待つて居る人は、差支があつて來なくなる。待つても居ない人が、思ひがけなく來る。あの方の事は屹度大丈夫出來ると思つて居る事は、出來なくなつて、とても出來ぬと思つてた事は、出來る。面倒であつて逆も成就出來ぬと思つて居る事が、意外に、わけなく成就する。さうして苦も無く出來る筈の事が、非常にむづかしくなつて心を痛めればならぬ。毎日の有様、豫想の通りでは全く無い。一年にわたつて見てもこの通りである。一生涯にわたつて見てもこの通りである。しかし、一切の事が豫定とは違つて行く、かと思ふと、さうでも無い。中には豫定通りに行く事もあるから、愈以て、これは斯うなるものと定めるわけにはいかぬのだ。「不定」、斯う思つて居ることが動かぬ眞であるのだ。

【評】「あらぬいそぎ先づ出で来てしまふ」と日々この事がある。前段では、これを排斥せよ、排斥して押進め、と説いたのだ。

唯、思ひがけない、意外、これのみに人はあふのである。わづらはしかりつることは事無くて、やすかるべきことは、いと心ぐるし」と同じ心を也有が、「旅賦」に書いてる。曰く、「赤表紙の道中記、おもりに鐵鈔をさげ、櫃の牡丹餅には煤黒き雜巾を覆ふ。箱根の赤腹は巻わらにさし、梅澤の鮫鱈は鍵にかけて軒につるす。されば、日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝だけに越して、思はぬ酒匂に二日留められたる、あら居の茶屋に鰻の新しき日は、親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日越しの焼餅を食ふなど」。

「皆たがひ行くかと思ふに、おのづから違はぬこともあれば、この穿ちばどうである。實に一種慄然たる感に打たれる。皆違ふまでは誰でも云へる。長明でも云へる。又違はぬもあ

第百八十九段

る、と云つて、だから愈不定だ、とは誰が云へよう。

第百九十段

「誰がし」何某。
「いかなる女」これ
云女。
「相住む」同棲。
「わざ」こと。
「ことなる事なき」ど
こと取りえも無い平凡
な。
「らうたくして」女を可
愛がつて。
「吾佛」自分の佛、すな
はち崇み奉るものとす
るを云。
「たとへばさばかりに
こそ」云つて見りやそ
れ位のところさ。
「心づきなく」その女に
心を集注し難きを云。
「中空」空中に飛びはな
れたる状態を云、夫は
シツカリ愛してくれず

妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。いつも獨住にて」など聞
くこそ、心にくけれ。誰がしが聳になりぬとも、又「如何なる女を取り
据ゑて、相住む」など聞きつれば、無下に心劣りせらるゝわざなり。「こ
となる事無き女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひ居たらめ」と卑しくも
推測られ、よき女ならば、「この男こそ、らうたくして、吾佛と守り居た
らめ。たとへば、さばかりにこそ」と覚えぬべし。まして家のうちを行ひ
治めたる女、いと口惜し。子など出で来て、かしづき愛したる、心愛し。
男なくなりて後、尼になりて、年寄りたる有様、亡きあとまであさま
し。いかなる女なりとも、明暮添ひ見むには、いと心づきなく、憎かり
なむ。女の爲も、中空にこそならめ。よそながら時々通ひ住まむこそ、
年月経ても絶えぬなからひともしならめ。あからさまに来て、とまり居な

どせむは、めづらしかりぬべし。

さればとて他に男を頼
むことも出来ず、頼り
なき有様なるを云。
「通ひ住まむ」こそ女の
許に通ひなることを
ただ「住む」ともいひな
らせり。
「あからさまに来て」一
寸来て。ほんの一寸思
ひついて、逗留するつ
もりでも無く来て。
「とまりぬなど」この
「とまる」今の語と同じ

【譯】 妻と云ものは、男子たるもの、持つべきもので無い。私はいつも獨身で」などと云ふ
のを聞くのは、其人に敬意を起すものだ。何の某の聳になつた」とか、又「しか」と云女
を家に入れて、同棲して居る」などと聞くと、あの男は駄目だなアと、ひどく輕蔑の念が起
るものである。妻をもつたと聞くと、あの男は、別にこれと取り得も無いあんな女を、よい
女と思ひ詰めればこそ、連添うて居るのだらう。馬鹿な男だ」と、その男が卑しいものに思
はれる。又よい女を妻にもつた話を聞けば、「嘸まア、あの男が、その女を可愛がつて、後生
大事に、御守り申して居ることだらう。そのくらゐの所さ」と、やはり輕蔑心が起る。まし
て、家政に長じた女で、妻がいろ／＼家のうちの行政をして居るなどは、實に厭だ。子など
が出来て、それを大切に愛育して居るなど、厭だ。夫が死んだあとには、尼になつて、年寄
る。その有様の見にくさ。妻といふものは、夫其の人の死んだあとまでも、あさましいもの
である。どんな女でも、毎日一緒になつて居たら、さう／＼其の女にのみ心を集注して居る
氣にはなれなく、疎かな氣分になり、又憎くもならう。だからつまり女の爲にも、頼り無い
有様にだん／＼なつて行くわけである。同棲などしないで、別居してゐて、時々女の所へ通
つて暮らす、と云のが一等宜い。さうして居れば、歳月を経ても、縁の絶えぬ間柄にもなら
う。さう云別居の情交は面白い。一寸のつもりで女の所を訪うて、意外に落著きたくなつて、
しばらくとまつて居るなど、氣が變つて面白いものだらう。

【評】 妻と云ものは持つべきものでない、この言は、未婚者には如何に、破倫に、亂暴に、

第百九十段

殘酷に聞えよう。しかし既婚者は、洋の東西を問はず、多少會心の感無しに、この語を聞くものは無からう。一般の風習に慣れて、誰も或る年頃になれば、妻を持つ。さうして必ず後悔をして居る。それは「我」と云ふものを確立しようとか、完成しようとか、さう云事が少しも念頭に無い人ならば、後悔をせぬかも知れぬ。しかし少しでも念頭に「我」ある人は、誰かこの夫婦と云状態を無上完全のもの、と云に躊躇するであらう。妻なる者が如何に日々夜々この「我」を損傷するに殆ど努力しつゝあるかを見よ。それは夫の事業を助けると云こともある。しかしそれは到底發作的の行爲に外ならぬのだ。妻は家の内部を取扱つて夫に後顧の患無からしむると云。しかしその妻の取扱つてゐる部分は、妻それ自身が居る爲に出來た事であるのだ。男子一人ならば、家庭と云ものも立て、置く必要が無いのだ。妻がセツセと働きつゝあるのは、己が身あるが爲にそこに出來た組織に就て、働いて居るのだ。兼好がこの大膽な言を、この大昔に言放つて居ることは、可なり理由がある。ここに云つてゐる主張は論理的根據は無く、趣味に立脚しての論ではあるが、理も味も奥は一つ、高い趣味眼で感と見た事は、必ず非理な事であるのだ。

妻をもつたと云と、其男に對して侮蔑の心が起る、と兼好は遠慮無くこゝに書いた。これを、ことさらびた言葉と思ふのは、其の人がまだ若いのだ。少し年長すれば、人の婚儀を擧げるを聞く毎に、誰しも兼好がこゝに云つた通りの感が起るものである。さうして婚した友を、訪うて見給へ、必ず、あさましく其の友が「我」を、妻の爲に蝕害されつゝある様をまさしくと見得る。

かと云つて既に夫婦になつてゐる者はもう仕方が無い。さうして苟くも事様を成さむとしたらば、妻と離れた場所でするより外無いのである。一日の中、妻と離れて居る時間の量は即ち其人の事業の量と、正比例するのである。

維納生れの天才オットーワイニンゲルは、兼好より更に一步進めて、「女性」としての女子を滅却せよと叫び、その爲には、夫婦關係はおろか、抑性慾を禁断しなくてはならぬと叫び「吾人が兩性に向つて性慾の禁断を要求するの理由は、實に此の女性及人道問題の至高至大の見地に出づ」と云ひ、種屬の永續など云ことを義務と思ふなとて、かかるが故に種屬の永續を圖るは、決して道德的義務には非ざるなり。何人か人類の滅亡を豫防せむとの目的を以て性交を行はむ。又誰か童貞の人に向つて、其不徳を責むるの勇あらむ。又誰か人間種屬の永遠の存在を圖るを以て義務と感ずる者あらむ。而して人の義務と感ぜざる所の者は、亦義務に非ざるなり」とまで云つた。兼好若しワイニンゲルと會はば、いかに談笑したことであらう。さうして兼好は、この塊地利の青年に云つたらう、「さう附きつめて物を論らふものぢや無い。右からも、左からも見て、物を説くが宜い」と。

同棲しないで、通うて居れば、萬更でも無い、と兼好は云つた。つまり平安朝の上流に一般に行はれて居たやうな夫婦關係だ。「あからさまに來てとまり居などせむは珍しかりぬべし」は實に通つた言では無いか。

「この男こそ、らうたくして」と云所、流布の書に皆「この男をぞ」となつてゐるが、これは疑ひなく「こそ」の誤である。それで無くては意味が通らず、又文法上あとの「居たらめ」の係

がどこにも無いことになつてゐる。

第百九十一段

「はえ今も云「はえる」と云この名詞なり、光彩を云。
「きら」光彩。
「色ふし」色調、と書けばよくあたる。色の調子、即ち色の工合と云こと。
「こそそぎ」簡略にし。「およすけたる」じみな。
「ほかけ」燈光で見たさま、と云こと。
「用意ある」たしなみあるを云。
暗いからとて亂暴な口のきき方などせず、つましやかに云は、心

夜に入りて物のはえ無し、と云ふ人、いと口惜し。萬の物のきら飾り色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝は、こそそぎ、およすけたる姿にてもありなむ。夜は、きららかに、華やかなる装束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞ、よきはよく、物云ひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂ひも、物の音も、たゞ夜ぞ、一層めでたき。さしてことなること無き夜、うち更けて參れる人の、清げなる様したる、いとよし。若きどち、心とどめて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊に打解けぬべき折節ぞ、褻情無く、引き繕はまほしき。よき男の、日暮れて、汗し、女も、夜更くる程に、滑りつゝ、鏡取りて、顔など繕ひ出づるこそ、をかしけれ。

にくきとなり、明るきには誰も用意ありてあたりまへなれど。
「匂ひ」今の「匂ひ」と同じ。香。
「けばれなく」ふだん、改まり、の區別なく、ふだんの時だとか、改まつた時とか、そんな別を立てずいつでも。「ゆするし」ゆするとは髪梳る料の水を云、米汁を用ひたりと云、ゆするすとは髪をそれにて洗ひ梳るを云。
「すべりつゝ」寢床をそつと出ること云。

【譯】夜になると物の光彩が無くなつてしまふ、と云人があるが、それはまことにわからぬ人と云ものである。總ての物の光彩、飾、色調、皆、夜見て始めて立派に見えるものである。晝は、簡素なシミな風をして居ても宜い。夜は燦然として絢爛な装束を着て居るが、甚だ宜い。人の姿も、夜燈光で見た有様が、美しい人は、十分に其美を發揮して居るのである。物云ふ聲でも、暗い所で聞くと、暗くてもたしなみのある聲で云のを聞けば、敬意を起すものである。香ひでも、音楽でも、夜に限る。夜かき聞きて、一層の妙味を感じ得るものである。別にこれと云ことも無い普通の夜に、夜更けてから人が来る、其の人が清らかな姿して居る、と云のは、實によいものである。若い同志、人の姿など氣をつけて見る人は、いつでも氣をつけるのであるから、殊に、改まらない、だらしなくして居てもよい時も、ふだんとか改まるとかそんな時の區別無しに、容姿を整へて居るべきものである。美男が、目が暮れてから、髪を洗ひ梳るのは、よいものである。女も、夜が更けた時分に、寢床をすべり出て、そつと鏡を取り出し、顔など化粧し始めるのは、趣のあるものである。

【評】前にも云つたが、こゝは、確に、枕の草紙から得た感じでもあらう。もとより兼好自己の感じが、彼と共鳴して書いたのである。

「晝は、こそそぎおよすけたる姿にてもありなむ」とは、餘程反抗的の氣分もあるが、又晝間白日の下に、けばくしいなりをして居ることが、實際厭なものであるから、斯う云つたのである。

第百九十一段

「ものいひたる聲も暗くて聞きたる用意ある心にくし」、よく暗い所では、誰とわからぬを

幸ひ、無遠慮な聲を出したり、言葉を使つたりする者がある。本當の人のたしなみは、この時にわかるので、白日の下と同様に、つましく物言ふのを聞くと其の人がうれしく思はれる。と云つたのである。「用意ある」とは、それを指したのである。

「さしてことなることなき夜」こゝが兼好の注文なんだ。何か宴会であつた晩とか、云なら、夜更けて清げな著物着て来るのは、何でも無いが、何事も無い夜に、清げに引續つて来る人を、嬉しく思ふと云ふのである。

「よき男の日暮れてゆするし」、今宵女をおとつれもしようとするのであらうかと、そのゆかしさも、濃艶の趣を増す。

「女も夜更くる程にすべりつゝ……」、添臥の男の寢入つたのを伺つて、顔かたちを辨つておいて、朝の見苦しさを見せない、とするのか、或は、人知れず待つ男の、もはや来る時分と、朋輩にかくしての寝白粉が、どちらかであらう。こゝは、兼好が女のもとに通うた頃の、實際の有様を思ひ出して書いて居るのである。

この男女の描寫は、色の濃い浮世繪のやうである。僧の兼好が斯う書くのは、枯淡らしい芭蕉に、「梅櫻嗚若衆かな女かな」の句があると同じである。

清水の神田屋の梅月夜
第百九十二段
今宵女をおとつれし

神佛にも、人の詣でぬ日、夜参りたる、よし。

—のこり—

【譯】 神社佛閣へ参るにも、晝よりは夜参詣したのが、よい。しかし夜とはいへ、人が大勢参る夜はいけない。人の詣でない日に、夜参つたのが宜い。

【評】 これは前段のつゞきであるが、古人は皆段を分けて置いた。男女のことを云つたあとへ、直ぐ神佛と續くのを、憚る氣持でしたのであらう。こゝの「よし」と云のは趣味上よいと云ことに取つても誤では無いが、もう少し深みがあるのである。即ち誰も参らぬ夜、獨り参ると、眞に神佛と自分と相感通する思がある。それを云のである。本當に「参る」と云意義になふと云のである。「人のまうでぬ日」と特に斷つたのも、兼好の立場がわかる。

第百九十三段

「暗き人」暗愚の人。
「ばかりて」忖度して。
「拙き人」拙陋の人。
「定めて」こゝにて意味切つて解くべし。
「たくみ」匠なり。その道の専門家を云。
「文字の法師」學者側の法師。經文によく通じたる法師を云。
「暗證の禪師」經文の義

暗き人の、人をはかりて、その智を知れりと思はむ、更にあたるべからず。拙き人の碁打つ事ばかりに敏く巧なるは、かしこき人の此藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずと定めて、萬の道のたくみ、我が道を人の知らざるを見て、己れ勝れたりと思はむ事、大なる誤なるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、己れに如かずと思へる、共にあたらす。おのれが境界にあらざるものをば、争ふべからず、是非

第百九十二段——第百九十三段

理解くことは第二として専ら坐禪工夫して眞を體得すると云側の法師を云。
「是非すべからず」褒貶すべからず

すべからず。

【譯】物の道理に暗い人が、他人を付度して、あの人の智慧はこの位だと、それを自分で知つた積りで居るが、それは決して當つて居ない。いやしく拙き人で、唯基を打つ事だけに才が利いて上手であると云、さう云人が、賢人で基には下手だと云人を見て、フ、ウあの人には賢い人だと云が、おれより基の下手なのを見ると、おれの智慧にかなはないのだ、と斯う定めてしまふなど、すべて何の道によらず、其道の専門家が、人が自分の長じてゐる道を知らないのを見て、おれの方が勝れて居ると思つてゐるのは、大きな誤である。經文の義理に於ける所謂文字の法師と、經文讀むことは第二にして、先づ坐禪工夫して「眞」を體得すると云側の所謂暗證の禪師、この兩種の法師が、互に他を付度して、彼は我に及ばないと思つてゐるのは、共にあたつて居ない。自分の知つてゐる範圍外のものに對しては、争つてはいけない。批評をしてはいけない。

【評】基の例も面白いが、又文字の法師、暗證の禪師の例も實に適切な例である。學者と作家とも同じである。それが互にはかると云愚を今日もして居る。作家が學問が無いことを指摘して、學者は笑ふ。又作家は、學者を嘲つて、彼はたゞ過去の事實をのみ込んで居るばかりだ、と云。かう云事は實につまらぬ。世界はいろ／＼な世界の集りである。其等の世界が、相助合つて、始めて所謂向上と云事も出来るのである。我が知らぬ世界の事を、知つた類に云はず。我が知つてゐる世界のみが最高の世界などと思はず、平等觀を持して、互に相利するが宜いのである。暗證の人と文字の人に教を乞ふべき場合がある。文字の人と暗證の人に教

を乞ふべき場合がある。

第百九十四段

「達人」至理に到り達して居る人。
「はかる」いつはる。
「信を起して」信仰心を起して。
「心得添ふる」自分の考で附け加ふるを云。
「頼むにもあらず」この頼むは信用と云こと。
「さもあらむとて」そんなともあらうと思つて
「推し」推量し。語る人の言外のことまで自分の考で推量するなり。
「つやく」ちつとも。
「知らぬ」眞相を。
「推し出だして」いろいろ推量して自分で考をまとめるを云。
「あはれさるめり」あ

達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。たとへば、或人の、

世にそらごとを構へ出だして、人をはかる事あらむに、素直に眞と思ひて、云ふ儘にはからるゝ人あり。餘りに深く信を起して、猶わづらはしく虚言を心得添ふる人あり。又何としも思はで心をつけぬ人あり。又聊おぼつかなく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで案じ居たる人あり。又眞しくは覺えねども、人の云ふ事なれば、さもあらむとて、止みぬる人もあり。又様々に推し心得たるよしして、かしこげに打頭き、微笑みて居たれど、つやく知らぬ人あり。又推し出して、あはれ然るめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと、怪しむ人あり。又ことなるやうも無かりけりと、手を打つて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりとも云はず、覺束なからぬは、とかくの事無く、知らぬ人と同じやうに

第百九十四段

それに違ない。誤もこそあれ「語る人の云所に。」
「心得たれども」虚言と「覺束なからぬは」不明なところなく、明かに真相を心得て居る人は。

「とかくの事なく」その虚言を打消さうとせず、虚言する人と對抗しようなどさる行動を少しも爲さぬを云。

「あさむかすしあさむくと云語に欺の意に使ふ時と嘲、諷、の意に使ふ時と二つの場合あり、こゝは嘲、諷の場合なり、虚言のことを云所に偶然この語ある故紛らばし、よく心をつけて讀むべきなり。」
「構へ出だしたる人」虚言を作り出した人。
「力を合はする人」その虚言を助長するなり。

て、過ぐる人あり。又この虚言の本意を、初より心得て、少しも嘲むかず、構へ出だしたる人と同じ心になりて、力を合はする人あり。愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、この様々の得たる所、詞にても顔にても、隠れなく知られぬべし。まして、明かならむ人の、惑へる我等を見むこと、掌の上の物を見むが如し。但し、斯様のおしはかりにて、佛法までを、なすらへ言ふべきにはあらず。

【譯】 至理に到達した人が、人を見る眼、即ち人を洞察する眼力は、少しも誤る所の無いものである。その有様の小模型をいへば、或事の真相を自分が知つて、其事に就ての虚言を自分の前で衆人に語つてあるを聞き、聞いている人の様子を見てると、實によく人々の心の底がわかるのである。一寸したこんな事に就てもさうであるから、一切を包含した、至理に達した人には、一切がわかる筈である。その虚言の場合を觀察して見ようか。たとへば、或人が虚言を構成して世に流布し、人を欺くと云事があるとすると、これを聞いて、すなほに溫和しく本當の事と思つて、語る人の云ふ通りに、欺かれて居る人がある。又あまり其の虚言を深く信じ切つて、その信するあまりに、其の虚言の上へ更に自分の考で虚言を、うるさく積上げ附け加へる人がある。又、別にその虚言に重きを置かず、何とも思はないで、聞流して、一向注意しない人がある。又その虚言を聞いて、少し不審に思つて、信用するでも無

「得たる所」感受する所
「佛法までを……」佛法の方便などを、この普通の虚言あしらひに、こゝに論ずると同じ見方して論ずる人あらむかとして、特に戒めたるなり。

く、信用しないでも無く、唯どうかたと考へて居る人がある。又、本當とは思はれないが、しかしまア人の云ふ事だから、ひよつとしたら然う云事もあるかも知れぬぐらゐに思つて、すまして居る人もある。又いろ／＼自分で推量して、よく解つたと云様子をして、委細承知して、居ると云風で、ウム／＼と云うなづいて、微笑して聞いて居るが、真相はさつぱり知らない人がある。又語る人の言からいろ／＼推量して自分で考をまとめて、あゝ成程さうだらう、それに違ない、と思ひながら、しかしまだどこか間違つた所があらうと、多少疑を含んで居る人がある。又、なアんだ、そんな事が、何んでも無い、平凡な事ぢや無いか、と云つて、手を打つて笑ふ人がある。又話の真相を、よく知つて、あの男はウソを云つてゐると承知してゐながら、おれは本當の事を知つてゐるとも云はず、何もかもよく明かに知つて居る人は、黙つてゐて、其虚言を破却すると云やうな行動などせずに居るから、外見では、真相を知らないでその虚言を信じてゐる人と同じ様子で通ると云人がある。又けしからぬ人があつて、この虚言の本意、即ち語者の何の目的でかう云ふ虚言をするかと云事を、はじめからチャンと心得てゐて、そして其の語者の云所を少しも嘲り諷らず、その虚言者と同じ心になつて、自分も一緒になつて、其虚言を助長する人がある。愚者どもの中での一場の冗談に就てでも、事の真相を知つた人には、この各人の各感受する所が、各人の云ふ詞でも、顔つきでも、明らかに顯はれて、よく知れるのである。だから況んや、明智の人が、我々のやうな惑者を洞察することは、實に手のひらの上の物を見ると同じく、明らかに何もかもわかるのである。但し、この虚言の例の見方を、佛法の方便にまであてはめて考へるのは

間違になる。かやうな推測で、佛法までを、同様に準じて論すべきではない、それは全く超越した別の事であるのだ。

【評】 例の行届いた、犀利な、そして趣味の豊富な観察をした。前の七十一段の虚言論と、こゝと参照して見ると、更に面白い。兼好は實に熱心なる虚言研究者である、私には虚言を成す側の心理を描寫し、こゝには虚言を聞いてる側の人の心理を描寫したのである。殆どこれ以外に書くべき種別が無いと思はれる。

「すなほにまことと思ひて」の人は、所謂人のいゝ人である。あまりに深く信を起して」の人は、人のいゝを通り越して馬鹿である。馬鹿故に「そらごとを心得そふ」など云ふ害をも成すのである。「何としも思はで」の人は、萬事心のうは面で迂らかして行く人である。かう云人は、人に欺かれぬが、又人に教へられると云利を得ることも無い。「いさゝか覺束なく覺えて」の人は、先づあぶなげの無い人であらう。「まことしくは覺えぬども」の人は、敬虔の人である。「人のいふこと」を、必ずしも重んじばしないが、輕んじばせぬ人である。なつかしい人である。「さまざまに推し」の人は、大馬鹿である。早呑込の人である。訪問記者にこの種族が多い。「推し出して」と云人も、自分の考慮をする點に於ては「さまざまに」の人と同じであるが、「あやしむ」だけ彼よりは間違は無い。多くの註書には、この「推し」推し出だして」を、虚言なることを推することに解して居る。成程さうすると明晰のやうに感ぜられるが、中つては居ない。その方の説では、「あやまりもこそあれ」は、自分の考に誤があらうと思つてゐることに解き、「あやしむ」も自分の考を怪しむことに解く。

が、それは強ひた解きやうと云はればならぬ。誰でも虚心に、こゝを讀めば、其の解の強ひたものなる事が、わかる筈である。ことなるやうも無かりけり」の云は薄馬鹿である。この事はこの場合には、幸ひにその虚言が斬新珍奇なもので無いから輕んじて、吊り込まれなかつたものゝ、一朝斬新珍奇な虚言にあふと、夢中になつて信じ切つて了ふ輩である。心得たれども」の人は、これはドツシリした人で、大人君子の風がある。兼好の理想の人であらう。其の次に最も罪の深いのを擧げた。それは「このそらごとの本意を」の人で、こいつは惡意があるのだから。耐らない。まして明ならむ人の……のところ、實にこの通りである。私の知る某先生等は、この「明なる人」である。私は先日來宇宙不可解の問題に悩んで、先生の許へ駆けつけて、教へらるゝ所あつたが、その後、歸つてゐる／＼自ら考へて、やつと全實在を掴み得て、これを自由講座で講じ出した。この事を一人が、先生の所へ行つて告げた。すると先生は「その時が危い」と云はれた。それを其の人が私に傳へた。何を、と思つたが、よく考へてみると、この先生の言を人傳に聞いた時、すでに自分は危いことを引き起して居たのである。或文豪の墓の立て場所に就て、私は私の先輩たる人の意見に反對した。反對する其ことは、悪くは無いが、非禮なる言をつられた手紙を送つたのであつた。所謂「悟り」をしない前なら、こんな事を敢て爲る筈は無かつたのだ。「悟り」のすつと後でも、こんな事をする筈は無いのだ。「悟り」のホヤ／＼の折、こゝこそが活用のところと思ひ、我、誰をか恐れむ、との誇負の心もあつて、遂に思はずこの非禮をしたのであつた。ハツと思つて、ひたすら謝したが、その先輩の頭には、まだしばらくの間は悪い印象が残つてゐることであら

う。某先生の「あぶない」と云はれたのは、こゝの事だな、と氣がついて、私は實に冷汗を流した。「掌の上のものを見むが如し」と云、實にこの通りであると、つくづく思ふ。

第百九十五段

或人、久我繩手を通りけるに、小袖に大口著たる人、木作りの地藏を、田の中の水におし浸して、ねんごろに洗ひけり。心得難く見る程に、狩衣の男二三人出で来て、「こゝにおはしましけり」とて、此人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。よのつねに在しましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

【譯】 或人が、久我繩手を通ると、小袖を着て大口を穿いた人が、木造の地藏を、田の中の水につけて、丁寧にゴシゴシ洗つて居た。妙なことだなアと見て居ると、そのうちに、狩衣著た男が二三人そこへ来て、「やア、こゝにおいでだつた」と云つて、其の人を連れて去つた。その人は實に久我内大臣殿であつた。普通の場合は、眞面目で尊敬すべき人であつた。

【評】 この内大臣は發作的に精神異状を呈する人で、よくフタクと何處かへ飛出して、妙な事をして居る、と云事が屢あつたものと見える。この狩衣の男の様子が、もう幾度も爲つて居る様子で、平然として、驚きもせぬ様子が見えてる。久我内大臣殿はかゝる病氣があつた、と書いてあるなら、このやうに明らかな印象を讀者に與へまい。さう概念的に書かないでまのあたり見た人の見たまゝ書いたので、歴然と其の様子が今も見えるやうに思はれる。田舎の驢道の傍に、燦たる小袖大口姿の貴人が地藏を泥水で洗つてゐると云光景、思つて一種の鬼氣が湧くでは無いか。ひよつとしたら、この「或人」は兼好自らだつたかも知れない。自分に見たのを、見たと云のを憚つて、他人に委したのかも知れない。

第百九十六段

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、この殿、大將にて、さきを追はれけるを、土御門相國、社頭にて警蹕いかゞ侍るべからむ」と申されければ、「隨身の振舞は、兵仗の家が知る事に候」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ知らざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝ故に、神社にて殊にさきを追ふべき理りあり」とぞ仰せられける。

【譯】 東大寺の八幡の神輿が、東寺の若宮八幡に御いでのことがあつた。それからこの神輿、この若宮から東大寺へ御歸りの時に、八幡は源氏の氏神故、源氏の公卿達が、この神輿

第百九十六段

七月内大臣に任ず、源氏なり。
「よのつねにおはしましける時は」精神状態が普通の時は。
「神妙」眞摯と云に同じ。

「東大寺の神輿」東大寺は今も奈良市の東北部に儼然として存す、この神輿とは、手向山八幡宮の神輿を云、同宮は東大寺の鎮守神なり今、寺の東五町に在り。

「東寺の若宮」東寺は京都市下京區大宮西、九條北、壬生東、八條南に現存す、男山の八幡宮はこの寺の鎮守たり、同宮に本宮若宮あり、若宮に仁徳天皇を祀る

「久我繩手」京の郊外、乙訓郡、川の西岸に久我村ありこゝより山崎に至る繩手道あり、これを久我繩手といへり今も二里程の間存す、繩手とは繩道の轉にて繩は直を意味す、田の間の直線の道を云。
「小袖」下著を總て云、袖の角を縫ひすぼめたるより、袷の大袖に對して云なり。
「大口」大口袴の略稱、表袴の下にはくも裾の口大きくあきたり。「久我内大臣殿」久我通基公、正應元年

こと勿論なり、この若宮を指す。
「歸座」手向山八幡宮へ
「この殿」久我内大臣。
「大將にて」その頃まだ近衛の大將たりしなり。

「さきを追はれける」オシ、オシ、などいひて先拂ひするをさきを追ふと云、久我大將、この時我が隨身をして、さきを追はしめたるなり。

「土御門相國」太政大臣源定實

「社頭」神社のあたり。

「警蹕」さきを追ふこと

「兵仗の家」武官の家。我大將たり、我は兵仗の家なり。

「北山抄」一條天皇以後の儀式の事を記したるもの。十一卷、藤原公任の著、公任北山長谷の別荘に入り祝髪せしより、この書名あり。

「西宮」源高明、西宮左大臣と稱せらる、この

「西宮記」と云書を著す、二十卷、儀式の事を記す、古禮を見るによし、この書を抄出したる「西宮抄」と云書あり、こゝに西宮といへるはいづれを指すと見るも可、要するに西宮の説とは高明の説と云ことなり。

「眷屬」主神の所縁。
「定額」きまつた員数と云こと。
「女孺」宮中内侍司の下役の女官、掃除點燈など司る。
「延喜式」五十卷、宮中年中行事、百官臨時の作法、其他各國の定例を記したるもの、醍醐天皇の勅命により、藤原時平の著に從ひ、藤原成にて歿し、其の弟忠平その後をつぎて、すべて十餘年を経て竣功せしもの。
「公人」今の所謂公人なり。

の供奉の爲或は奉送の爲に、東寺の若宮へ參られた。この時、久我内大臣は、大將であつたが、やはり東寺若宮へ參られた。ところが境内に來ても、内大臣は隨身をして警蹕をさせて進まれた。土御門太政大臣は、これを見て、「神社の所で警蹕をすると云ことは、神に對して不敬では無いか、どういふもので御座いませう」と申されたら、久我大將は、「隨身のなす事は武臣の家の者が知つてゐるので御座ります。(隨身の作法は、私どもはよく知つて居ります。誤はありませぬ)」とだけ答へられた。さて後になつて、大將が人に仰せられたには、「土御門相國は、北山抄だけ見て、西宮の方の説は御存じないのだ。神の眷屬の惡鬼惡神の、害をなすを恐れるから、神社では、殊に警蹕をする理由があるのだ」と仰せられた。

【評】 前段に狂態を描いたその同じ人が、所謂「よのつねにおはしましける時」の豪いとこゝろを、こゝで紹介したのである。神社でさきを追ふ、と云事は、成程神に不敬と思はれる。ところが又上には上の理があつて、惡鬼惡神云々と云故例もあるのだ。相國よりは、久我殿の方が、ともかく博識であつたのだ。

北山抄には、「奉幣伊勢大神宮事」の條にも、「頃之乘輿還宮不警蹕」とあり、なほ他にも、神前警蹕をひかへることを記した箇所があらう。西宮抄に、神社にて殊にさきを追へ、と云ことがあらうと思つて、ザツと私は調べたが、見當らぬ。見落したのかも知れぬ。或は西宮記の方にあるのかも知れぬが、まだ調べて見ぬ。ともかく斯う云説が、西宮左大臣の説にあるのであらう。

西宮抄は古い禮式を見るによく、北山抄は新しき禮式を見るによし、と云ことになつて居

る。惡鬼云々など云考は、成程古い。理窟を云つて見れば、眷屬に惡鬼惡神ありと云ことを想像することが、大いに主神に不敬である。だから相國の云つたやうに、神社ではさきを追はぬと云のが、理に中つてゐると思ふ。しかしこの段では、ともかく博識の程度の比較をしたのである。さうして兼好は久我殿の方へ軍配を上げて居る。

第九十七段

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふ事、延喜式に見えたり。すべて數定まりたる公人の通號にこそ。

【譯】 「定額」と云ことを、諸寺の僧の員数とのみ云と思つて居る人があつたが、さうでは無い。延喜式には「定額の女孺」と云語が見えて居る。すべて數の定まつた公人に、何の方面のものであるのだ。

【評】 昔は「定額」即ち「一定の員数」と云語が、公人に就てすべてに用ひられて居たのが、兼好の頃には、この語が寺の僧(公人の資格ある)の數に用ひられるのみで、外には用ひられなくなつて居たものと見える。それで世人がこの語を、寺僧に就てのみ特にいふ語と思ひ込んで居るのを、兼好が例の根本的に、破却したのである。

第九十七段

「通號」すべてに用ひられる稱號。

「揚名介」名のみにて職掌も得分も無き官職に揚名介、揚名目又揚名掾と云もあり、揚名とは今の名譽職と云ふこと。加賀介と云名のみの官に任じて加賀にも行かず。又俸給も受けぬ類なり。

一官の長官をカミといひ次官をスタといひ、其下にシヨウ、サクランあるなり、諸官おほむれ斯り。「政事要略」惟宗允亮著古來法制の事を輯録せり、もと百三十卷ありしが、今残れるは九卷なり、惟宗は一條天皇の朝の人。

「横川」比叡山延曆寺境のうち横川谷と云谷あり、そこを云、そこにある堂塔を横川塔と總稱す。「行宣法印」傳々ばらす

第百九十八段

揚名介に限らず、揚名目といふものもあり。政事要略にあり。

【譯】「揚名介」と云稱を、珍しきものに人が云ひますが、揚名は介のみで無く、揚名目といふものもある。この稱が政事要略に見えてゐる。

【評】源氏物語夕顔の巻に「揚名介」と云語が見えて居る。これが難解の語として持ちあつかはれ、所謂源氏三ヶの大事の一つに數へられ、この語の解釋をしたものが單行の書になつても出て居る。大變なわけのものである。それをまだ目もあるよ、と兼好が云つたのである。

第百九十九段

横川の行宣法印が申し侍りしは、唐土は呂の國なり、律の音無し。和國は單律の國にて呂の音なし」と申しき。

【譯】横川の行宣法印が申しましたのに、「支那は呂の國である。律の音が無い。日本は律だけの國で、呂の音が無い」と申しました。

【評】この行宣と云人は支那へ行つたことのある人であらう。

こゝに「呂の音」「律の音」と云つてゐるのは、云ひ方が悪い。「呂の旋律」「律の旋律」のことを指したのである。日本の樂曲は、すべて律旋である。これが風土にあふのである。唐樂の影響を受けて後の催馬樂には呂のものもあるけれど、それは甚だうたひ難い。今も俚語でも、詩吟でも物賣の呼び方でも、悉く律である。

安倍季良の「中軒雜抄」に、こゝの文を引いて、「本朝の人の聲は、此律のしらべによく相應したり。あやしの田夫山がつのたうへる音も、自然と此律音には聞えける。定めて天地自然の理にかなひたる事なるべし」とある。

こゝの解は、上眞行氏の叮嚀なる示教を受けてやつと成し得たのである。

但し井蛙抄六に「辨内侍は老後に尼になりて坂本の北にあふきと云所にこもりて居て侍りけり、龜山院きこしめして七夕御會の時題をつかはされければ、七夕衣に、秋來ても露おく袖のせげればたなばたつめに何をかさまし、と詠みて侍りけるを、實にさこそあはれがらせおぼしまして常にとふらひなど侍りけるよし、あふきに行宣法印とて、ふるきもの、侍りしが語り侍りにき」とあり、この人なるべし。

「吳竹」應神紀に邦人始めて支那の吳の國に行きし時、高麗の久禮波

第 二 百 段

吳竹は葉細く、河竹は葉廣し。御溝に近きは河竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは吳竹なり。

第百九十八段——第百九十九段——第 二 百 段

久禮志と云二人の者を道案内にして行きしよし、ふと、吳をクレといひ始めたりと云、當時支那にては吳の國勢ありたり、それより支那より舶來せし物に多くクレと附け、吳の字を附けたり。吳竹も支那より舶來したる竹と云ことなるべし、されど或は狭く、吳の國より來りしものなるかも知れず、淡竹の類葉細く、黃潤にして長さ數尺に過ぎず。

【譯】 吳竹と云竹は葉が細い。河竹は葉が廣い。禁中の御溝のそばに植ゑてあるのは河竹で、仁壽殿の方に近寄つてお植ゑになつてゐるは吳竹である。
【評】 竹の種類までも、確と覚え込まねば、兼好は承知せぬ。そして直ちに實物を指示して他に教へてゐるのは、一寸したことのやうだが、ハキとしてゐて快い。

「河竹」河と書くは借字にて皮竹ならむとの説也、常に皮あり、苦竹に同じ。
○「御溝」禁中にある溝の稱、支那にも「御溝」といへり、其まゝ我國にも使へるなり。○「仁壽殿」禁中の一殿の名。

第二百一段

退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

【譯】 退凡の卒都婆、下乗の卒都婆、のどちらが内で、どちらが外だと云ことがよく人を迷はすが、外のが下乗で、内のが退凡なのだ。

【評】 この退凡下乗の卒都婆のこと、諸註、たゞ大唐西域記に就いてのことのみに書いて居るが、そんなことでは無く、日本にもこの西域記の記事にならつて、寺などにこの二本の卒都婆を立て、居たものに違ない。今も、大寺にはこの事があるのかも知れぬ。御存じの方は教へて下さい。そして其の内外に就て判明しないので、いろ／＼に考へて、いろ／＼にして

「退凡下乗の卒都婆」退凡は凡人を退けること下乗はのり物より下りよとのこと、この卒都婆は高札として用ひられあるなり、大唐西域記に、「至、結栗陀羅矩吒山、接、北山之陽、孤標特起、既、樓、鷲鳥、又類、高臺、空翠相映、濃淡分、色如來御、世垂、五十年、多居、此山、廣

ので、兼好が西域記の本文に據つて、明示したのだ。退凡は凡人に對してあり、下乗は貴人に對してのことだから、まづ普通の考では退凡の方が外、下乗の方が内即ち奥にあるやうに思はれるが、その反對なのが面白い。頻毗婆羅王の斯くした意向は、平等觀に立つて居るのである。

第二百二段

十月を神無月といひて、神事に憚るべき由は、記したるもの無し。本文も見えず。但し、當月、諸社の祭無き故に、この名あるか、この月、萬の神たち、太神宮へ集り給ふ、などいふ説あれども、その本説無し。さる事ならば、伊勢には、殊に祭月とすべきに、その例も無し。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し、多くは、不吉の例なり。

【譯】 十月を神無月といつて、神様の祭のことなどはこの月は忌んで、せぬが宜い、と云こと一般なつて居るが、かう云ことを書いたものは無い。シカとした書物に根據となるべき記載も無い。もしや、この月には、偶然、諸社の祭が無いから、神無りと云のぢや無からうか。この月には、日本中の神様たちが、皆伊勢の太神宮にお集りになる、と云俗説があるけれども、この俗説の根本になるべきシカとした説も無い。果してこの俗説のやうなら伊勢で

第二百一段—第二百二段

説、妙法、頻毗婆羅王爲ノ開法、故興、發人徒、自ニ山麓、至、峯、峯、跨、谷、後、巖、編、石爲階、廣、十餘步、長五、六里、中路有、二、小、空、塔、波、一、謂、下、乘、即、王、至、此、徒、行、以、進、一、謂、退、凡、即、簡、凡、人、不、令、同、往、一、本文に根據となる文章

は、特に、十月を祭する月にしなくてはならぬ筈なのに、さうした先例も無い。天皇が十月に神社へ行幸になつたことは、先例も多くある。但し、不吉なことがあつた例が多い。

【評】 神無月に就てはいろいろな説がある。大物主神が八十萬神を帥ゐてこの月に天に昇り給ふからだとか。或は、この月から雷鳴が無くなるからだ、とか、いろいろ云が、今日に至るまでも明らかな解も無い。

近代では、日本國中の諸神が出雲大社へ参り給ふので、諸社留守になる、と云俗説になつて、俳句では、「神の留守」、「神の旅」などといふ季題もあるが、この兼好の時代には、太神宮に集ると云俗説であつたと見える。ともかく十月といふ月が、神に取つて何か非常な大事件の月、といふことはどうも動かされぬ。雷鳴が止む、などの説は、どうも受取れぬ、それなら寧ろ九月の稱にした方が適當ではあるまいか。斯う書いて、私の頭に「イ」とこんなことが浮んだ。ひよつとしたら、十月といふ月は、天照大御神の崩御の月では無からうか。「イ」とこんな考が浮んだ。すると成程大事件で、日本中の神々が集ると云言傳へもこれで解る。各社にこの月に限つて祭をせぬと云こともこれなら解る。大廟の式を調べたら、大廟で特にこの十月に何か大凶の意のある式などがありはせぬか。たゞ斯う書いて、後日の再考に供へ、大方の示教を仰ぎおく。

斯う書いたあとで、ふと文段抄を見ると、「世諺問答に云、此月を神無月と申すは、伊弉册尊崩給月なれば申なり」とあつて、「册字に「ナギ」と假名がふつてある。どちらの誤かわからぬので原書にあたると、やはり「册」になつてゐて、もとより傍訓は無い。伊弉册尊の崩御

は、成程大事件だらうが、日本の諸神を悉く立駈がすだけの御資格は無い筈である。伊弉册尊といへども、まづそのやうに騒ぐべきとも思はれぬ。たとひ御子で在すとも天照大御神ならば、さこそと首肯される。ともかく併し或大きな神の崩御の月だらうとの想像に於て、私の思ひつきと符合して居る。この考證は後日のことにしよう。又同じく世諺問答に、「諸神出雲の大社へ下り給へば申すともいへり」とある。これは今日云ふところと同じである。この書の著者の藤原兼冬は後奈良天皇の朝の人である。兼好よりはズツと新らしい。だから、兼好時代頃には、伊勢に参り給ふ、と云つて居たのが、兼冬の頃にはもう今日のやうに出雲の説になつたのである。これも調べて見たら何か訣があることが解つて来よう。ともかくも出雲集合説が新しく、古くは伊勢集合説であつた事は、注意すべき事である。

十月諸社行幸不吉云々の事、註書に拾芥抄を引いて、花山天皇は寛和元年十月十四日に松尾に行幸、一條天皇は寛弘元年十月二十一日に北野に行幸、後三條天皇は延久三年十月二十九日に日吉に行幸と並べ、別に、花山天皇は御在位僅に二年にて御下りなり、後三條天皇はこの行幸の翌年位を御退き其の翌年崩御になつた、と書いてゐる。

第二百三段

勅勤ちよくかんの所に靱ゆびかくる作法さほう、今は絶えて知れる人無し。主上の御惱ごなう、大方世なかの中の騒さわがしき時は、五條ごでうの天神に、靱ゆびをかけらる。鞍馬あまに靱明神ゆびあきかみと

「勅勤」勅命の勅當。
勸當とは律に勸かんへて罪に當つると云ふこと。

第二百三段

「靱」矢を入れる器。
「五條の天神」今も存す
京都下京五條南西洞院
西にあり。
「鞍馬」京都の北三里に
ある山、そこに鞍馬寺
あり。
「靱明神」鞍馬の氏神な
り。
「看督長」檢非違使の下
に屬せる官、追捕の事
を掌る。
「封をつくる」門しめて
布などを結び、結びの
解かれぬやうその結目
に文字など記したるな
るべし。

云ふも、靱かけられたりける神なり。看督長の負ひたる靱を、その家に
かけられぬれば、人出入らず。この事絶えて、今後の世には、封をつく
ることになりけり。

【譯】 勅勘を蒙つた人の家には、昔は靱を懸けたものであるが、どう云風に懸けるものか、
その作法は、今日誰も知つて居る人が無い。天皇の御病氣とか、其他何か天下に騒亂のある時
は、五條の天神に靱を懸けられる例である。鞍馬に靱明神と云社があるが、これも、さう云
場合に靱を懸けられた神社なので、斯る稱があるのである。看督長が背に負うて居る靱を、
勅勘の人の家に懸ける、すると人が、その家へは出入りしない、と云ことになつたのであ
る。この事が無くなつてから、今日では、靱を懸ける代りに、封を門口につけることになつ
た。

【評】 靱の考證を試みたのである。主上の御惱の時に五條の天神に靱をかけると云。天神と
いへば菅公と思はれるが、かう云ふ時に菅公に祈るのは稍門違ひである。五條天神の「天神」
は「天使」の訛りで、天神の稱が人の耳に慣れてるので、「天神」と云つて了ひ書くやうにな
つて了つたのである。天使とは即ち少彦名命である。命は大己貴命と共に、天下の經營の實
施方面に努力なされた方で、殊に療病の方、鳥獸昆蟲の災を攘ふ法などを教へられた神であ
る。故に御惱の時に祈るのである。五條天神の天神はテンシンと清んでよめと云ふ口傳のあ
るのも、天使と云原語の名残りである。天使とは、漢語が用ひられてから稱するのである

「しも」としもとは、繁
本の義にて、若き木の
枝のしげきものを云、
罪人を打つにこの若木
をもてせり、故に管を
かくよむなり。
「拷器」打つ器と云こと

が、よくこの神に對して、神代の民が感謝の意を表した其の心持を傳へて居る。「天神」と云
はれて居る社を、一々研究して見たら、菅公ならぬ神社はいくらもあることであらう。御惱
以外の禍亂にも祈るのは、ひろく厄鬼を除き給ふ神として祈るので、當然のことである。鞍
馬の靱明神は大己貴命を祀つてあるといふ。いかにもさうであらう。代々斯る折に朝廷よ
り、五條天神と靱明神とへ靱をかけて祈られたとは、さもあるべきことである。この靱をか
けると云事は、この武器で、禍災の神を追拂ふ意味であらう。勅勘の家にかける意は、諸人
をやばり近づけぬ意味で、ともに威嚇の意がある。

第二百四段

犯人を管にて打つ時は、拷器に寄せて結び著くるなり。拷器の様も、寄
する作法も、今は辨へ知れる人無しとぞ。

【譯】 犯罪者を管で打つ時には、拷器と云ものへその罪人をくツつけてそれに縛りつけて打
つのである。それが昔の制であつた。今はこの拷器の形も、罪人をそれに著ける仕方も、誰
も知つて居る人が無いさうだ。

第二百五段

第二百四段—第二百五段

「大師勸請の起請文」賀縁阿闍梨と云者何か意趣ありしにや、慈惠僧正を濫行肉食の人と言ひふらしたるを、僧正聞きて、起請文を書きて三塔中に披露せり。その文を云なり、大師とは慈惠大師と諡する故云。

勸請とは神佛を呼ぶ意起請文とは、もと事を發起して天子に請ふと云義なりしが、後には請の義、神佛に神罰佛罰を請ふこととなれり「慈惠僧正」法號良源、康保三年天台の座主となる、天元四年大僧正となる、永觀三年正月三日寂す七十四、諡して慈惠大師と云。「法曹」法律の役人。「入物」水火の入れ物

比叡山に、大師勸請の起請文といふ事は、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふ事、法曹にはその沙汰無し。古の聖代、すべて起請文につきて行はる、政は無きを、近代この事流布したるなり。又法令には、水火に穢を立てず、入物には穢あるべし。

【譯】比叡山に、「大師勸請の起請文」と云事があるが、これは慈惠僧正が始めて書かれたものである。起請文といふ事は、法官の側にこれを使つた事は昔は無い。古い聖代には全く起請文によつて、民を信ぜしめて、政を行ふと云ふことは無かつたのに、近代になつては、この事をよく遣るやうになつた。それから、これは別のことだが、法令の定めでは、水や火に穢を負はせることは無い。穢ある家でも、その家の中の水や火は清淨のものとして取扱つてある。たゞ水火の入物だけに穢があると云ふことにしてある。

【評】「大師勸請の起請文といふ」とは慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり」と書いてあるのを見ると、こゝに「大師勸請の起請文」と云のは、慈惠一箇の雪冤の起請文のみを指したのでは無いらしく思はれる。天台座主に坐るものは必ず起請文を書くこと云例になつて居たのらしい。その初めは慈惠と考證したのでらしい。諸註は唯雪冤の事だけに云つて居るが、それでは本當に文語が通ぜぬ。しばらく私説としてこゝに書いて置く。

慈惠の起請文の事は、古今著聞集卷十木に出て居る。曰く、「賀縁阿闍梨と聞えし人、何事の意趣かありけん、慈惠僧正を濫行肉食の人たるよし、不實利口を申したりけるを、僧正か

へり聞き給ひて憤りて、起請文を書きて三塔に披露せられけり。其詞に云。

若謂令破戒無慙之僧住持天台座主者、恐貽狐疑於先賢、方致狼藉於後輩、因茲今對三寶披陳此事。

持律の人にそら言を申付けたる報として狂ひありきけるとぞ。起請のおこりこれなり」とある。

斯う云文であるから、慈惠ならぬ後の座主も、このやうな起請文を書くことになつたのであらう。

起請文風のもので現に傳はつて居る最も古いのは、聖武天皇の天平感寶元年五月廿日の大安寺施入の勅書であらう。願文の性あるものでもとより後世の起請文とは違ふが、形式が同じである。誓詞と云意味の起請文もすでにこの奈良朝にあつたかも知れぬとは學者の定説である。慈惠の起請文でも、後世の誓約状とは全く性質が違つて居る。

貞永年中に、北條泰時が五十一條の式目を制定した。其の終りに、「起請、御評定間、理非決斷事、右愚暗之身依了見之不及、若旨趣相違事、更非心之所曲、其外或爲人之方人、乍知道理之旨、稱申無理之由、又爲非據事、號有證跡、爲不顯人之短、乍令知仔細、付善惡不申者、意與事相違、後日訛謬出來歟、凡評定之間、於理非者、不可有親疎、不可有好惡、唯道理之所推、心中之存知、不憚傍輩、不恐權門、可出詞也、御成敗事切之條々、縱雖不違道理、一同之憲法也、誤雖被行非據、一同之越度也、自今以後、相向訴人并其緣者、自身雖存道理、傍輩之中以其人說致違亂之由、有其聞者

已非一味之義、殆貽諸人之嘲者歟、兼又依無道理、評定之庭被寄置之輩、越訴之時、評定衆之中、被書三與一行者、自餘之計、皆無道之由、獨似被存之者歟、條々仔細如此、若雖爲一事、存曲折令違者、梵天帝釋、四大天王、總日本國中六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所構現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬、神罰、冥罰、各可罷蒙者也、仍起請如件、貞永元年七月十日」とあつて、執權以下の連署がある。この頃から、兼好の時代へかけて、法令を布く時に訖度こんな風に起請文が附いたものと見える。いゝるんな神様を引張り出して、やつと民の信頼を得ると云形である。これを兼好が不快に思つて、「古の聖代云々」と云つたのである。この考證は唯知識上の考證では無いのである。それから入物には穢を認めても、水火には穢を立てぬ、と云古い法令を、自然になつたものと兼好が讚嘆して居るのである。

第二百六段

「德大寺右大臣殿」藤原公孝のことならむと云乾元嘉元の間太政大臣たり。後德大寺と號す、嘉元三年七月薨す、こゝに云は公孝、右大臣たりし時のことなるべし。
「中門」外門と寢殿との間に設けたる門。

德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて、使廳の評定行はれける程に、官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入りて、大理の座の濱床の上にのぼりて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師の許へ遣はすべきよし、各申しけるを、父の相國聞き給ひて、牛

「使廳」檢非違使の役所。
「評定」訴訟を聞き判定すること。
「章兼」傳々ばらす。
「はなれて」繋ぎを逸して。
「大理」檢非違使別當を唐風にいへるなり。
「濱床」貴人の座に設く三尺四方、高さ一尺ばかりの臺を四つ合はせて、疊を敷き四隅に柱を立て、帳を垂れたるもの。
「にれうちかみて」牛羊等の反芻するを「にれがむ」とも云、こゝはそれを名詞と動詞とに分ちていへり、にれは粘りたる物の義。
「陰陽師」もとへ、トひにやらむとするなり。
「父の相國」太政大臣藤原實基のこと。
「庭弱の官人」庭とはいやしき事、庭弱の官人とはさして、高官にもあらぬ、かよわき官

に分別無し。足あれば何處へか上らざらむ。庭弱の官人、たまたま、出仕の微牛を、取らるべきやう無し」とて、牛をば主に返して、臥したりける疊をば更へられにけり。敢て凶事無かりけるとなむ。怪しみをを見て怪しまざる時は、怪しみ却りて破る」と云へり。

【譯】德大寺右大臣殿が、檢非違使の別當をして居られた時、使廳の中門のところて裁判を行はれた其折しも、この廳の役人の章兼と云者の車に著けた牛が、どうしてか繋ぎを切つて奔逸し、役所の中へ入り込んで、恰度檢非違使別當の席にしてある濱床の上へのぼつて、そこで悠々と反芻しながら足を曲げて臥した。これはどうも非常な怪事である、大凶の前兆であらう、と云ので、この牛を陰陽師の所へ連れてつて一つトつて貰ふがよい、との輿論であつたが、この事を右大臣の父の太政大臣實基公がお聞きになつて、牛に何の分別があるものか。どこへ上つてゐるなどと云ことは牛は知らない。足があるから、どんな處へでも上るわけだ。微祿の官人が、出仕用の牛を、偶然なことで取上げられると云道理は無いことだと仰しやつて、其御言葉ゆゑに、牛は持主に直ぐに返し、そして牛のれた濱床の疊を、取りかへられて、それだけで済ました。少しも凶事は無かつたさうだ。怪しい事を見ても、それを怪しいと思はないと、怪の方が却て人間の力に負けて、破壊されて了ふと云言もある。

【評】前段に、法令に、水火には穢を立てない、と云この要領を得た點を紹介して、俗人はくだらぬ所に目を引かれて、本當の道知らないで居る、と云意を見せたのに、隨伴して、

人と云ふこと、章兼を指す。
 「たま〜出仕の微牛」偶然。この語、下の取らるべきにかゝる。微牛はなんでも無い牛と云ふこと。
 「取らるべきやうなし」公に取上げられるわけが無い、たとひ一時でも「怪しみな〜」小止観の覺知魔事第八に「凡見一切外諸惡魔境」
 「知虚誑不憂不怖亦不取不捨妄計分別息心寂然彼自當滅」とあり、これなどの意を云ひたるならむ千金方の黄帝雜忌呪に「見怪不怪其怪自壞」とありとの註あれど、千金方には黄帝雜忌呪と云項は無し、黄帝雜忌法と云あり、そこには斯る語無し、
 たゞ「視神廟見龍蛇勿與心驚狂亦勿注思瞻視忽見鬼怪變異之物即強抑之勿怪」とあり、意は稍似たり。

第二百七段

この段の事を説いて來たのである。牛が大理の座に臥した、どうも實に怪異極まると俗衆の目には見えるが、わかつた人の目から見ると、何でも無いことだ。たゞ牛が偶然家の中へはひり込んで、柔い茵の臥心地よきに、そこで休憩してみたゞけの話だ。各申しけるを」とあつて右大臣の意見が書いてないが、この書き方で見ると、勿論右大臣は怪異に驚き、これを苦にした一人であつた。だから父の相國が異見を提供したのである。この相國實基公は物のわかつた迷信などしない人であるは無論であるが、更に人々をよくあはれむ同情の心があるのが嬉しい。「庇弱の官人たま〜出仕の微牛を取らるべきやう無し」と云言に、温い同情が溢れて居る。陰陽師の言次第では牛を殺せと云かも知れず、それだけでも損害だが、牛の主までも何とか處置せよとでも云ことになるかも知れなかつたのである。章兼は相國に救はれたと云つて可い。にれうちかみて」と云ことを特に入れた所が、兼好の腕である。實際さうであつたかどうか知らぬが、多分これは兼好の想像であらう。濱床の上に牛が悠然として臥すと云光景を、兼好は思つてみて、それを可笑しく思ひ、ハッキリ其の様を寫す爲にこの語を入れたのである。牛がムニヤ〜と反芻しながら臥した、と云ので、まことに其の様が鮮明に見えるのである。

「龜山殿」五十一段に註せり。

「地を引かれけるに」地を平らにひきならすを云。

「塚」土を盛上げたる墓なり、さうなく左右無くなり、どうも斯うも無く、なり、むやみに、と云こと。

「この大臣」實基公。

「鬼神は邪無し」鬼神に横道無し、或は、神明に横道無し、と云古き諺あり、それを云へるなるべし、この通りの語の出所は見當られぬど儒書のいづこにも神は邪を爲さざるものとの意は多くあり、鬼神はたゞ神と云ことなり、悪神の意にあらず。「咎むべからず」神が我を。

龜山殿建てられむとて、地を引かれけるに、大きな蛇、數も知らず凝集りたる塚ありけり。此所の神なりと云ひて、事のよしを申しければ、

「いかゞあるべき」と勅問ありけるに、「古くよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘棄てられ難し」と、皆人申されけるに、この大臣一人、王土に居らむ蟲、皇居を立てられむに、何の祟をか爲すべき。鬼神は邪無し。咎むべからず。たゞ皆掘棄つべし」と申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井川に流してけり。更に祟無かりけり。

【譯】 龜山殿をお建てになると云ので、先づ其の建てるべき地を平らになされたところが、その地内に塚があつて、そこに、大きな蛇が數の知れぬ程一緒に固つて居た。土地の者に訊くと、この塚はこゝの神だとのこと故、建築係からこの事柄を上申上げたので、どうしたものが」との勅問があつた。すると皆々「古くからその地を占領して居る神なら、さう無暗に掘棄てなどはせられぬ。そんなことをすると祟があらう」と云意味の奉答をした。然るに、この實基公一人は、「この日本の國に居るところの蟲が、皇居御建築に對して、何の祟をしやうや。神と云ものは邪なことは爲ぬものです。御用ゆゑに掘棄てたとて、なんの咎めませうや。かまはないドシドシ掘棄てるが宜しい」と申されたので、其言にしたがひ、塚を崩して蛇は大井川へ流して了つた。ちつとも祟は無かつた。

第二百七段

【評】 更に實基公の、迷信を排してドシ／＼快く斷行した例を挙げたのである。五十一段には龜山殿の水車のことがあり、こゝには又蛇塚のことがある。

書方が不分明であるが、塚の上に蛇が集つて居たのでは無く、巳にその塚を崩しかゝると中に蛇が固つて居たので、これほと云ことになつたのであらう。

蛇を殺さずして大井川へ流したと云ところに、やはり古代人の心が見えて居る。怖れると云つて笑ふべきことでは無く、是の心自らの博愛になつてゐるのである。

第二百八段

「上下よりたすきにちがへて……」



この如く、ゆるるを云。

「華嚴院の弘舜僧正」傳

「此頃やう」近來の風。「うるはしくは」正しく

經文などの紐を結ふに、上下より、たすきに違へて、二筋の中より、わなの頭を、横様に引き出だす事は、常の事なり。さやうに爲たるをば、華嚴院弘舜僧正、解きて直させけり。「これは此頃やうの事なり。いと惡し。うるはしくは、唯くる／＼と巻きて、上より下へわなの先を、挿むべし」と申されけり。ふるき人にて、斯様の事知れる人になむ侍りける。

【譯】 經文などの紐を結ぶに、上下から繩がたに、ぶつちがひに巻いて、その二筋の中から、

形よきを云、「唯くる／＼と……」の如くするを云。



わなの頭を横の方へ引き出しておく事は、普通誰もする結びやうである。ところが華嚴院弘舜僧正が、さう云やうに結んであるのを見て、ほどいて結び直させた。その時僧正は「こんな風に結ぶのは近來の風である。甚だよくない。正しくは、唯くる／＼と巻いて、上から下へ、わなの先をばさむのだ」と云はれた。この僧正は老人で、こんな事を知つてゐる人でありました。

【評】 例の故實であるが、前の櫛形の場合のやうに、とかく後世にはつまらぬ細工を加へる、昔風は唯スイとしてゐる。こんな巻物の結び方にも、それが現はれて居る。兼好はこのスイの嬉しさも交つて、これを記したものであらう。神社の鳥居の如きでも、正しいのは、大廟のやうに、何の細工も無く、眞直である。

文段抄の圖に、弘舜の云つた結び方が、上欄に描いた形の外に、もう一つ、一説にかやうならむか」として。



このやうな形に出て居る。これでは、巻いた紐の全體の下へわなをくゞらせるのであるが、この説はよくない。

第二百九段

第二百八段——第二百九段

「人の田」他人の所有の田。
 「論ずる」わがものなりとて諍論する。
 「訴」訴訟。
 「いかに斯くは」この下に、刈り給ふ、の語を省けり。
 「その所」論ずる田。
 「ひが事」間違つた事。
 「まかる」行く、と云こと。こゝにあふやうに云には。
 「出かけた」と云が恰もあたる。
 「をかしかりけり」趣味あり、の意と、可笑の意と一つになりたる「をかし」なり。面白し、とまづ解きて可なり。

人の田を論ずるもの、訴に負けて嫉に、その田を刈りて取れとて、人を遣はしけるに、先づ道すがらの田をさへ、刈りもて行くを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかに斯くは」と云ひければ、刈る者ども、「その所とても、刈るべき理り無ければ、僻事せむとて、罷る者なれば何處をか刈らざらむ」とぞ云ひける。理いとをかしかりけり。

【譯】人の所有の田地を、それは我が所有すべきものだと言論した者が、訴訟で負けになつて無念さに、人に命じて、その田の作物を刈り取つて来いと云つて、その田へ派出した。すると其の命ぜられた者等が、先づ其の田へ行く途中の田まで、ズン／＼刈りながら進む。それで、それを見た人が、「この田は、あなたの方で訴訟なされた所ぢやありませんよ。どうしてこんなに刈るので」と云つたら、刈る者等答へて、「その訴訟の田地だつても、そこを刈つてよいと云道理が無いのです。つまり我々は、無茶苦茶な事をする爲に、出かけて来た人間なのです。だから、無茶苦茶にどこの田でも刈り取るので御座る」と云つた。この言の理窟が實に面白かつた。

【評】こんな話が誰が云始めたとも無く當時云はれて居たのか。それなら珍しげに書き立てもしまい。兼好が作つたのか。どうもさうとも見えぬ。どうもこれは實際あつた事のやうに思はれる。さうすれば、この刈る者と云奴は實に尊敬すべき達人と見られる。が、さう思込

んで了ふはちと愚直になりはしまいか。私は、この刈る者は、主人の無理な言付に、稍ヤキ氣味で、どこの田でもよいわ、へいこの通り刈つて参りました、と物を見せればよい、と云氣になつて、道々よその田を刈り、車一杯に積んだら、遠い所へは行かないで、早く歸るつもりであつたのであらう。それを咎められて、ヤケ腹を咄つた。その言を、兼好が整理して、大きな意味をそこに發見したのでは無からうか。それはこんな意味をも含んで居るのである。人は、この論じた田を刈る事は、論ぜぬ田を刈る事よりは、合理的に考へる。この考が誤である。達觀すれば、どちらも間違つた行なのである。たとへば、人に恨を含んで其人の家に放火すると云事は、無關係の家に放火する事と同じく罪である。恨むと云私情が決してそこに理由として存在してはならぬのだ。斯う云意味にもなるのである。讀めば讀む程味のある話である。

第二百十段

「よぶこ鳥」深山に住み形ハイダカに似て大いさ鳩の如し、全身黒文、灰黒相雜ばり目の邊薄赤く、指前後各二、春鳴く、聲、物を呼ぶが如し、郭公鳥とも呼

よぶこ鳥は春のものなりとばかり云ひて、如何なる鳥とも定かに記せるもの無し。或眞言書のうちに、よぶこ鳥鳴く時、招魂の法を行ふ次第あり。これは鶉なり。萬葉集の長歌に、「霞立つ長き春日の」など續けたり。鶉鳥も呼子鳥の言様に通ひて聞ゆ。

第二百十段

ぶ。
「招魂の法」魂を呼びかへす法。此は今招魂祭の招魂の如く、死人の魂を招く意にはあらで生きたる人の魂が飛び出でたるを招きかへす法なるべし。壽命院抄にある「人魂の飛びたるをまじなひかへす秘法云々」と記せるもこの意らし。

「霞み立つ……」萬葉集

幸二讚岐國安益郡二之

時軍王見山作歌

霞立つ長き春日の暮れにけるわつきも知らず、むら肝の心を痛みぬえこ鳥うら歎げ居れば……

この「ぬえこ鳥」は、うらなげ即ち心中にて歎くと云ことの枕詞に用ひたり、ぬえこ鳥の鳴聲歎くやうなれば云な

【譯】よぶこ鳥は春のものだだけは、誰も知つてゐるが、さてどう云鳥とも判然書いた書物が無い。或眞言宗の書物の中に、呼子鳥の鳴く時に、招魂の法を行ふ其の式が書いてある。この眞言書にあるよぶこ鳥は鶴のことを云つてゐるのである。萬葉集の長歌に、「霞立つ長き春日の云々」とあるところに「ぬえこ鳥」とあるが、「ぬえこ鳥」と「よぶこ鳥」と、同じ春鳴くもので様子が似てゐるやうに思はれる。

【評】よぶこ鳥はどう云鳥かわからぬと云ことに古來なつて居て、所謂古今集三鳥の傳の隨一である。しかし古今を見ても後撰を見ても、春鳴く鳥と云ことが解る。しかしどんな鳥ともわからぬと云ことになつて居た。或説では猿のことだとも云つて居た。むつかしや猿にしておけ呼子鳥」と疳癪をおこした俳人もあつた。眞淵・守部など云人の考證の結果、今日では上欄のやうにまづ一定してゐる。

こゝに或眞言書と云つたのは、どんな本か知る由も無いが、よぶこ鳥の鳴く時に招魂の法を行ふわけは、夜空を鳴き飛ぶ鳥、しかも物を呼ぶやうな聲で鳴く鳥である故に、自ら人の心に陰森の感を起させ、あれは人の魂を呼ぶ鳥だと云ことになり、たとへば貴人などでは、自分の魂がよぶこ鳥に呼ばれて出たかも知れぬ故とて、其魂を呼びかへす法を僧に行はしめたのであらう。人魂が飛ぶと、誰か死ぬ、と云俗説も、必ずしも死んだ人の魂が飛ぶので無く、生きてゐる人の魂が飛び、しばらく其人は魂のぬけがらになつて生きて居り、やがて死ぬと云事を想像したのである。そして人魂の飛ぶ時に呪の歌を唱へて衣のしたがへの袂を結ぶと云のも、何人も人魂が祟りでもするを防ぐと云のでは無く、自分の魂も逃げぬやうと、結び

り。

「次第」法式。

「鶴」つぐみの大いなる一種にて、鬼つぐみと云ものなり。山中に在りと云。

夜鳴く鳥なるべし。

「ことさま」趣。

「通ひて」似通ひて。

〔補〕飯田季治氏著「和歌秘傳鈔」(大正十一年刊)に鶴は呼子鳥の本名なる事詳細なる考證あり就て見るべし。

とめる心である。こゝの招魂の法もこれらと同じ心である。

「これは鶴なり」と書いた所だけ、判然と書いてある。これは確信があつたものと見える。たとへば其の書に、こゝに呼子鳥と云のは鶴のことだと書いてあつたのか、或は兼好當時の眞言宗で、現に鶴のなく時に招魂の法を修する例であつた爲に、斯う断言したかも知れない。とにかく兼好は、さう輕々しく物を断定する人では無いのである。

萬葉集の「ぬえこ鳥」を持つて來たのは、やはり根本的で、痛快である。こゝの「ことさま」と云のを一寸見ると「言様」で、語形と云ことに思はれるが、さうで無い。春の日に鳴くと書いてあるから、其の様子が似てゐると云ので、「事様」なのである。

この考證は一般に評判悪く、萬葉集古義の品物解にも、これは駄目だと云つてゐる。しかしどう駄目なのだと云事は云つてない。唯「兼好が頃はやく知りたる人の無くなりしこと知るべし。奴要鳥ぬえどりと呼兒鳥よこどりと同物なるべきよし無し」とのみ云つてゐる。

上欄の「ぬえ」の解は言海の説に従つたのであるが、どうも鶴も夜鳴き、呼子鳥も夜鳴き、ともに山中に居る、と云など、萬更兼好がこはく主張してゐる同一説も棄てたものでは無いやうな氣がする。「ぬえこ鳥」「よぶこ鳥」と云、語形も何と無く似て居る。しかも眞言の法では現に同一物に見てゐると云ならば、もう少し調べたら、同一説が成立つかも知れない。

第二百十一段

萬の事頼むべからず。愚なる人は、深く物を頼む故に、恨み怒ることあり。勢ありとて頼むべからず、強き者先づ滅ぶ。財多しとて頼むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて頼むべからず、孔子も時に合はず。徳ありとて頼むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず、誅を受くる事速かなり。奴隨へりとして頼むべからず、背き走ることあり。人の志をも頼むべからず、必ず變ず。約をも頼むべからず、信ある事少し。身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は怨みず。左右廣ければさはらず、前後遠ければ塞らず、狭き時はひしげ碎く。心を用ふる事少しきにして嚴しき時は、物に逆ひ争ひ破る。ゆるくして柔かなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地は限る所無し。人の性なんぞ異ならむ。寛大にして極まらざる時は、喜怒これにさはらずして、物の爲にわづらはず。

【譯】どんな事でも頼みにすべきで無い。愚な人は、一所懸命に物を信頼して、これに頼つてれば大丈夫など思ふものだから、その絶つた物に逃げられでもすると、恨んだり怒つたり

「心を用ふる事少しきにして」小範圍に心を働して居るを云。

「人は天地の靈」周書、泰誓に「人萬物之靈」、萬物のうちの靈で、人の外の他は靈とまで至つてないと云想、天地と云も萬物と云も同じ意なり。

「喜怒これに」この

れは人の性、人の心。

するのだ。自分が威勢があつても、その威勢を頼みにしてはならぬ。なぜなら、強い者が弱い者よりも先きへ滅びるものだから。財寶が多くても、その財寶を頼みにしてはならぬ。なぜなら財寶はいくら多くても、一寸の間に無くなつてしまひ易いものだから。自分が智才があると云つて、それを頼みにしてはならぬ。なぜなら孔子のやうな大智才の人でも、時運に合はずして不遇であつたや無いか。自分は徳を備へて居ると云つてもそれを頼みにしてはならぬ。なぜなら顔回のやうな高德の人でも、不幸な一生を送つたでは無いか。自分は主君の寵を得て居ると云つてそれを頼みにしてはならぬ。寵されてると思ふまに、忽ちにして讒者が現はれたりなどして主君の氣が變つて、忽ち誅せられることがある。自分はシツカリした、或は大勢の従者を従へてゐる、これが自分を護つて居て呉れる、大丈夫などと思つて居てはいけない。従者と云者は、主人に背いて走り去ることがあるものだ。あの人は自分に厚意を有つて、呉れる、どんな場合でも、あの人は自分を助けて呉れると、親船に乗つた氣で居ると大間違。人の志と云ものは不易のものでは無うて、屹度變るものなのだ。約束をしてあるからとて頼みにはならぬ、人が約束を履行して呉れると云ことは滅多に無いことだ。自分も頼みにせず、人も頼みにしないで居れば、善い目にあつた時は喜び、悪い目にあつた時は怨みに思はぬ。自分の身の左右が廣いと、自分の身は少しも物に邪魔されず、自由だ。前後が遠くひろいと、行き詰ることが無い。その反對に前後左右が狭いとどうなる、自分の身はひしやけ碎けるより外無いぢやないか。心を狭い範圍に働して、どうしてもこれは斯うならなくてはならぬ、あればあアで無くてはならぬ、と嚴格的な心になつてると、外物にさから

ひ、争ひ、遂に自分は破壊される。心がゆるくて柔な時は、毛一筋も自分は損せられないものだ。人間と云ものは天地の間の核心である、靈である、天地の氣の粹ちつつた所が則ち人間なのだ。つまり人間は天地と同じ質のものなのだ。さてその天地と云ものは無限のものだ、區別も際限も無い。だからそれと同じ人間の性は、やはり無限であるのだ。その自然のままにして居ればよいのだ。即ち心を寛大にもち、行詰らぬ際限の無い心になつてると、喜や怒など云ものが、この心にさばらない、即ちさう云情に心が動かされない。そして、外物の爲に煩らはされる事が無い。

【評】「よろづの事たのむべからず」、斯う言ひ切るまでには、頼んでは怨み、頼んでは怒り、さう云ことを幾度と無く経験した後には、始めて出来ることなのである。「あの人は頼むべからず」、「この事は頼むべからず」、さう云ことは十數歳の時にももう感じて居ることである。さうして「あの人」、「この事」と限定しないで「萬の事」と云までには、非常な年月がかかることである。こゝで兼好の斯う云つたのは、決して所謂「あきらめ」では無いのである。後の「是なる時は喜び、非なる時は恨みす云々」と云所を見ても、「あきらめ」で無く、安住、歡住であることが明らかである。

「こはきもの先づほろぶ」、強者には必ず敵が早く顯はれる。強の度の高いほど、敵の強さもそれに釣合つた高い強さの奴が顯れるのである。衝突する、いきほひ、亡びると云運が來易いのである。いたづらに奇を弄した語では無い、實際の語である。

「才ありとて」、「この「才」は、小才のきくなど云才では無く、よい意味の「才」である。「徳あ

り」とて頼むべからず、又斯う云つて居る。士君子連が、これだけには頼むべき價値を認めて居るものに對しても、嚴として「頼むべからず」と宣告して居る。

「左右ひろければ……」、この語の大いなることよ。この大自在の界に至るまでには、どうしても大束縛大煩悶を経なくてはならぬ。兼好は矛盾に安住した人だ。つまり矛盾を體得した人だ。甲か非甲かどちらかに何時までもかじり附いてると云界から足を洗つた人だ。左右前後無際限の世界に入つた人である。

かつて私が、「どんな場合でも人は十錢の代の品物を買ふのには、十錢を出さればならぬ」と云つたことがあつた。東亞堂主人も同意で、「とかく人は、外様ほかさまでありませぬから」と云はれたがるが、あれはいけません」と云つた。どんな間柄の人からも、あかの他人からも同じ待遇を受けるに甘んじ、楽しむべきである。これはこの段の意に合ふと思ふ。

第二百十二段

秋の月は、限りなくめでたきものなり。いつとて月も斯くこそあれとて、思ひ分かざらむ人は、無下に心憂こころかるべき事なり。

【譯】秋の月は非常によいものである。月は秋が殊に美しいことに氣づかず、いつだつて月はこの通りだと云つて、その他季と秋との月の區別がわからない人は、極めて駄目なこつた。

「いつとて月も」春夏冬で「斯くこそあれ」この通りだ。「思ひ分かざらむ」區別がわからぬを云。

第二百十二段

【評】 簡ではあるが「かぎりなくめでたきものなり」と云工合、まことに秋月に對しての讚嘆の聲である。成程よく、月はいつでもこんなもの、と云人もあり、云はずとも思つてる人もあり、現に斯く云私も、どうして秋に限つて月を賞するのか、と思つて居た。偶然にこんな習慣が出来たのだらう位に思つて居た。月は秋がいふ、この事が本當にわかるまでも年月を要することである。習慣、因襲と云事は、決して無意味なものでは無いのだ。

第二百十三段

「御前」天子の
「火爐」火鉢のこと。
「心得て」注意して、
「八幡」石清水八幡ならむ。
「御幸」上皇法皇のみゆき。但しいつの折のとは知れ難し。
「淨衣」白き狩衣多く神事の折に著る。

御前の火爐に火をおく時は、火箸して挟む事無し。土器より直ちに移すべし。されば、轉び落ちぬやうに、心得て炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣を著て、手にて炭をさゝれば、或有職の人、「白き物を著たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず」と申されけり。
【譯】 御前の火鉢に火をいれる時は、火箸ではさんで入れると云事はしない。火を盛つて運ぶ土器からすぐに火鉢へ移すものである。だから、その時に轉び落ちないやうに、土器に炭を積む積みやうを注意しておくべきである。八幡御幸の時に、御供の人が白狩衣を著て、御前へ火を奉るに手で炭をつがれたら、或故實家が「白い物を着た日は、火箸を使つてもよい」と申された。

【評】 火箸を用ひぬ、と云事だけ知つて、いかなる場合でもその一方法で通ず、と云のは愚である。故實は自然なもので、チヤンと白衣の時には火箸を使つてよいと云ことになつてゐる、面白いものだ。この感嘆の意も含まつて居り、又一局部の知識は駄目なものと云警告も含まれて居るのである。

「御前」はもとより天皇の御前であるけれども、従つて上皇法皇の御前も同様なわけである。だから、こゝらの「御前」は現在の天皇及び嘗て天皇たりし方と云やうに取るがあたり。どうして火箸を使はないのか、このわけの書いてないのは遺憾である。
「心得て」は、上の方へは續かず、下の「炭をつむべきなり」へ續くのである。

第二百十四段

想夫戀といふ樂は、女、男を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晋の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も、廻鶻なり。廻鶻國とて、夷の強き國あり。その夷、漢に伏して、後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

【譯】 想夫戀と云樂は、女が男を戀ふるからの名では無い。もとは相府蓮と云字である。同

「王儉」字は仲實、十八歳にして秘書郎となる。齊に仕へて吏部を領し又國子祭酒を兼ね、大に儒術を鼓吹す、三十八にして卒す、文憲と諡す、著多し。
「大臣として」大臣になつて居て。
「廻鶻」西域の部落薛延陀の北、居延、裝陵水

第二百十三段—第二百十四段

附近にありしなり、今のLigur族の祖たり。

音字通じて今のやうに書くやうになつたのである。晋の王儉が、大臣になつて、自分の家に蓮を植ゑて愛した時、それを歌つた樂である。これから大臣のことを蓮府といふ。廻忽と云樂も、もと廻鶴と書くので、廻鶴國と云つて夷の強い國があつた。その夷が中國へ歸服し、後に中國に来て、自國の樂を奏した、その樂なのである。

【評】「相府蓮」とは大臣の邸の蓮と云意味であらう。樂曲考と云寫本にも、想夫戀と書かず、相府蓮と書いてある。それに「此曲はもろこしより渡れり。平調のもの。延びたる八かこのものなり。拍子十。一返の時末四句三度拍子に加ふ。唯拍子もあり。また出世吹の説もあり。想夫戀と書くは音の通へるまゝに書けるなり」とある。

「廻忽も廻鶴なり」とあるが、夷國の名は當字で音をあらはすので、何と書いてよいと云ことに気がつかなかつたのか。樂曲考に「此曲はもろこしより渡りけるにや。但し廻忽とは夷國の名なれば、其國の樂なるにや。また輪臺青海などの如く、其國風をうつしてもろこしにて作れるにや。平調の物。早き八かこのものなり。拍子十二。但し終りの拍子よりかへす時六かこなり。是れ常の説なれど、昔は唯拍子の時のみ如此して、樂拍子には末をのべて全く八かこにしけり。又末をば延べずして、はじめを延べて八かこにあつるを祕説ともいへり。いかさまにも、六拍子のまされるは本説にはあらず。且つ打ちまかせては樂拍子なり。唯拍子は今絶えにき」とある。

斯く書いた後十八史略の註を見ると、廻鶴はもと紇と書いて居たが、唐の德宗の時に、請

うて鶴の字に改めて費つた。とある。鶴は鷹の一種で、タマガカである。紇と云のは太い絲である、絲では景氣が悪いからと云ので、精悍なクワイヨツ人が鶴の字を選んだのであらう。すると廻鶴と云定字を用ひたことになるから、「廻忽は廻鶴なり」と兼好が書いたのも、そんなには咎められなくなる。序だがこんな事が近頃になつてもある、ロシアはもと日本で魯國と書き來つた。それが、たしか明治二十三年頃からが、露國と書くやうになつた。これはロシアからの註文で、魯の字は魯鈍の意があつて面白くない、と云ことを云ひ來つたからだと聞いた。魯は孔子の生國の名で光榮ある文字だと云ふことに氣が附かなかつたと見える。

第二百十五段

「平宣時朝臣」大佛陸兵守宣時のこと。
「最明寺入道」北條時頼「宵の間」宵のうち。宵と云は夜に入りて。更けざるあひだ、を云。夜なか、曉に對す。「直垂」方領、無紋、袖括あり、胸紐、菊綴皆組緒、の衣。禮服なり。「なえたる」着古してア

平宣時朝臣、老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ばる、事ありしに、「やがて」と申しながら、直垂の無くて、とかくせし程に、又使來りて、「直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く」とありしかば、萎えたる直垂、うちくの儘にて、まかりしに、銚子に土器取り添へて、もて出でて、「この酒を一人たうべむが、さうぐしければ申しつるなり。下物こそ無けれ。人は静まりぬらむ。さりぬべき物やあ

第二百十五段

「ニヤ／＼になつた。
 「うち／＼の儘」ふだんの儘。
 「さう／＼し／＼さみし、無趣味。
 「静まりぬらむ」寝たらう。
 「さりぬべき」然るべき
 「紙燭」松の細き材の一尺五寸ばかりのもの。端を焦し、油を塗りて火をとます。紙縷に油をひたしともすもあり紙燭又脂燭と書く。
 「さして」ともしてと云こと。
 「くま／＼」隅々。
 「つきたる」この「つく」は「肴を皿につける」など云「つく」なり。盛ると云ことなり。つきたるはつけてある、の意。「數獻」獻は人に盃をさすこと。

ると、何處までも求め給へ」とありしかば、紙燭さして、くま／＼を求めし程に、臺所の棚に、小土器に、味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得て候ふ」と申し、かば、「事足りなむ」とて、快く數獻に及びて、興に入られ侍りき。その代には斯くこそ侍りしか」と申されき。

【譯】平宣時朝臣が老後に、かう云昔話をされた、曰く、「最明寺入道が、或夜、宵に私に來いとこの使が來たことがあつたが、ハイイぢきに伺ひます」と返事しながら、入道殿方へ著て行かれるほどの直垂が無いので、どこかで借りようとか、何とか、あれこれして、時を經たが、そのうちに、再度使が來て、「直垂でも御座いませぬのですか。夜のことですから、どんな風でもかまひません。早く御いで下され」とのことであつたから、グニヤ／＼になつた直垂著て、たゞ不斷のまゝの姿で、參つたら、入道は銚子に土器を共に持つて出て、「この酒を一人で飲むのが、無趣味だから、來て下さいと申したのです。さて、酒の下物が無い。家の者は皆もう寝たらう。あなた一つ、下物になりさうな物が無いか、どこまでも尋ねて探して來て下され」と云はれたので、私は紙燭つけて、家の隅々を探して歩いたうちに、臺所の棚に、小さな土器に味噌が少しつけてあるのがあつた。それを見つけて、「これを尋ねあてました」と云つたれば、入道は「これで十分だらう」と云つて、愉快に何回も互に盃をさして、興に入られました。その時代はこんな質素でありました」と申された。

【評】天下の執權時頼が斯くの如く質素であつた、と云ことが嬉しくて書いたのである。

時頼の父が時氏、その父が泰時、その父が義時である。義時の弟に時房あり、時房の子に朝直あり、朝直の子がこの宣時である、さう云縁者の宣時が、直垂が無くてマゴ／＼する、と云のも嬉しい代である。それを察して「直垂などの候らはぬにや」と圖星をさして來たのは、さすがに時頼である。そして待ちかねた心持も察せられる。銚子に土器とり添へてもて出でて」と云書き方で見ると、自分に持つて出た様である。少しの味噌で興に入る、この心境は實に高く尊いでは無いか。この事に就て唯儉約の方面のみに注意するのは足らぬ。人は静まりぬらむ」と云つて、別に人々を起しもせず、又お客様にさかなを探させる、など云所に、高い酒脱があるのを見通してはならぬ。
 「少しつきたる」と云語を、「少しクツツイてる」と云意に取るのは中らない。「つく」は上欄の解の通りである。
 クツツイてる」と云ほどの少量よりはもつと分量があつたのである。物を讀むのは早呑込をしてはならぬ。
 時頼は禪を修して居た。彼が臨終は尊いものであつた。彼はもはや死ぬと自覺した時、衲衣を著し、細床に上り、坐して「業鏡高懸、三十七年、一槌打碎、大道坦然」との偈を唱へて終つた。彼は非凡の人であつた。よく禪を體得し、日常生活も天下の政治も、これを活用して居たのである。

第二百十六段

「鶴岡」鎌倉鶴岡の八幡宮なり、現存。

「社参」参拜。

「足利左馬入道」足利義氏なり、北條泰時の女を娶る、武藏陸奥守を歴て左馬頭に至り正四位下に進む、仁治中髪を削りて名を正義と更む建長六年卒す年六十六

「うちあはび」鮑の肉を長く引きのばして乾したるもの。

「かいもちひ」搔煉の餅と云義搗きたる餅にあらず、今のオハギやうのものなり。

「隆辨僧正」當時鶴岡別當たりし人、美濃國岩瀧の郷を拜領し、僧正に任ぜらる。

「足利の染物」足利の産物なる染物、染めたる布を云。

「さて」さうして、即ち

宴果て、よからと云こと。
「心もなく候」氣にかゝります。(貰へるかどうか)
「調ぜさせて」仕立てさせて。
「後に」時頼歸られて後に。

「大福長者」大金持。
「徳をつくべき」この

「徳」は利益の意、つくは、身につける、即ち得ると云こと。
「つかむ」身につけむと云に同じ。
「人間常住の思ひ」人間は長く生きてゐると云感「住して」その感恩に住み込む、その感恩の

最明寺入道、鶴岡の社参の序に、足利左馬入道の許へ、先づ使を遣はして、立ち入られたりけるに、饗應けられたりけるやう、一獻に打鮑、二獻に鰕、三獻に搔餅、にて止みぬ。その座には、亭主夫婦、隆辨僧正、主人方の人にて座せられけり。さて「毎年賜はる足利の染物、心もとなく候ふ」と申されければ「用意し候ふ」とて、いろいろの染物三十、前にて、女房どもに、小袖に調せさせて、後に遣はされけり。その時、見たる人の、近くまで侍りしが、語り侍りしなり。

【譯】 最明寺入道が、鶴岡へ参拜の序に足利左馬入道のところへ、寄らうとして、使をやつて先觸をさせて、さて訪うた。その時左馬入道の饗應の仕方は、酒を第一杯すゝめる時に肴に打鮑を出し、二杯目には鰕を出し、三杯目にはかい餅ひを出し、それだけで止めた。其の宴の座には、左馬入道夫婦と隆辨僧正とが主人側になつて坐して居た。宴果てた時、最明寺殿が「毎年貰ひまする御國の足利染、今年も貰ひたいが、貰へるかどうか氣にかゝります」と云はれたれば、左馬入道「用意がしてあります」と答へて、いろいろの足利染三十種を、即座に、最明寺殿の前で、召仕の女等をして、小袖に仕立てさせて、殿歸られてから、それを贈られた。その時、見た人で、近頃まで生きて居たのがあつて、話しました話です。

【評】 左馬入道の簡素な、氣味のよい饗應ぶり、先づ嬉しい。さて宴終つて、最明寺が「例

年の足利染をいたゞきたう御座るが」と無遠慮に云。「ハイ只今」とすぐに亭主が持出す。この飾らず氣取らぬ最明寺の言がいかにも氣味がよい。これを時頼の人心收攬法のうまさよ、と評する人があるが、時頼がホリシでこんなことを云つてるのぢや無い。そんな評をする人は、時頼を解しないのだ。
即座に前で縫はせた、とは、その縫ひ方を一つの興として見せたのか、註書にあるやうに、工女に念を入れさせる爲だつたのか、或は汚なきことなどせぬと云ことを見せる爲だつたのか、わからぬが、或はこれ等のいづれもであつたかも知れぬ。

第二百十七段

或大福長者の曰く、「人は萬をさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生ける甲斐無し。富めるのみを人とす。徳をつかむと思はば、須らく先づその心づかひを修行すべし。その心といふは、他の事にあらず。人間常住の思ひに住して、假にも無常を觀することなかれ。是れ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に隨ひて志を遂げむと思はば、百萬の錢

第二百十七段

中に這入つて居て、死と云方を願みぬなり。「用したい事。」「自他につけて、自分の爲の願、人の爲の願。」「所願」かうしたいと云願ひ。「住す」といふこと。(錢が)「もちて」以て。「恥にのぞむ」自分が恥かしい目にあふこと。「宴飲聲色」宴飲は酒宴聲色は美聲美色をめぐること即ち女を樂むを云。

ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止む時無し。財は盡くる期あり。限りある財を持ちて、限り無き願に従ふべからず。所願、心に萌す事あらば、我を滅すべき惡念來れりと、堅く慣み恐れて、小用をも爲すべからず。次に、錢を奴の如くして使ひ用ゐるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神の如く恐れ尊みて、從へ用ゐることなかれ。次に恥にのぞむといふも、怒り怨むる事なかれ。次に、正直にして、約を堅くすべし。この義を守りて利を求めむ人は、富の來たる事、火の乾けるに著き、水の下れるに従ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を爲さざれども心長へに安く樂し」と申しき。

【釋】或大金持曰く、「人間と云ふものは、他の一切をさしおいて、たゞ／＼第一に利を得るべきである。貧乏では生きて居るかひが無い。富んでる人だけが人間と云へるものだ。利を得ようと思つたら、先づその利を得る爲の心のもち方を練習すべきである。その心といふのは外でも無い。人間と云ふものはいつまでも生きて居るもんだ」と云思惑に没頭してゐて、決して／＼人間はいつ死ぬかも知れぬと云惑を起してはならない。是れが第一の注意すべき

ことである。次に、何でも斯うしたいと思ふ望みを遂げてはならない。人間が世にある間、自分の爲或は他人の爲にあつた斯うしたいと云願望が限り無くある。その欲の通りになつて思ふ所を遂げようと思ふと、百萬の錢があつても、その錢はしばらくの間も止まつては居ない。すぐ飛んで行つてしまふ。望みは止まる時が無い。財は無くなる時がある。限りある財を以て、限り無き「願望」の云通りに行くことは出來ぬわけだ。斯うしたいと云願が、心に起つたなら、ソラおれを滅す惡念が來たぞと思つて、堅くつゝしみ恐れて、一寸した願たとへば、障字がばりかへたい位の願も實現させぬやうにして、シツとその惡念の去るを待たなければいかぬ。次に、錢と云ものは奴隸のやうに使ひこくつて宜いものと思つてると、いつまで貧乏もの苦痛を免がれることが出來ない。錢と云ものを君の如く神の如くに恐れ、尊んで、決して錢を自分の意志に従へて、即ち目下のものに見て用ひてはならぬ。次に、どんな恥かしい目にあつても、怒つたり怨んだりしてはいけない。次に、正直にして、約束を堅く履行しなくてはならぬ。これだけの道筋を守つて、その上で儲けようとする人は、思ふまゝに儲かる。さう云人へ「富」が吸ひ著いて來る事は、恰も火が乾いた物に燃え著き、水が低地へ走り去く如くであるのだ。錢が積つて、それが盡きないと、別に酒を飲んだり女を樂しんだりしないで、住宅を飾らないでも、思ふことを爲なくとも、心は永久に安樂である」と申した。そも／＼人は所願を成せむが爲に、財を求む。錢を財とすることは、願をかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ゐざらむは、

「と聞えたり」と聞くことも出来る。
「癰疽」ともに腫物の名。癰とは皮の上薄くして光澤あり大抵肩胛の間頂窩背に發するもの。疽とは、上の皮固く、遅く膿みて筋骨まで腐る。

「究竟」…天台の教に凡夫より成佛までの階級を六段に分けて六即位と稱せり、其の最低のものを理即と云、唯成佛の理をそなふるのみにて一毫の善根功德なきを云、最高のものを究竟即と云、斷惑證眞の位即ち成佛。

全く貧者と同じ。何をか樂とせむ。この掟は、たゞ、人間の望を絶ちて貧を憂ふべからず、と聞えたり。欲を爲して樂とせむよりは、如かじ、財無からむには、癰疽を病む者、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむには如かじ。こゝに至りては、貧富分く所無し。究竟は理即到等し。大欲は無欲に似たり、

【譯】一體人が財を欲しがるのは、財が出来ると思ふ事がなんでも出来るからである。思ふ儘にしたさに財を求めるのである。財寶のうちでも殊に錢を欲しがると、錢即財として居るのは、なぜかと云と、錢なら、なんにでも代へられる、即ち自分の思ふ所のものが、錢によつてなんでも得られるからである。人の錢を欲しがると斯くの如くであるのに、この大福長者の言を聴け、願ふ所があつてもかなへてはいけない、錢があつても使つてはいけない、と云つてゐる。これが金持になる方法だと云つてゐる。願もかなへず、錢があつても使はなかつたら、それア全く食乏人と同じだ。それでは何も樂みが無いわけだ。この金満家の説いた法則は、その意を釋して斯うも聞くことが出来る。即ち、たゞもう、人間の望を絶つてしまつて、貧を憂へないが宜いのだ、と云意にも聞くことが出来る。金欲しさ、金保持したさの欲を充たす爲の行ひをして、その充ちたる金を樂んで居る(欲しいものも買はずして)よりは、財が無い方が宜いのである。癰疽を病む者は、水で患部を洗ふと氣持よがる。その氣持のよ

さを樂みにするよりは、癰疽を病まない方が勝つて居るのである。斯うして見ると、貧と富とは區別が無い。成佛の界は即ち凡夫の界と同じである。大きな欲は欲の無いのと同じやうなものであるのだ。

【評】こゝの大福長者の云ふ所はまことに實地にあつた人の言で、金儲の至法である。これを如何に後節に兼好が評するだらう、と非常な興味を以て讀み行く心持になる。私は先づこの大福長者の言を讀する。

「人は萬をさしおきてひたぶるに徳をつくべきなり」と先づ云つてゐる。この人は徳即ち富を人間の第一義と見たのだ。これを悪い心がけだと思ふのは間違である。何でも人間は、是非斯う云ことがしたい、と云事を一所懸命に遂げて行くべきものである。この人は長者になると云目的に向いて生の歩みを踏み出した人だ。藝術家が其術の達人にならうと云目的を立て、そこへ進み行くと、どちらが尊いとも卑しいとも云はれぬ人間常住の思に住してかりにも無常を觀すべからず、二宮尊徳翁もこの通りの教を垂れて居る。無常と云ことを生嚙りに知ると、無常だから稼いでもしやうが無いとか、或は、無常だから、生きて居る間にドシ／＼樂めと云やうに思込む。これが誤である。無常と云事も眞である。同時に常住と云事も眞である。事を成さむとする時、この常住の眞を確信して進まなくては駄目である。但し、無常を觀することなかれ」と云人は、己れ既に無常を知つて居るのである。この長者も二宮翁も無常をよく知つてゐるのである。さうしてこれを踏んで、常住を掴んで進む事の、誤でも惡でも無い、價値ある事を知つてゐるのである。自ら矛盾を體得してゐる形になつてゐるのである。次に、

所願をかなへるな、と云つて居る。所願をかなへる爲の蓄財が、所願をかなへては出来ぬ、と云ことを體得してゐるのである。これも矛盾である。この矛盾に安んじて居る長者は、自ら悟つたものである。『小用をもなすべからず』と云のは、其の所願心にきざした時の一時的の工夫である。『心とこしなへに安く樂し』と云界は、何の欲も遂げないでそれで満足して居る界である。しかし、この長者は、この安樂は、自分の家に『錢積りて盡きざる』爲と思つて居る。これは誤であるのだ。使ひもせぬ、又こちらの君か神のやうな、手をつけることも出来ぬ物として居る『錢』は、もはや所謂錢では無いのである。この『錢』は無いのと同じである。即ち實はこの長者は貧者と同じ界にある。それを長者は自覺をしては居ない。しかしこの長者の安心を打破ることは考へ物である。恰度、偶像を拜して、これを祈り、これに頼つて安心して居る人に、偶像の無意義なることを説くのと同じく考へ物である。この長者は、出發點こそ利欲であつたが、もはや大悟の状態になつてゐるのである。使はざる錢が、傍に幻のやうに存在していると云だけの事である。『そもく』から兼好が、この教を評してゐる言は先づこゝに私の云つたやうな意である。

「たゞ人間の望を斷ちて貧を憂ふべからずと聞えたり」と云のを、この大福長者は斯う云意味で云つたのだ、と云つてゐるのでは無い。長者は金持になる法を説いたのである。それは兼好が承認して居る。成程この心持ならば金持になれると兼好もうなづいて居る。しかし斯う云意味が自らこの掟に含んで居る、と兼好は云つたのだ。長者自らの知らない意味なのである。

「癪疽」は即ち「欲」である。癪疽に冷水をそゞぐのは、即ち欲を満足させる形である。癪疽に冷水かける時の快感は、即ち欲の満足の快感である。しかし、この快感は所謂病的快感である。癪疽を病まぬ方の心が、どの位この快感より勝つて居るかわらぬ。貧富一。究竟理即一。大欲無欲一。矛盾一致。

第二百十八段

狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて、舍人が寝たる足を、狐にくはる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかゝりて、くひつきければ、刀を抜きて、これを防ぐ間、狐二足を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師は數多所くはれながら、事故無かりける。

【譯】 狐は人にくひつくものである。堀川太政大臣家で、舍人が寝てゐるうちに、足を狐にくひつかれた事がある。仁和寺で、夜、本堂の前を下法師が通りかゝると、其の法師に狐が三匹飛びかゝつて、くひついたので、法師は刀を抜いて、これを防ぐ。そのうちに狐二足は突かれた。そのうち一足は死んだ。傷つただけの狐と、傷を負はぬ狐と、この二足は逃げた。この法師は方々くひつかればしたが、別條無しに助かつた。

第二百十八段

「堀川殿」太政大臣久我基具の邸を云と。
「舍人」攝關以下、人臣も賜はれば舍人具することあり。
「本寺」本堂。
「下法師」下男やうの法師なるべし。
「事故無かりける」別條なかつた。「ける」とは意を強めたるなり。

【評】動物が、都のあたりにも跋扈して居た頃は、斯う云ふ注意も必要である。まことに兼好の親切な心が見える。純親切で書いて居るので、こゝらには、狐と法師との戦を細かく叙するなどの事はして居ない。

「狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。」一寸見ると何でも無いやうだけれど、斯う云ふことを簡明に叙しようとして困ることがあるものである。「二疋を突く」と先づ叙す。即ち一疋は突かずだ。「一つは突き殺しぬ」は、「二疋を突く」と云以外では無い、其の二疋の一つである。「二つは逃げぬ」で無傷の狐と、負傷の狐とが逃げたことが解る。一寸した事だけれど、よく簡単に、しかも誤解無きやうに書いてある。

第二百十九段

「四條黄門」黄門は中納言の唐名。四條黄門とは藤原隆資のことなり。家も四條と號す、權中納言に任ぜられ檢非違使となる、元弘の初、高時反するに及び笠置に赴く、笠置陥るや僧となりて隠れ、事平ら

四條黄門命せられて曰く、「龍秋は、道にとりては、やむごとなき者なり。先日來りて曰く「短慮の至り、極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、聊いぶかしき所の侍るか、と、ひそかに是を存す。その故は、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に身鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調なり。その次に鸞鏡調をお

ぎて後京に歸り、還俗して本官に復す、延元元年尊氏闕を犯すや、新田義貞とこれを夾撃せむとして敗る、後吉野に至る、正平三年大納言となる、七年男山行幸に隨ひ戦死す、左大臣を贈らる。「命ぜられて曰く私に仰せになるやう。下に云を命ずと云なり、兼好が自らを卑下して書けるなり。

「龍秋」豊原龍秋なり、樂家なり、後醍醐帝に笙を教へ奉る、又後光嚴帝の御師範たり、延文五年薙髮して龍覺といふ、貞治二年閏正月九日卒す、年七十三。「短慮の至り」無遠慮至極のこと。謙遜して云へるなり。「荒涼」過言めきたることと云故斯くいふ、無作法と云にあたる。「……穴」

きて。中の穴盤涉調、中と六との間に神仙調あり。かやうに、間々に、皆一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に、調子を持たずして、しかも間を配る事等しき故に、その聲不快なり。されば、この穴を吹く時は、必ずのく。のけあへぬ時は、物に合はず。吹き得る人難し」と申しき。料簡の至り、まことに興あり。先達後生を恐ると云ふこと此事なり」と侍りき。

【譯】四條黄門が私に御話なさるゝやう、「あの龍秋と云樂人は、樂の道に就ては、實に尊むべき者である。先日われら方へ來て云のには、斯う云ふことを申すは無遠慮至極で、無作法極まることでは御座りまするが（横笛の構造そのものを非難するの故斯く云のである）、横笛の五つの穴は少し不審な點が御座りまするか、と、ひそかに私は存じまする。なぜと申しまするに、干の穴は平調で、五の穴は下無調である。この兩調の間には勝絶調があるのですが、その勝絶調の穴は無い。即ち一調飛んで居る。そして次の上の穴は雙調で、これは飛ばずして直ぐに下無調の次の調である。その雙調の次の調の身鐘調は飛ばして、上の穴の次なる夕の穴は黄鐘調である。その次の調なる鸞鏡調は飛ばして、次の中の穴は盤涉調である。その次の調なる神仙調を飛んで、次の六の穴が登越調と、斯う云風に、各穴の間毎に、皆、一律づつ省いてある（含んである、と云つてもよし）、それに五の穴だけは、上の穴との間

第二百十九段

傳口傳とのみで、甚だ齒痒い。それで上眞行先生を訪うて、非常に御親切な示教を受けて、やつと註解を書き得たのである。先生は云はれた、全くこの通りであります。下無はとかく低くなり易いので、指を雙調の方へ寄せる心持にして、吹くのですが、なか／＼本當の下無の音を出すまでには、練習を積み重ねなければなりません。初學の人を教へるにも、これで實に苦むことです。そして又この景茂の云ひましたことも、全くこの通りであります。笙はこゝにある通り、しらべおほせてありますので、ピアノやオルガンと同じで御座いますが、何しろ笛はたゞ竹に穴をあけただけのもので、息の加減で音を吹き分けるので御座ります。この工合は、これは、しかし廣く申せば、何でも同じで御座りませう。學問の道にもこの心得が要りませう云々、と。

第二百二十段

「何事も、邊土は、卑しく頑なれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢず」と云へば、天王寺の俗人の申し侍りし、「當寺の樂は、よく圖を調べ合はせて、物の音のめでたく整はり侍る事、外よりもすぐれたり。故は、太子の御時の圖、今に侍るを、博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その聲、黄鐘調の最中なり。寒暑に隨ひて、上り下りあるべき故に、二

「邊土」地方。
「天王寺」今の大阪市南區荒陵の東北に接する丘上に在り、聖德太子の創建、四天王寺のこと。
「舞樂」聖靈會の日終日行ふ。
「云へば」兼好が云ひたるなるべし。

月涅槃會より、聖靈會までの、中間を、指南とす。祕藏の事なり。この一調子を以ちて、いづれの聲をも、整へ侍るなり」と申しき。凡そ鐘の聲は黄鐘調なるべし。是れ無常の調子。祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、數多度鑄かへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋ね出だされけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

「黄鐘調の最中」黄鐘調のまん中の音、即ちイ調の四なり。
「涅槃會」釋迦入滅の日に行ふ會、すなはち二月十五日なり。
「聖靈會」聖德太子の忌辰の會、即二月廿二日なり。
「指南」標準。
「祕藏」祕傳。
「祇園精舎の無常院」祇園精舎は西曆紀元前五

第二百二十段

【譯】「なんでも地方のことは、卑しくて、開けないものであるが、天王寺の舞樂だけは、都の舞樂に劣らない」と私が云つたら、天王寺の俗人が次のやうに申しました。「この天王寺の舞樂の時の音樂は、よく標準律に則つて音を合はせるので、音の立派に整つて居ます事は、他所の樂より勝れて居る。と云のは、聖德太子の御時の標準律が、現存して居ますので、それに據るのです。その標準律と云のは、かの六時堂の前にある鐘です。あの鐘の聲は、黄鐘調のまん中の音です。もつとも氣候によつて、音の上下があるから、二月十五日の涅槃會から、同月廿二日の聖靈會までの間の音を、標準にするのです。これは大切な祕傳です。この一音調をもとにして、他の音を整へますのです」と申した。すべて寺の鐘の聲と云ものは、黄鐘調で無くてはならぬ。この黄鐘調は無常の感を傳へる調子である。天然の祇園精舎の無常院の鐘の聲は即ち黄鐘調である。西園寺の鐘を造る際に、黄鐘調に鑄させようとするべし。

百年の頃中印度橋薩羅國の都城舍衛城に建てたる寺、釋迦の説法せし所なり、その西北角に無常院と云あり。
「無常院の聲」無常院の鐘の聲。

「西園寺」山城葛野郡衣笠村大字大北山の西北隅にありきと云、今鹿苑寺の地たり。

「法金剛院」山城葛野郡舊右京西京極中御門の末にあたる、双岡の東南に接す。

云ので。何度もく、鑄なほさせたが、どうも注文通りに行かなかつたうちに、遠い國に黄鐘調の鐘があるのを尋ね出されて、それを用ひられた。法金剛院の鐘の聲も亦黄鐘調である。
【評】こゝに云六時堂前の鐘と云のは、今は焼亡して無い。太子時代のその儘の音を傳へたのを、標準にして居た、と云のも尊いし、又その氣候の影響にも注意した古人の科學的態度も尊い。

黄鐘調と云は頭註の如くイ調である。オルガンの弾ける方は、試みにイ調の音階を長く弾いて見給へ。成程どれも無常聲である。そして他調には、どうしてもこの感が無い。さうしてイ調の中でも、四が最も無常の感が深い。所謂黄鐘調のもなかである。これを弾いてみ給へ。しみじみ古人の研究の到つて居る事が尊ばれる。さて大きな鐘を鑄るのに、出来上つた上で黄鐘調のもなかの聲の出るやうと云には、非常なデリケートな技術を要することであらう。多量の金屬をも犠牲にせねばならぬであらう。ともかくそれが太子時代には出来たのである。しかし西園寺の時になつては、もはや出来なかつたのである。

思ふに、「およそ」以下にはたゞ黄鐘調のみ云つてあるが、これは黄鐘調のもなかを指してゐるのであらう。私の耳の間違、考へ違かも知れぬが、黄鐘調の音の出る鐘と云ものは、さして珍らしいものでは無からう。唯黄鐘調のもなかと云のが減多に無いものなのであらう。無常院のはもとより、西園寺のも、法金剛院のも、唯黄鐘調と云ので無く、黄鐘調のもなかの音なのであらう。ウカとした事は云はれぬが、上野の鐘より、淺草の鐘の方が、黄鐘調のもなかに近いやうに、私には聞えるが、いかゞなものであらう。

第二百二十一 段

「建治弘安の頃は、祭の日の放免のつけものに、異様な紺の布四五端にて、馬を作りて、尾髪には、燈心をして、蜘蛛の網描きたる水干に附けて、歌の心など云ひて、渡りしこと、常に見及び侍りしなども、興ありて爲たる心地にてこそ侍りしか」と、老いたる道志どもの、今日も語り侍るなり。此頃は、つけ物、年を送りて、過差ことの外になりて、萬の重き物を多くつけて、左右の袖を人に持たせて、自らは銚をだに持たず、息づき苦しむ有様、いと見苦し。

「建治、弘安」ともに後宇多天皇の年號。
「祭」賀茂の祭。
「放免のつけもの」檢非違使の廳に使はるゝ下部の稱。もと罪人の放免せられたるを廳に屬せしめられたるを廳に屬するなり、この放免、賀茂祭に従ふ時、身に綾羅錦繡を着、花など種種の飾物を着けて風流をなす習ひあり、この飾を放免のつけ物と云「水干」水干にして製したる狩衣を云、水干とは糊を用ひず水張りにして干したる絹。
「歌の心」蜘蛛のいに荒れたる駒はつなぐとも二道かくる人は頼まじ

第二百二十一 段

【譯】今日老いた道志連と會つたら、こんな話をした。「建治弘安の頃には、賀茂の祭の行列に加はるあの放免のつけ物には、今のやうな贅澤な物をつけず、たゞ妙な紺の布を四五たんで、馬の形を作つて、尾と鬚は、燈心で作つて、それを、蜘蛛の巢を描いた水干を著た上へ、引懸けて、くものいに荒れたる駒はつなぐともと云古歌の意味を云ひながら、通つたものであつたが、例年のことで見なれて居ても、いつも見る毎に、面白い趣向をしたものだ」と

と云古歌の意味を云歩くなりとの壽命院の説なり、この古歌書には出でざるものゝ如し。「興ありてしたる」興ある仕方との意。

「道志」大學寮の明法道(法律科)の者使廳の志に任ず、それを道志と云。

「今日も」道志と會談の日に「こゝ」を書きたるなるべし。

「過差」贅澤。

「息づき」フー／＼忙しく息つくこと。

云氣がしました」と話しました。近來は、つけ物が年々非常に贅澤になつて、さまざまの重い物を、ウンとつけて、重くて獨り歩けないので、左右の袖を手に持つて貰つて、自分には鋒も持たず(昔は持ちたるなり)、息づかひ荒くフー／＼と云つて苦しんで行く體裁、まことに見苦しい。

【評】人間の趣味が、妙に本意以外、枝葉に力を入れるやうになつて、變挺なものを作り上げるものだが、この放免のつけ物など、まことにその見本である。

蘇民將來と云ものは頗る面白い物であるが、近頃は、蓑笠の形を側面に描いたものが出来た。全體が蓑笠の形であるのに、繪を描き添へたので、うるさくなつた。芝の千木箱でも、近頃賣るのは、藤の繪も細くなり、一方には牡丹みたいなものを描いて、箔をおしたりなんかして、嬉しみが無くなつた。

自然物でも、妙に細工をして、アチコハシをすることが往々ある。東京では八重山吹の培養に心を入れ過ぎた爲、ひとへの山吹と云ふものは、絶無の姿になつて了つた。

もつともこの過差趣味は、或所まで行くと、ガラリ壞れて、簡素にかへるやうになるものである。西洋の畫が、ゴッホアスな筆のみ尊重して來たら、忽然として印象派など云ものが産れたやうに。

第二百二十二段

「竹谷」山城の醍醐のうちの地名。

「乘願房」淨土宗の僧、傳不明。

「東二條院」後深草天皇の後、公子。

「勝利」すぐれたる利益と云ふこと。

「光明眞言」唵阿謨伽尼囉左義摩賀母捺囉合麼拈鉢納麼合入轉合囉鉢囉合觀野畔と云陀羅尼(即ち眞言、即ち呪)を指す、不空羂索毗盧遮那大灌頂光眞言と題する經にこれを擧げ、文に「若有衆生隨處得此大灌頂光眞言二三七遍經耳根者即得除滅一切罪障若諸衆生具造十惡五逆

竹谷 乘願房、東二條院へ參られたりけるに、「亡者の追善には、何事か勝利多き」と尋ねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども「いかに斯くは申し給ひけるぞ。念佛にまさること候ふまじ」とは、など申し給はぬぞ」と申しければ、「我が宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく、稱名を追福に修して巨益あるべし」と説ける經文をば見及ばねば、何に見えたるぞ、と重ねて問はせ給はゞ、いかゞ申さむ、と思ひて、本經の確なるにつきて、この眞言、陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

【譯】竹谷の乘願房が、東二條院へ參られたところが、院が「亡者の追善には、何が一等利益がある」とお尋ねになつたれば、房答へて「光明眞言と寶篋印陀羅尼」と申した。あとで弟子どもが乘願房に云やう「なぜあんなお答をなさつたのです。念佛が第一等で、念佛の上越すものはありませんまい、となぜ仰しやならなかつたか」と云つたれば、房答へて「勿論自分

第二百二十二段

第二百二十四段

「有宗入道」安倍有宗と云人と云。
「尋ね……」兼好方へ。

陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、尋ねまうで来りしが、先づさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましく、あるべからぬ事なり。道を知る者は、植うることを務む。細道一つ残して、皆島に作り給へ」と諫め侍りき。まことに少しの地をもいたづらに置かむことは、益無き事なり。食物、薬種などを植ゑおくべし。

【譯】 陰陽師有宗入道が、鎌倉から京の方へ上つて、私の宅へも訪れたが、家に入るや直に、「この庭が、むやみに廣々としてあるのは、あさましいことで、よくないことである。道を知る人は、物を植ゑて培養することを務めるものだ。細い道を一筋だけ残して、庭のありたけ皆島におしなさい」と忠告をした。成程、少しの地面でも、遊ばせて置くと云ことは、無駄なことである。食料になる物が、薬になる物などを植ゑておくがよいことである。

【評】 こゝにゆくりなく兼好の家の様子が、漠然ながら見えて居るのは面白い。いつ頃の住居が知らぬが、どうも出家後であらうと思はれる。「家にあたりたき木は」などと書いて居るが、それは理想を書き、又人の爲にすゝめるやうな態度で書いてるので、自分の住居には、

庭の風致など云ことも構はないで、だゞツびろく、何も植ゑず裸にしてある。かうしておく兼好の心持もわかる。そこへ有宗入道と云珍客が来た。この人がはひつて来るなり直ぐ、庭の非難をしたのは、まことに珍客で、兼好の友だけある。兼好も成程と思つて、これから胡瓜ぐらゐ植ゑたかも知れない。こゝにも「薬種」と云ふことを忘れずに書いて居る。

第二百二十五段

多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に、興ある事どもを選びて、磯の禪師と云ひける女に教へて、舞はせけり。白き水干に鞘巻をさしせ烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師が女静といひける、この藝を繼げり。是れ白拍子の根元なり。佛神の本縁を謠ふ。その後、源光行、多くの事を作れり。後烏羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。

【譯】 多久資が白拍子の起源を次のやうに説いた。もと入道信西が、舞樂の手の中で、面白い所を選んで、斯様の舞を作り、これを磯の禪師と云女に教へて、舞はせた。その舞の姿は白き水干に、鞘巻をさしせて、烏帽子をかぶらせたから、男舞と稱した。この禪師の女に静

第二百二十四段——第二百二十五段

「多久資」俗人なり、今も多家あり。
「通憲入道」信西のこと。鳥羽崇徳近衛の三朝に厩事し日向守に任ぜらる、天養元年少納言となる、幾も無く薙髮して圓空と改め又信西と改む、保元の亂後藤原信賴と源義朝と結んで信西を殺さむと謀る、信西天變を見てこれを察し大和に走り地に穴して隠る、源光泰の爲に獲られ首を梟せらる。平治元年十二月なり。

「舞」舞樂。
「碓の禪師」一に前司に作る、舞妓なり、讃岐國大内郡小碓の人。
「鞘卷」短刀の錐無きもの、抜く時鞘と共にぬける故下緒を鞘に巻きつけて腰に結びつけ置く、故にこの名あり。

「ひき入れ」かむること。「静」源義經の妾、義經に吉野にて別れて後鎌倉に送られ義經の所在を詰問せらる、知らずと答ふ、政子の切望より鶴岡社頭にて舞をなす、頼朝見るあるに憚らず、義經を慰ふる情をうたひて舞ふ、既にして義經の胤を生む、頼朝安達清經をしてその子を殺さしめ、静を京に放還す、政子同情して物をおくること多し。

正五位下河内守兼大監物に任ず。
「龜菊」とも京の白拍子後鳥羽上皇の寵を受く地を攝津に賜ふ、地頭無狀なり、龜菊訴ふ、上皇その裁判を北條義時に命ず、義時きかず、これより公武隙あり、院隱岐に流さる、龜菊之に隨ふ。

「信濃前司行長」前司とは前の國司と云こと、藤原行長とて後鳥羽天皇の伶人たり。
「稽古」學問あることを云。
「樂府」漢武帝うたひ物を作る役所を設く、これを樂府と云、こゝにて司馬相如等の作れる詩賦に節をつく、後にはうたふ詩をすべて樂府と云へり、又後にはこのうたひ物の詩の體

と云のがあつた。この辭が、この男舞の藝を繼いだ。これが白拍子と云ふものゝ起源である。その諸ふ所は佛や神の由来であつた。その後、源光行が、いろ／＼の曲歌を作つた。後鳥羽院の御作りになつたのもある。院の御作は、その寵妓龜菊にお教へになつたさうだ。かう云説を多が申しました。

【評】この段は、歌舞に就ての歴史やうのものには、屹度引用されてる所である。

「男舞」と云名のわけは、こゝで解るが、「白拍子」と云名のわけが、こゝには解いてない。白拍子と云のは唯物無しに舞ふのだ、と云説もあるが、唯物はあるのである。烏帽子や刀を著けるのはあまり荒々しいと云ので、後には水干に袴ばかりで舞ふと云が、それもこの舞の所因にはならぬ。この白拍子と云のはもと拍子の名である。興福寺延年の舞の次第を書いたものゝ中に、十七番白拍子、十四番相亂拍子、などと書いてあるさうだ。即ち白拍子で舞ふ相亂と云拍子で舞ふと云ことである。この拍子の名だと云考證は歌舞音楽略史に見えて居る。同書に小杉櫛郎氏の説を擧げて、「今の能藝道成寺の舞拍子は、彼の白拍子の遺風にして、其一端をうかゞふに足れり」とある。又白拍子は數へるものらしい、との考證も載せてある。「白拍子の根源なり」と書いたのは、禪師が男舞のはじめ、靜から白拍子と云つたと云のは無い。この二人を引括めて、後の白拍子のもとだと云つたのである。信西の案じた舞が、白拍子と云拍子を取つたものなのであらう。

内田魯庵氏は、新しい藝術は、ズツと古い藝術をモダーナイズすることによつて起し得られる、そしてそれが力強いものになる、今日に於て、舞樂をモダーナイズする事事は、非常な效果を得るであらう、と云ことを頃日論じられたが、それはそれに違ひない。この通靈入道と云人は諸道に通じて、調子は稍違ふが、一寸聖徳太子に似た天才の人である。この人が魯庵氏と同じ考を以て、自ら舞樂をモダーナイズして、實現させた。果してこれが強い新潮流となつて、後の女歌舞伎のもとになるまで榮え行はれたのである。こゝには「佛神の本縁を歌ふ」とあるが、後には戀愛慶賀の章をも歌つたのである。

第二百二十六段

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の譽ありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七徳の舞を、二つ忘れたりければ、五徳冠者と異名をつきけるを、心憂き事にして、學問を棄て、遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝ある者をば、下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて、語らせけり。さて、山門の事を、殊にゆゑしく書けり。九郎判官の事は詳しく知りて、書き載せたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くの事どもを、記し洩せり。武士の事、

第二百二十六段

裁にならひたるものにして實はうたひ物には使はぬ詩をも樂府といへり、ガクフなれど我國にてはガフとよみならはせり。

「樂府の御論義」支那の樂府（うたひ物としての詩）について説を問ひ合ひ研究すること。「番……論議の人数に召さるゝを、番に召さると云。

「七徳の舞」又、秦王破陣樂と云、唐の太宗秦王たりし時劉武周を征して功あり、軍中にて秦王破陣樂を作る、即位に及び、宴會必ずこれを奏す、後これを舞にす、其の體一百廿八人銀甲を被り戟を執り來往疾徐擊刺の象をなす、後、魏徵虞世南等に命じ歌詩を作らしめ更に七徳舞と名づく

云、唐の三大舞の一なり、我國に傳はりたる秦王破陣樂は、これとは別にて實は小破陣樂と云ものなりと云。

「七徳の舞を二つ忘れたりければ」書き方稍變なれど、意は、七徳舞の七徳の中二徳だけ忘れて云ひ得ざりしを云ならむ、この時の論義の問題となりしは、新樂府中の、白樂天が七徳舞を見て作りたる「七徳舞」と云樂府に就て、この七徳は何々と云ことが問題となりしなるべし、宋の郭茂倩が撰したる樂府詩集と云一百卷の書あり、陶唐より五代に至る樂府をあつむ、これらにある樂府を論議せしなるべきか、白樂天の七徳舞白氏文集にあるはもとよりなれどこの書九十七卷にも出でたり。

弓馬の業は、生佛、東國の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は、まなびたるなり。

【譯】 後鳥羽天皇の御時に、信濃前司行長と云俗人は、學者としての名譽を博して居たが樂府の御論義の中に召し加へられた際、七徳の舞の七徳は何々、と云ことを云はねばならぬにあたり、その中の二徳を忘れて云へなかつた爲に、五徳冠者と云異名をつけられたので、これを耐へられぬ恥辱に思つて、學問を止めて、僧になつたのを、時の高僧慈鎮和尚は、一藝に長じた者は、たとひ下男風情のものでも、自分の許に置いて、愛護して置くと云人であつたから、この信濃入道（僧になつたれば斯く云）を、養ふことにされた。この入道が、平家物語を作つて、生佛と云盲人に教へて、これを語らせた。この平家物語と云ふものは、斯くの如く延暦寺に居た人の手に成つたから、だから延暦寺の事を、殊に堂々と書いて居る。義經の事は詳しく知つて居る人と見えて、詳しく書いてある。範頼の事は、よく知らなかつたと見えて、大分其の事蹟が書き洩らしてある。武士の事、弓馬の事は、生佛が東國の者であるので、便宜があるので、生佛が東國武士に訊いてやつた。それを材料にして行長がその方面の事を詳しく書き得たのである。今の平家うたひ琵琶法師のうたひ方は、一種特色ある聲をするが、あれば、この生佛の生れつきの聲を真似てうたひ來つたのである。

【評】 平家物語の著者を紹介して居る。同時に所謂平曲の由來を明らかに説いて居る。平家の著者に就てはいろ／＼の説があるが、やはりこの行長と云説が最も中つてゐるらしい。兼好はなか／＼斷言する人では無い。十分根據があつてこそ「平家物語を作りて」と斷言して居るのである。そして、この平家の出來る所以が、いかにも自然では無い。

館山漸之進氏の考にも、行長が平家物語を書いたに違ないと云事に歸著して居る。同氏曰く、慈鎮は已に愚管鈔を作つて、神武天皇より始まり順德天皇に終り、源平の興亡も目撃して之れを書いた。行長は慈鎮に師事し、平氏の歴史を作り、勸善懲惡を主眼とし、佛教に據つて毀譽褒貶を爲た。その全篇は、平家由來記の所謂佛語最上の文體で、深く佛門に入つたもので無くては、この種の文章を成すことは出來ぬ。これを書くに就ては慈鎮が相談相手になつたに違ない。と云つて居る。

平家物語は執筆は行長であるが、慈鎮と生佛とが大いに助力して居る。そして「語り物」としての完成は、行長及び生佛の協力の結果であらう。勿論慈鎮もこの方にも助けて居たことであらう。著く藝術を尊重する慈鎮であるから、斯う祭せられる。我々が子供の時に歌つた「春の彌生」のあの今様をも作つた慈鎮であるから、斯う祭せられる。

館山氏の「平家音楽史」に引用した「平家由來記」には、行長の雅樂、生佛の聲明、歌道の達人たる慈鎮の披講發聲の律呂を平曲の元素として數へて居る。歌の披講をこゝに數へたのは、少し強ふる傾きがありはしないか。そんなことを云はずとも、藝術尊重家で、現に語り物の作者であつた慈鎮であるから、僅に歌の披講法ぐらゐを提供はしなかつたでせう。そして語り物の方で云へば、行長の方が達人であつた。あれだけの高僧のことであるからもとより聲明のことにも通じて居たらう。そして其の方では生佛の方が達人であつた。だから慈

七徳とは禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豊財、と云七つにて、王者の徳を数へたるなり、このうち二徳を行長が忘れたるなり「冠者」元服したる少年をもいへど、こゝのは六位無官の人の稱なるなり。

「異名をつきける」異名をつけられたと云に同じ、かゝる云方類例多し。「慈鎮和尚」慈圓と云、十一歳延暦寺の座主覺快に師事して剃髮し、十六歳一身阿闍梨に任ず、元暦元年護持僧となり、建久三年權僧正に任じ座主に補し、七年吉水に退居、建仁元年再び座主に補し、三年大僧正となる、後座主を辭したるも、重任四度に至る、嘉祿元年九月二十五日寂す、壽七十一、仁治元年慈鎮と云勅諡を賜はる。「不便にせさせ給ひければ」愛護するを云。○「扶持」生活の料を給すること。○「生佛」又、性佛とも書けど、生佛の方

鎮と云人は、二専門家の上に立つて、所謂監修の大役をしたと見て宜い。平家物語と云ふものは、たゞ讀み物としても、大したものである。世界の文壇の一産物として列陳しても恥かしからぬ、長篇の叙事詩である。これが成る最も第一の動機が、七徳の中の二つを胸忘れた爲とは、まことに因縁と云もの、不思議を思はない訣には行かぬ。七徳ぐらゐの事は、當時の一寸した人は誰でも知つて居ることであつたらう。それに俗人中の學者たる行長が、それを忘れてゐたと云。事がいかにも意外で、群小の快哉を呼ぶ底の事である。「五徳冠者」まことに群小の聲である。さきの百九十三段の「くらき人の人を測りてその智を知れりと思はむ更に當るべからず」と云語をこゝにも思ひ出す。しかしこの事は不思議に慈鎮行長生佛を一堂に會せしめる因となつて、當時まだ結著したての源平の争を、美しい語り物に仕組むに至つた。

慈鎮和尚と云人の、宗教以外の人格もこゝに書顯されて、ゆかしく思はれる。蒲冠者のことが書き足りない、と缺點を指摘して居るのも面白い。生佛の生れつきの聲を學んだと云事は、今日の我々でも、成程さうかなと點頭かれる。

正しかるべし、綾小路表時のことなり、叡山の檢校職なりし人にて、聲明の妙手なりと。○「さて」だから。○「山門」比叡山延暦寺の異稱。○「九郎判官」源義經のこと。○「蒲冠者」源範頼のこと、遠州蒲生郡にて生れたる故蒲冠者と云。○「琵琶法師」琵琶に合はせて平家を語る盲法師。○「まなびたる」學の意なれど、こゝにては眞似ると云意多し

第二百二十七段

六時禮讚は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りて、勤にしけり。その後、太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて、聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始まり。法事讚も、同じく、善觀房はじめたるなり。

【譯】六時禮讚は、法然上人の弟子の安樂と云僧が、いろ／＼の經の文句を取り集めて綴つて作り、六時のお勤にそれを誦した。その後、太秦の廣隆寺の善觀房と云僧が、それに節をつけて梵唄にした。これが一念義流の念佛の初めである。これを唱へることは、後嵯峨天皇の御代から始まつた。法事讚も、やはりこの善觀房が始めたのである。

【評】六時禮讚（即ち往生禮讚）も法事讚も、支那の僧善導の作であることは、誰も知る所である。それ故、どの註も、こゝは兼好の誤として居る。誤として置けば、何の事も無いけれども、兼好の時代をあまり離れて居ない頃の事、殊に僧の兼好、殊に法然門の事をよく知つて兼好にして（所々に法然門の事を書いてあるのでわかる）、こんな誤をして居るとは、どうも信ぜられぬ。そして繰返し云が如く、兼好はムザとは斷言しない人である。

第二百二十七段

「六時禮讚」唱文の名なり、日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、午時、の六時に佛を讚嘆し禮拜する爲に唱ふる文なり。「安樂」京都の人、出家して法然上人に師事す建永元年十二月同門住蓮等と共に鹿ヶ谷に六時念佛會を開き、晝夜六時に往生禮讚を誦す其曲調哀婉、聞く者皆涙を流し自ら淨土往生を願ふ、同月九日後鳥羽上皇熊野山に御幸ありその時宮女に私に宮を出で鹿ヶ谷に至り六時念佛會に詣で感泣して髪を削るあり、此事上皇の御聞に達し、仰せにより安樂住蓮等を六條河原に斬らしめら

る。
 「太秦」山城葛野郡太秦なる廣隆寺を指すなり太秦寺とも云、此寺は聖徳太子開基、秦川勝創建、全部にはあらねど現存す、殊にその桂宮院の如きは初創以來所替なしと云。
 「善觀房」傳知れず。
 「ふしはかせ」節博士と書く、たゞ節と云に同じ。
 「ふし」又はたゞ「はかせ」とも云、はかせは拍子の音轉かとも云。「一念の念佛」參考に法然の末弟には一念義多念義と云流派あり一念は一念、佛を頼まば、往生決定とするなり。多念義とは一生のうち名號の數功を積まば、往生出來すとなりこゝの一念はこの一念義流と云ことならむと云。

安樂と云人は上欄に書いたやうな事の爲に、斬罪に處せられたのである。この宮女を感動せしめて、剃髮せしめた、と云事は、非常な事である。俗の方面から見ると、實に安樂は危険人物であり、六時禮讃は危険唄である。

私はどうも斯う思ひたい。こゝの六時禮讃と云のは、かの善導作のとは別物で、安樂が作ったものであつたらう。それが、危険唄と認められたので、安樂斬られて後、もはや唄つてこれを唱へるものが無くなつたに違ない。又唱へる者が若しあつたら罰せられたに違ない。斯くして世には唱へられず、たゞ六時禮讃と云ものが、讀むものとして、兼好の頃に残つて居たので、その考證をこゝにしたのではあるまいか。

法事讃のこの書き方は、甚だ曖昧であるが、ともかく書續き工合を見ると、善觀房は節のみを附けたものらしい。そしてこの法事讃も、多分善導作で無く、それに倣つて、日本僧が別に作ったものであらう。

或はこゝに所謂六時禮讃、法事讃が、善導作のと紛れる爲に、今は別の名になつて存在して居ると云やうなことはありはしまいか。

それから「一念の念佛」と云のは、諸註通りに、上欄に書いては置いたが、念佛には藥師佛を念ずるとか、釋迦を念ずるとかいろ／＼あるが、その阿彌陀のみを念ずるのが、今も所謂念佛である。この安樂作の六時禮讃が専心に阿彌陀のみを頼る讃のはじめだと云のでは無からうか。「一念」が果して私考の如くば、善導の六時禮讃は一念々佛ぢや無い、阿彌陀以外にいろ／＼の佛を禮讃して居る。

赤堀又次郎氏曰く空也念佛の和讃の中にもある古く傳はれるものの中に「じくわうほどなくうつりきて五更のそらとぞなりにけるれん／＼ねじやうの我いのちいつか生死におちざらん」と云ふあり。これは正しく往生和讃の中に華嚴經より引ける後夜の偈 時光遷流轉 忽至五更初 無常念々至 恒與死生居 勤諸行道者 勤修至無餘の譯なり。他の五首もありけむ。これが安樂作、善觀房節博士をつけしものか。

第二百二十八段

千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人始められけり。

【譯】 毎年やる千本の釋迦堂の念佛は、文永の頃に、同寺の如輪上人が始められたものである。

【評】 この釋迦念佛を本當に創始したのは、肥後生れの釋定覺と云僧で、寛仁の初めにはこれを始めたのが、後絶えたのを、如輪が再興したのである。こゝに「始められけり」と云のを、創始では無いからと云つて咎めるもいかが。

釋迦念佛は引接寺（通稱閻魔堂）でやるのだとも云。又實際そこでも行つたに違ないらしいが、これは、もと釋迦堂前でやつたのが閻魔堂前へ移つたのか。又は閻魔堂でも釋迦堂にならつて別に始めて、閻魔の方が、後まで長く續いたのかも知れぬ。

第二百二十八段

「千本の釋迦念佛」千本は京都上京北野社の東北の地名、この千本の地に大報恩寺と云寺あり、通稱千本釋迦堂と云、今、上立賣通千本の西にあり、こゝにて毎年大念佛を催したるなり、釋迦堂念佛と云を略して釋迦念佛と云なり。
 「文永」龜山天皇の年號「如輪上人」大報恩寺の僧、澄空、又如輪と云、

又明院律師と云、寂年壽、知れず。

「妙觀」攝津勝尾寺の僧何處の人たるを知らず光仁天皇の寶龜八年同寺の觀音像を作る。「立たず」切れず、と云と先づは同じ意。

第二百二十九段

よき細工は、少し鈍き刀を使ふ、といふ。妙觀が刀は、いたく立たず。

【譯】よい細工をするには、よく利れる刀はいけない、少し鈍い刀を使ふものださうな。あの名佛工妙觀の使つた刀も、よく利れる刀では無い。

【評】妙觀の刀がよく立たないものだったと云事は、今は何にあるかわからぬが、當時は何かこんな事が載つて居たものであらう。妙觀ならずとも、工匠は、多少これを皆心得て居ることであらう。利れる刀はツイ誤つ。まことに人間のよく利れる人と、少し鈍き人との有様を其儘である。この言は簡であるが、讀む者をして暫く息をひそませる底の言である。

芭蕉の「笠張説」に、「草屨にひとりわびて秋風さびしき折々、竹取のたくみに習ひ、妙觀が刀をかりて、自ら竹をわり、竹を削つて、笠つくりの翁となる」とある。この「妙觀が刀」は、この段を取つたので、切れない刀と云ことも含めて斯く云つたのであらう。

第二百三十段

五條の内裏には、化物ありけり。藤大納言殿、語られ侍りしは、殿上人

ども、黒戸にて、碁を打ちけるに、御簾をかゝげて見る物あり。誰と見向きたれば、狐、人のやうについ居て、さしのぞきたるを、「あれ、狐よ」と、動亂まれて、惑ひ逃げにけり。未練の狐、化け損じけるにこそ。

【譯】五條の内裏には化物が居た。藤大納言殿が私にお話になつたには、殿上人達が、五條内裏の黒戸の室で、碁を打つてると、何だか御簾を上へ持上げて覗く物がある。誰だ」と云ひつゝ、其方を見ると、狐が、人間のやうにチヨイと坐つて、のぞいて居たので、「あら、狐だ」と皆騒いだので、狐はあわて、逃げて行つた。これは化けることに不熟練な狐が化け損なつたの見える。

【評】「未練の狐化け損じけるにこそ」と云のを、滑稽趣味であらばしたと評する人があるがこれは兼好が斯う信じて書いたものであらう

第二百三十一段

園別當入道は、雙無き庖丁者なり。或人の許にて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、別當入道の庖丁を見はやと思へども、たやすく打出

第二百二十九段——第二百三十段——第二百三十一段

下京の葛籠町燈籠町の間がその遺址なりと云初め藤原實長の邸にて後に六條、高倉、安徳三帝の御所となれり。こゝに書ける時は皇居たる時にあらず、あき家のやうにて時々殿上人など俱樂部のやうに使ひたるらし。「藤大納言殿」藤原爲世を指すならむとの説あり、又藤原公明との説もあり。「とよまれて」騒がれて「未練の狐」化けることに未熟の狐。

「園別當入道」藤原基氏と云人にて、正三位參議檢非違使別當、天福

二年入道して圓空と云弘安五年十一月十八日七十一にて薨すと云。「庖丁者料理の名人。煮炙などの名人にあらず魚鳥を切り調へる法に達したる人を云、その切り調へるところの手際の美しさを觀賞するなり。

「いみじき立派な。」
「打出でむ」云ひ出さむ
「さる人にて」人の心を察する人。

「百日の鯉……」百日續けて鯉を料理するを云畫工が達摩など日課に一つづつ描く類なり。「申受けむ」こちらへいただいて切つて見ようとなり。

「興ありて人ども思へりける」興あることに思ふと云ふに同じなるべし。或は「ありて」は「あり」との誤寫かも知

れず。
「北山太政入道殿」西園寺公經公。

「ふるまひで」氣取つて趣向して。
「ついでをかききやうに……」何々の祝とか、何々を見せる爲とか、何か然るべき饗應の口實の面白きを作りて。こゝの「ついで」機會、折、など云にあたる。「其事と無くて」別に何の祝と云でも無く、ただ漫然と。
「惜むよし」これに我が愛惜するものとの様子をして。
「負けわざ」物を賭けて勝負事し、負けた方が賭物を出す、それを、まけわざと云。
「ことつけ」託すること

でむもいかゞと、ためらひけるを、別當入道、さる人にて、「この程、百日の鯉を切り侍るを、今日^{けふ}缺き侍るべきに非ず。まげて申受けむ」とて、切られける、いみじく、つきづくしく、興ありて、人ども思へりける、と、或人、北山太政入道殿に、語り申されたりければ、「かやうの事、己^{おの}れは、世にうるさく覺ゆるなり。」切りぬべき人無くば、賜^{たま}べ、切らむ」と云ひたらむは、猶よかりなむ。何條、百日の鯉を切らむぞ」と宣^{のたま}給ひたりし、をかしく覺えし、と、人の語り給ひける、いとをかし。

【譯】 圓別當入道は、庖丁の無比の達人である。或人の所へ人々會合して、そこに入道も居た時、そこへ立派な鯉を贈物に出したものがあつた。人々は皆、この鯉の庖丁を、入道殿にして貰つて、拜見したいなア、と云氣が皆にあつたが、心安げに無遠慮に、一つ庖丁を願ひますなどと云出すも無禮と、云ひたいのを躊躇して居たが、この別當入道は、人の心を察する通人で、自分から「このごろ中、私は百日續けて鯉を切ることを思立つて、毎日切つて居ます。今日こゝへ來てる爲に切らないで居ると云ことは氣持が悪い。幸ひのこの鯉、これは無理にお願しても、私に切らせていたゞきませうと云つて、切られた。この事が、いかにも氣轉がき、折に合つた事で、興味のある事だつた、と人々が感心した。斯う云話を或人が北山太政入道殿にお話したところが、北山殿いはるゝやう、「さう云風のことは、私は甚だう

るさいことと思ふ。百日の鯉を切つて居るからなどと、そんな理由を述べること無しに、たゞ、「切る人が無ければ、こつちへ下さい。私が切りませう」と云なら、まだ宜からう。なに、百日の鯉など切るものか、そんなことはウソさ。ウソまで云つて切らすとものことだ」と仰つたのを、味ある御言と思ひました、と人が私に話したが、私も大いに面白く感じました。
大方、ふるまひで興あるよりも、興無くて安らかなるが、勝^{まさ}りたる事なり。客人の饗應なども、ついでをかききやうに取りなしたるも、まことに宜^よけれども、たゞ其事と無くて取り出でたる、いとよし。人に物を取らせたるも、序^{ついで}無くて「これを奉らむ」と云ひたる、まことの志なり。惜むよし、て、乞はれむと思ひ、勝負の負けわざに、ことつけなどしたる、むつかし。

【譯】 すべて、趣向を凝らして興味をあらせるよりも、特に興味と云ものも無くて、スラスラした方が、よいのである。客を招いて饗應をするに云やうな場合にも、月見とか、何祝とか、新宅の披露とか、何か其の折を面白く捕へて、招待すると云のも、それアマことに宜い事ではあるけれども、たゞ何の爲と云ことも無く、漫然と、馳走を出すに云のが、大に宜い。人に物を贈るにも、何のキツカケも無く、「これ上げませう」とスラリ云つて、贈るのが本當の志と云ものである。これは私の大切にして居るものと云ことを云つたり何かして、欲

「むつかし」スラリとしたことの反對。

しがらせ、欲しいと云つたら遣らうと思つてたり、又た遣つては面白みが無いからと思つて、その物を賭けて勝負事して負け、さうして其の物を遣るなどと云ことは、ヤ、コシいとて厭味だ。

【評】 園別當入道が、この時品格を保つ積りで、衆望に反して、切らないで居たら、それは百日の鯉云々と云つて切るより、遙に劣る。切つたのは大いによいのである。しかし、たゞ切れば宜かつた、切る理由を作つたのが悪い、と太政入道が云のである。別當は、皆の望みを察して、切らうと思つたが、たゞ切ると云のを「變なもの」と思つた。だから「百日の鯉云云」と云ウソを云つて、皆の爲に切ると云でも無いと云ふことにして、切つたのである。この趣向がうるさいと云つたのである。この「百日の鯉」は、凡人我々は實によくやることである。どうもいつも不在で御氣の毒様」と細君が云と「いえなほ此邊へはよく参ります用がありますので」などと云のも「百日の鯉」である。先方に氣を痛めさせまいとの意で云ウソであるけれども、それよりは、失望して言少なに歸ると云方が、どんなに宜いか知れぬ。物をやるにも、やりたいから遣る、それが最も嬉しいことである。すべて趣向ほど厭味なのは無い。厭味は趣向から起るものである。興味は無趣向から起るものである。會談なども、偶然落合つて談笑する時の方が、打合はせて集つた時より、面白いが當なのも、この理から來るのである。

第二百三十二段

「見様」容姿。「史書」支那の歴史の書

「物語」平家。「柱」琴ではサと云もの「いふに」々の場の誰彼が云ひたるなり。「爪を生したり」爪を長くのばして居た。爪にても琵琶を弾くなり、必ず撥のみにて弾くにあらず、琵琶ひく爪のきり方四辻殿の記録にありとぞ。「その沙汰にも及ばぬことなり」何も習はずともよいことだ。

すべて、人は、無智無能なるべきものなり。或人の子の、見様など悪しからぬが、父の前にて、人と物云ふとて、史書の文を引きたりし、賢しくは聞えしかども、尊者の前にては、然らずともと覺えしなり。

【譯】 すべて、人間と云ものは、無智無能であるが宜いのである。或人の子が、それは容姿など見苦しくない子であつたが、父の前で、客人と話をするのに、支那の史籍の文を引いて云つたのは、それア聞いて學才あるとは思はれたけれども、尊い人の前などでは、こんなことを云はぬがよい、と私は思つたのです。

又或人の許にて、琵琶法師の物語を聞かむとて、琵琶を召寄せたるに、柱の一つ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、在る男の中に、悪しからずと見ゆるが、「古き柄杓の柄ありや」など云ふを見れば、爪を生したり。琵琶など弾くにこそ。盲法師の琵琶、その沙汰にも及ばぬ事なり。道に心得たるよしにやと、かたはら痛かりき。「ひさくの柄は、ひもの木とかや云ひて、よからぬ物に」とぞ、或人仰せられし。若き人は少しの事も、よく見え、悪く見ゆるなり。

【譯】 又或人の家で、人々集り、私もそこに行つてた時、琵琶法師に平家語らせて聞かう

第二百三十三段

「道に心得たるよしにや」琵琶の道はおれは知つてゐるぞとそれを一座に知らせたさに、かう云つたのか。
「ひもの木」檜物木、なり。檜のうす板をわけて作るまげ物を檜物と云、檜物につかふ木、と云こと、檜物によき材は使はぬことなり、その材の悪しきをそしる語なり。
「よからぬ物に」よからぬ物なるに、の意。

と云ことになつて、琵琶を持つて來させたところが、柱が一つ落ちて居たので、人々「すぐ拵へてつけるがよい」と云と、一座の中に、見苦しくない男が、「古い柄杓の柄がありますか」などと云出した。其男の手を注意すると、爪を長くのばして居る。さては琵琶でも弾くのと見える。盲法師の琵琶のことなど、何もとくに習はなくてもよいことだ。おれは琵琶のことを知つてると云ことが、知つて貰ひたさに、あんなことを云つたのだな、と思はれて、厭だつた。後に、この事を或貴人にきいたら、其方は「柄杓の柄は、檜物木とやら云つて、よくないものだのに」と仰せになつた。若い人といふものは、一寸した事をして目立つて、それがよくも見え、悪くも見えるものである。

【評】「さらす」とも「見えしなり」とあるのを見れば、史書引用の時に、兼好は其席に居たのである。この「なり」押へつけた語で、強みがある。

琵琶の時にも、兼好が其座に居た。「爪を生したり」と云のは、兼好が、手もとを注意したのである。兼好と云人の心持が、よく出て居る。

「若き人は少しのことよく見え、わろく見ゆるなり」とは、老人は、あれば老人だからと其人のものはや直すとの出来ない世界をよく此方が知つてゐる。そして、許してやる氣味で對するから、即ち、多くを期待しないで對するから、よいことがあつても、あの人はあそこは宜いが、他に斯う云悪い方面がある、と、對者がもう知つて居り、又そのよき事も、屢見慣れて居る故、さして感服する氣にもならず。悪い事があつても、同じ趣で、あの人はいつもあつたのだ、と見許してやるのであるが、まだ己が世界の固まつて居ない「若き人」に對しては

人が一舉手一投足に注意をする。對者はこの今發展しつゝある人に對して、多大の興味を以て、期待を以て對して居る。だから、よい事も、悪い事も、著く人の目に立つのである。

有智有能だと、ツイ通をいひたくなる。さうして飛んだ厭味を放散する。だから「無智無能なるべきなり」と戒めたのである。私は更に云。有智の極、無智になり、有能の極、無能になるべきである。

第二百三十三段

萬の咎めあらじと思はば、何事にもまことありて、人を分かず、恭しく、言葉少なからむには如かじ。男女老少、皆さる人こそ宜けれども、殊に若く形よき人の、うるはしきは、忘れ難く思ひつかるゝものなり。萬の咎は、馴れたる様に上手めき、所得たる氣色して、人をないがしろにするにあり。

【譯】人若し悪い所が少しも無いやうにしたいと思ふなら、何をするにも慎重の態度で爲て、誰に對しても丁寧にし、あまり口數をきかぬと云風にして居るに、越した事は無い。男でも女でも老人でも、若い人でも、すべて人たる者は、斯う云人柄であるのが宜いのだけれど、とりわけ、年の若い人で、容姿の美しい人が、言語動作の端然として整つてゐるのは、一

第二百三十三段

「咎」過失と云程のこと「まことありて」上ツ調子にならぬを云。「人を分かず」何人に對しても。「うるはしき」端麗の意たゞ美しと云にはあらず。こゝにては、まことあり恭しく言少きを指す。「忘れ難く思ひつかるゝものなり」あゝ、よき人なる哉と深く印象さるゝを云。